

ウィトゲンシュタイン最後の思考

ー『確実性について』第四部：§§300-676 を巡ってー

鬼 界 彰 夫

私は完全な確実性をもって行動する。しかしこれは私自身の確実性である(『確実性について』§174)

そして知の概念は言語ゲームの概念と一体となっている。
(同 §560)

目 次

序 『確実性』第四部とウィトゲンシュタイン最後の思考

1 『確実性』第一部から第三部までの思考と第四部の思考の起点

2 語られることのない言語ゲームの基底知を語ることにについて ー『確実性』
第四部前半部の思考ー

2.1 パートAの思考：「語られることのない言語ゲームの基底知を語ることに
ついて」という主題の生成と展開

2.1.1 古い思考要素の受け継ぎと新しい要素「言語ゲームの基底」の萌芽的登
場（パートA第一段階：シーケンス I）

2.1.2 「語られず示される知」と「ムーア言明の意図」という二主題の擦りあ
わせによる新しい主題と問いの絞り出し（パートA第二段階：シーケンス
II,III）

2.1.2.1 二つの主題の並行的展開と最初の接触の試み（シーケンス II）

2.1.2.2 二つの主題の接触を通じた鍵となる問いの更なる生成（シーケンス
III）

2.1.3 問いと主題の更なる明確化と進化（パートA第三段階：シーケンス
IV,V）

2.2 パートBの思考：言語ゲームの根源的反省性と超越性 ---38

2.2.1 言語ゲームの根源的反省性を巡る思考（パートB 第一段階：シーケン
ス VI と第三段階：シーケンス X）

- 2.2.1.1 これまでの主題の発展的継続、「言語ゲームの原初的段階における非表明的確実性は知と呼べるか」(シーケンス VI)
- 2.2.1.2 原初的言語知の根源的反省性 (シーケンス X)
- 2.2.2. ムーア命題の超越性とその表現を巡る思考 (パートB第二段階: シーケンス VII, VIII, IX)
- 2.2.3 ムーア言明批判からムーア言明権へ (パートB第四段階: シーケンス XI)
- 3. 言語と知と私的存在の共通の根源へ - 『確実性』第四部後半部の思考-
 - 3.1. パートCの思考: 「私は知っている」の超越的用法と二種の知
 - 3.1.1 パートCの二つの主題
 - 3.1.2 パートCの思考の流れ
 - 3.2. パートDの思考: ウィトゲンシュタインの思考の最終局面
 - 3.2.1 公的確実性と私的確実性の区別
 - 3.2.1.1 論理と公的確実性
 - 3.2.1.2 私的存在と私的確実性
 - 3.2.2 私的存在と言語ゲーム根底の正しさ

付論: 『確実性』第四部のテキスト構造とスタイル

- 1. 『確実性』第四部のテキストの特徴と構造
- 2. 『確実性』第四部のテキストにおける日付の存在
- 3. 『確実性』第四部のテキストにおけるメタ哲学的コメントの存在と分布

序 『確実性』第四部とウィトゲンシュタイン最後の思考

本論は『確実性について』に関する一連の論考¹の完結編であり、『確実性』第四部 §§ 300-676 の思考の軌跡をたどり、そこで生み出されたものと最終到達点を明らかにしようとする。このテキストの最終の日付は1951年4月27日、すなわちウィトゲンシュタイン死去の二日前である。同年3月10日からおよそ一月半に亘ってほぼ毎日書き続けられたこのテキストはウィトゲンシュタインが最後に書き残したものであり、彼が実践した最後の哲学的思考である。もし

¹ 「『確実性について』の主題と構造(上)」、『言語文化論集』46号(1998)、pp.149-179; 「同(中)」、『言語文化論集』47号(1998)、pp.51-96; 「同(下)」、『言語文化論集』48号(1999)、pp.23-54; 「『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(1)」、『言語文化論集』49号(1999)、pp.39-127; 「同(2)」、『言語文化論集』52号(2000)、pp.101-149、以上すべて拙稿。

そこに見出されるのがそれまでの様々な思考の反復でも示唆に富むが断片的な考察の集積でもなく、新たな主題と方向を持つ一貫した思考運動であるなら、それはウィトゲンシュタインという一個の思考運動体の不断の歩みの最終到達点という意味で「最後の思考」と呼ぶべきものであろう。本論はこの事を示し、最後の思考が如何なるものなのかを明らかにしようとするものである。もし『確実性』第四部にこうした意味で「ウィトゲンシュタイン最後の思考」が見出されるなら、「後期」と呼び慣れている『哲学探究』第一部(TS227)を中心とするテキスト群の理解は大きく変わらざるをえないだろう。後期ウィトゲンシュタインの主著が『哲学探究』(第一部)であることはこれまで広く受け入れられてきた「定説」である。すなわち『哲学探究』(第一部)は言語に関してウィトゲンシュタインが登りつめた頂上であり、『哲学探究』第二部や『確実性』はこの主峰から派生した岩稜や支峰であって、興味深くあっても『哲学探究』と重みの根本的に異なるものだとして了解されてきた。しかし『確実性』第四部に関する本論の理解が正しいとすれば、『哲学探究』は頂に至る長大な山稜中の一テラスに過ぎないことになる。そこから姿を見せなかったはるかな頂上に相当するのが本論の示そうとする「最後の思考」なのである。

本論はこの「最後の思考」を『確実性』第四部のテキストを順に辿りながら示そうとするものであるが、その際決定的な鍵となるのが §§300-676 という長大な(それは『確実性』全体の過半を占める)テキストを思考の流れに従いながら適切に区切ることである。我々はこれまでの論考においてサブシーケンスとシーケンスという区切り単位と、一見ばらばらなそれらを貫き結び付ける思考の糸(貫通主題)としてのスレッド²をウィトゲンシュタインのテキスト解析上の根本概念として提示し適用してきた。これらの概念の適用はそれまで無秩序に見えていたウィトゲンシュタインのテキストの中に一貫した思考運動を見出すことを可能とした。その限りにおいてサブシーケンスとシーケンスという単位とスレッドという持続的な主題がウィトゲンシュタインの思考内部で持つ実在性が示されたと言えるだろう。本論でもこうした理解に基づいてサブシーケンスとシーケンスをテキストと思考の基礎的な構造単位としながら第四部の分析を行なう。その最も基礎的な作業として我々は第四部全体を図1のように18のシーケンスに区切る。この図に登場するスレッドのうち α 、 β 、 δ 、は第一部以来持続する主題であり、 δ' のみが第四部固有のもの

² これらの概念については本論「2.1.2.1」冒頭を参照されたい。

である。

『確実性』第四部のテキスト³と思考運動は第一部から第三部までのものと質的に根本的に異なっており、そこにはサブシーケンス、シーケンスといったローカルな思考の連続的展開を超えた大規模な流れの変化がいくつか存在している。これらの変化はテキストを順に読むという外的な視点からは主題や思考方向の突然の変化としか見えないが、連続した思考運動に内在的に見るなら、相互に関連した主題群を巡って思考が展開し尽くされ新たな思考を可能とする問題と主題が生み出される過程なのである。これこそウィトゲンシュタインの思考の最も創造的なプロセスである。それは一定の前提から予見可能な結論を導出することではなく、以前は想像もされなかった思考を可能とする場を切り開く作業である。こうした変化の痕跡に基いて第四部のテキストを区切れば、そこには前半、後半という最も大きな区切り単位と、前半をパートAとパートBへ、後半をパートCとパートDへと区切るそれに次ぐ区切り単位が見出される(図1参照)。これらの区切りは第四部の思考の大きな流れに対応するものであるから、第四部の思考を理解しようとすればこれらの区切りそれぞれの思考を明らかにするとともに、それら相互の動的な関係を把握することが不可欠である。本論の考察はこうした全体構造の理解に沿って進められる。

図1からも推測できるように第四部のウィトゲンシュタインの思考は驚くべき距離を踏破し、息を呑むような高度差を登攀する。その結論は極めて興味深い、極めて複雑な経路をへて到達される。こうした思考運動の理解を容易にするため、簡単な全体的展望をここで与えたい。結論を先に述べるなら、『確実性』の最終局面たるパートD(すなわちウィトゲンシュタインの哲学的生の最終局面)においてウィトゲンシュタインは「公的確実性の本質と起源」と「私的存在と言語ゲームの根源」という二つの大きな主題に逢着し、それらについて思考する。言語哲学という観点からすればより重要なのは後者の主題であり、それについての最終的な思考は「言語ゲームは私的存在によってのみ可能となる」というものである。『哲学探究』や『確実性』第一部―第三部で示された思考からすればまさに驚くべきこの思考が『確実性』のテキストの中にどのように埋め込まれているのかを示し、その意味するところを明らかにするのが本論の第一の目的であると言ってもよい。この点については直接「3.2. ウィトゲ

³ 日付の存在や点在するメタ哲学的コメントといった第四部テキストの特徴とその意義に関しては「付論：『確実性』第四部のテキスト構造とスタイル」を参照されたい。

シュタインの思考の最終局面」に当たられたい。これを本論の第一の目的とするなら、第二の目的はこの結論的思考にウィトゲンシュタインが到達する道のりを明らかにすることである。この道のりの理解にとって一つ決定的に重要な事がある。それはこの途上でウィトゲンシュタインの思考が極めて大きな一つの変化、飛躍を創出し体験するということである。この変化・飛躍によって初めてウィトゲンシュタインの思考は「言語ゲームは私的存在によってのみ可能となる」という結論に到達しうるのである。同時にこの変化・飛躍によりウィトゲンシュタインのテキストには外見の様な混乱や飛躍が生じ、読者の理解に挑戦することになるのである。その変化とは言語ゲームを本質的に反省的なものと捉えるようになるという変化であり、別の観点からすれば『論考』以来存続し続けてきた神秘主義的思考と最終的に決別するという変化である。この変化はパートBにおいて醸成されシーケンス X において決定的に表面化する。この変化について簡単に説明したい。

この変化以前のパートAにおいてウィトゲンシュタインの思考の最も重要な主題は「言語ゲームにおいて語られることのない原初的な確実性」である。それは言及されることも問題化されることもない自明で確実な事柄であり、そうしたものが言語ゲームの根底を成していると考えたのである。こうした思考の背景には言語ゲームは本質的に非反省的存在であるという観点が存在する。言語ゲームが本質的に非反省的であるとは、言語ゲームにおいて必要とされているのは知っていることであり、それを「私は・・・知っている」と表明することではない、ということである。このいわば黙々とした言語ゲームの営みの中で語られることなく行為の中に示されている知（あるいは確実性）こそ『論考』以来の「語り得ぬもの」の系譜を引くものであり、ムーアはこの語るべきでない原初的な知を語った者として批判されたのである。ところが今問題にしている変化により言語は本質的に反省的存在とみなされる。知っているだけではなくそれを「私は・・・知っている」と表明することが言語ゲームにとって本質的とみなされるのである。この変化の意味とそれが生起する過程をここで簡単に説明することはできないが、この変化はウィトゲンシュタインの思考に二つの目立った外的変化をもたらす。第一はムーアに対して肯定的になることである。言語を反省的と見る限り、ムーアの言明は批判されるべきことではなく、むしろ要求されるものとなる。第二は考察の対象が知から知の表明（「私は・・・知っている」）へと移行することである。反省的言語観という根本的要因を知らなければ極めて理解しにくいこれらの外的変化は、ウィトゲンシュ

タインの思考の大きな流れの中に位置づけるなら重要な意味を持つものであることが明らかになるのである。その時互いに無関係に見える様々なテキストと思考が一つの像を描きはじめるであろう。

＜図1 『確実性』第四部の見取り図＞

	パート	シークェンス	節 番 号	日 付	内 容	スレッド
前 半 部	A	I	300-330	3.10-3.12	言語ゲームの基底とムーア言明の公的解釈	α, β
		II	331-388	3.13-3.17	言語ゲームの根底にある非表明的確実性とムーア言明	α, δ
		III	389-434	3.18-3.21	言語ゲームの根底にある非表明的確実性とムーア言明	α, δ
		IV	435-461	3.27-3.29	ムーア命題の確実性の超越性とその言語ゲーム根底性	β, δ
		V	462-469	3.30-4.4	ムーア言明と有意味に語り得ない知の存在	α
	B	VI	470-481	4.4-4.8	原初的な非反省的確実性を知と呼べるかという問題	δ
		VII	482-501	4.8-4.11	ムーア命題の超越的確実性は「私は知っている」によって表現できるかという問題	α, δ
		VIII	502-511	4.11	ムーア命題の超越的確実性とそのムーア言明による表明について	δ
		IX	512-525	4.12-4.15	言語ゲームにとってムーア命題の確実性は超越的でなければならないのか	α, β, δ
		X	526-548	4.16-4.17	言語ゲームの文脈では原初的知も必然的に反省知でなければならない	α, δ, δ'
		XI	549-554	4.17-4.18	ムーア言明が言語ゲーム内で使用可能であること	α, β
後 半	C	XII	555-579	4.19	言語ゲームにおける「私は知っている」の二種の機能と二種の知	δ'
		XIII	580-598	4.20-4.21	「私は知っている」固有の機能と自己名命題の超越性	δ'
		XIV	599-612	4.21-4.23	公共知の考察	δ
		XV	613-620	4.23	ムーア命題が言語ゲームに対し	β, δ

部	D				て持つ意味	
		XVI	621-652	4.24-4.25	超越性と超越言明に関する考察	β, δ'
		XVII	653-669	4.25-4.26	超越言明の言語ゲーム根底性と私的存在の起源	β, δ'
		XVIII	670-676	4.27	超越命題としてのムーア命題	β, δ'

* 各スレッドの内容は次の通り

α : ムーア言明の意味と妥当性

β : 誤りと疑いの論理的限界、および論理的限界性

δ : 知識、および確実性

δ' : 言語ゲームと知

** 超越言明、反省知、等については本文参照

1『確実性』第一部から第三部までの思考と第四部の思考の起点

『確実性』においてウィトゲンシュタインが一貫して追求し続けているのはムーア命題とムーア言明という二つの主題を巡る思考である。ムーア命題とは「ここに私の手がある」や「地球はずっと以前から存在していた」といった敢えて語るのものはばれる程自明な命題である⁴。ムーア言明とはこうした命題の認識を「私はここに自分の手があると知っている」という形で他人に表明する行為である。これらは G.E.ムーアが懐疑論の論駁として「私は・・・知っている」と言明した⁵ のをきっかけとして哲学者達の注目を引くようになったのであり、その結果として『確実性』において主題的に考察されるようになったものである。

ムーア命題は我々が普段注意を払うことなく保持している原初的な知の内容を表わしている。この知を我々は仮にムーア知と呼んできた。「ムーア命題」と「ムーア言明」という二主題の間には、この原初的な知とそれを言語的に表明することの関係が内包されている。そしてこの関係の根底には「知と言語の内在的関係」という重大な問題が存在している。従ってムーア命題とムーア言明という二主題を巡る思考としてウィトゲンシュタインが『確実性』を開始し

⁴ ムーア自身の規定するムーア命題は必ず「私」を含むものであるのに対し、『確実性』でウィトゲンシュタインが用いる例は「地球は 100 年前に存在していた」のように「私」を含まないものもある。本論でムーア命題というのは（特別に断りの無い限り）ウィトゲンシュタインがムーアの例に基いて一群の自明な命題と想定していた命題群のことである。ムーア命題という呼び方は我々が便宜上用いているものであるが、ウィンゲンシュタイン自身は時として「ムーアの命題」といった言及をする。ムーア命題の本質はパート D の思考で明らかとなる。

⁵ G.E. Moore "A Defense of Common Sense" (1925), "Proof of an External World" (1939), in G.E. Moore *Philosophical Papers* (1959)

続行したというのは、知と言語という主題を潜在的に内包するような思考を彼が開始したことを意味している。

しかしながら『確実性』第一部から第三部までの思考においてこれら二つの主題は独立したものとして平行して思考されたにすぎない。その間に知と言語の関係という主題がウィトゲンシュタインの思考の対象となったことはないのである。知と言語という重要だが困難な主題こそが『確実性』の最終的な標的であるという観点からすれば、第一部から第三部はそれについての思考を可能とするための準備過程であると考えることができる。こうした準備過程をへて本来の主題について思考がなされる場が第四部なのである。それゆえ第四部の思考は第三部までの思考と断続と連続という二つの関係で結ばれており、第四部の思考を正しくたどり始め展開を正しく追いつけるためには、この二つの関係を理解することが重要となる。先ず第四部の思考は知と言語の関係という全く新しい主題を巡って展開されるため、これまでとは全く異なる思考の場において展開される。その経路はこれまでの思考からは導出することも推測することも困難なものである。他方この新しい主題を巡る思考は第四部のある所から突然始まるのではない。それはそれ以前の思考から受け継いだ主題と思考に少しずつ新しい要素を加えることにより徐々に生成され、ある段階で一挙に表面化するのである。図1で示した第四部の構造に即して述べるなら、パートAにおいて古い主題と思考に新しい主題と思考を徐々に加えてゆく過程が進行する。そうした全体が次第に新しい形を取るのがパートBであり、この変性はパートB末でほぼ完了する。パートC以降の思考はこうした変化を前提として初めて成立する全く新しい主題を巡って展開される。それゆえ第四部前半と後半は極めて様相を異にする展開を見せるのである。この相違は上で述べた非反省的言語観から反省的言語観への移行と密接に結びついている。

第四部で見られるこうした動的で予測不可能な思考の展開は、ウィトゲンシュタイン独特の思考の進行形態によって可能となる。『確実性』全編で見られるように、ウィトゲンシュタインの思考は相互に緩やかに関連した一群の主題を巡って同時並行的に、かつサイクリックに進められる。こうした過程の紙上の痕跡としてのテキストは、幾つかの主題を巡る思考が交替に登場するという外観を呈することになる。その有り様は図1のスレッド欄から推測できるだろう。こうして互いに独立に展開された思考がある深さに達し、それまでは見えなかった主題間の関係が感知される時、それらを前提として初めて可能となるような新しい主題（問い）が登場し、思考の進路は大きく変化するのである。

つまりウィットゲンシュタインの思考に特有な飛躍とは推論の飛躍ではなく、主題と問いの飛躍であり、それによって以前は望見できなかった新しい思考の場が開かれるのである。このような訳だから第四部において新しい主題と思考がどのように登場するかを理解するためには、第一部から第三部までの思考から、どのような主題と思考が第四部へと受け継がれたかを知ることが不可欠なのである。

こうした観点から見れば第一部は第二部、第三部と主題という点で大きく異なっている。第一部でムーア命題とムーア言明が共に主題化されたのに対し、第二部と第三部の思考は主としてムーア命題とムーア知を巡るものである。第三部ではムーア言明について考察されることもほぼ皆無である。第二部でムーア言明は考察の対象となっているが、それはムーア言明はどのような理由で「私は・・・と知っている」の誤用なのかを巡る批判的考察であり、第二部の思考の焦点はあくまでもムーア命題とそれを内容とするムーア知である。こうしてムーア命題/ムーア知を巡って第二部と第三部で展開されたウィットゲンシュタインの思考が最終的に到達したのが「認識論的自然権を持つ非表明的共同確実性としてのムーア知」⁶ という概念である。第四部の思考はこの到達点と第一部で示されたムーア言明それ自身に対する哲学的興味を接触させることにより、両者の融合により生み出される新たな思考の場を目指しながら進行してゆくのである。これら二つの源泉がどのような思考要素を内包し、そのどれが第四部へと伝えられたのかを更に詳しく検討しよう。

『確実性』第一部の思考

その後の展開との関連で見れば、第一部の思考には図2で示すように四つの主題が存在する。この図にはそれぞれの主題が第一部で扱われる箇所と再び第二部以降で本格的に扱われる場所が示されている。第一部は『確実性』という思考運動の主題提示部であり、これら四つの主題はこの思考運動が出発点において持っていた潜在的な容量を示すものと理解できる。この図から『確実性』という思考運動が持つ二つの特徴を読み取ることができる。

第一の特質は、この思考運動には当初からある内的緊張が存在しているということである。その内的緊張とは「(a) ムーア言明それ自身の持つ積極的意義」

⁶ 拙稿『『確実性について』におけるウィットゲンシュタインの思考(2)、『言語文化論集』52(2000)、pp.140-148.

と「(b)正当化的知識観に立ったムーア言明の批判」という二つの主題（とそれが前提する思考）の間の対立緊張関係である。『確実性』のウィトゲンシュタインの思考にとってムーア言明がある積極的意義を持っていることは否定しがたい事実である。というのもムーアの言明により初めて原初的な知としてのムーア知が哲学的な思考の対象となったのであり、『確実性』の思考とムーア言明は不可分だからである。他方「私はここに自分の手があると知っている」というムーアの言明は日常場面ではまず使用されることのないものであり、この時期のウィトゲンシュタインの言語観からすれば言語の哲学的誤用として徹底的に批判されるべきものである。これら鋭く対立する二つの思考要素はいずれもウィトゲンシュタインの思考の極めて深い層に根差しており簡単に撤回されうるようなものではない。その対立の根源に近づき、何らかの「解決」を図ろうとすれば、ウィトゲンシュタイン自身これまで意識的に把握したことのない思考の深層へと掘り進み、未知の思考の場を拓きうるような新たな主題を生み出す必要があるだろう。第四部ではこの事がなされるのである。

＜図2 『確実性』第一部の主題とその後の展開＞

第一部の思考の主題	それが登場する シーケンス ⁷	それが再度本格的 に登場する場所
(a) ムーア言明それ自身の持つ積極的意義	I（特に § 6）	第四部
(b) 正当化的知識観に立ったムーア言明の批判	II, VII	第二部
(c) ムーア言明の公的解釈	IX	第二部、第三部
(d) 誤りと疑いの論理的限界の指標としてのムーア命題という概念	IX	第二部、第三部

図2から読み取れる『確実性』の思考のもう一つの特徴は、こうした内的対立の一方の項である「(a) ムーア言明の積極的意義」という主題に第二部、第三部では全く触れられることなく思考が進行したということである。この主題に触れないとは、ムーアの言明が批判の対象としてのみ考察されることを意味する。こうしたムーア批判的な第二部、第三部の考察の基礎となるのが「(b) 正当化的知識観によるムーア言明の批判」という主題を巡る思考である。「正当化的知識観」とは、「私は・・・と知っている」という表現は話者が自己の

⁷ 第一部のシーケンス、サブシーケンスについては、拙稿『『確実性について』の主題と構造（下）』、『言語文化論集』48(1998), pp. 35-37, を参照。

知識を正当化しうる場合にのみ使用可能である、という「知る」の「文法」に基く知識観である。この知識観に基づけばムーアの言明は誤用であることになる。何故なら「ここに私の手がある」といったムーア命題はあまりに根本的で自明であるため、それに対する有効な正当化は存在しないからである。この結果ムーア命題はその起源である「私は・・・と知っている」というムーアの言明から切り離され、原初的信念体系としての「ムーア知」の内容の指標としてのみ意味を持つことになる。かくして第二部、第三部の思考はもっぱら対象化された原初的信念体系としての「ムーア知」の諸性質の探究へと向かうことになるのである。

「(c) ムーア言明の公的解釈」, 「(d) 誤りと疑いの論理的限界の指標としてのムーア命題という概念」という二つの主題はこうした思考が進むべき道筋を示している。「ムーア言明の公的解釈」とは「私は・・・と知っている」というムーア言明の「私」はムーアという特定の個人ではなく不特定の人、すなわち「我々」を意味するという解釈であり、こうした解釈を前提として初めて「ムーア知」は「世界像」や「共同確実性」という形で考察の対象となるのである。(d)はこのようにして対象化された「ムーア知」が「経験的命題」でありながら「論理」と呼ばれる特別の公的次元に属するものであることを意味している。すなわち第二部と第三部の思考とは本質的に、論理命題と同等の機能を持つに至った確実な経験命題群としてのムーア命題とその知としてのムーア知の探究なのである。こうした共通点を持ちながらも第二部の思考と第三部の思考の間には重要な相違が存在する。それについて簡単に触れたい。

『確実性』第二部と第三部の思考の相違としての二つの視点

第二部、第三部の思考の主題と最終到達点は図3のようになる。

＜図3 第二部と第三部の思考の主題と到達点＞

	それぞれの思考の主題	それぞれの思考の最終到達点
第二部の思考	(b) 正当化知識観に立ったムーア言明批判	受動的各個人に外的に刷り込まれた固定化された世界像としての「ムーア知」
	(c) ムーア言明の公的解釈	
	(d) 誤りと疑いの論理的限界の指標としてのムーア命題という概念	
	(e1) 外的視点	
第三部の思考	(c) ムーア言明の公的解釈	認識論的自然権を持つ非表明的共同確実性としてのムーア知
	(d) 誤りと疑いの論理的限界の指標としてのムーア命題という概念	
	(e2) 内的視点（シーケンス III 以降）	

この図から「ムーア言明批判」という主題が第三部で姿を消していることが読み取れるが、それはこの主題が第二部で十分に展開され尽くしたされたためであり、第二部と第三部の思考の本質的相違を示すものではない。両者の本質的相違はそれぞれが外的視点と内的視点という相反する視点に立って展開されているという点にある。

前稿で論じたように⁸ 外的視点と内的視点とは論理的限界（すなわち規範）について語る者が取りうる二つの相反する視点であり、各文脈でどの視点がとられているのかを示す指標が論者による人称の使用である。ある文脈において論者が限界について語る際に一人称（例えば「私」）を非対象化的に使用し、当の限界が自分自身の限界として妥当し超えることが自分には不可能である事を表明する時、論者はこの文脈で内的視点に立つ。他方限界（規範）について語る時に一人称を使用しないか、使用してもこのように使用しないなら論者はその文脈で外的視点に立つ。内的視点とは特定の限界を自らの限界としてその妥当性にコミットする語り手の在り方であり、外的視点とは複数の限界を対等に対象化し、いずれの妥当性にもコミットしない語り手の在り方である。「ムーア命題」という誤りと疑いの論理的限界（すなわち認知的規範）に対し第二部のウィトゲンシュタインが外的視点に立って思考しているのに対し、第三部のウィトゲンシュタインは内的視点に立って思考している、これが第二部と第三部の決定的な相違である。その結果同一の主題についての思考でありながら第二部と第三部は図3が示すように異なった概念へと到達するのである。このようにウィトゲンシュタインの思考は第三部において外的視点から内的視点へと転換するが、それは両視点の批判的せめぎあいを経たものではなく純粋な移行である。従ってそれからウィトゲンシュタインの最終的な態度を知ることはできない。本論の最後で論じる私的存在に関する思考において初めてウィトゲンシュタインはこの点について明確な態度を示すのである。

『確実性』第四部の思考は第三部の到達点である「認識論的自然権を持つ非表明的共同確実性としてのムーア知」という概念を起点として開始される。「非表明的」とは行為において示されるが語られることはない、ということである。従ってこの概念は「自然的存在としての人間がその共同生活のなかで行為の反復の中で語ることなく示している確実性としてのムーア知」というものである。

⁸ 拙稿『『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(2)』、『言語文化論集』52(2000),pp. 107-109.

極めて自然主義的傾向の強いこうした地点からウィトゲンシュタイン最後の思考は始るのである。

2 語られることのない言語ゲームの基底知を語ることにについて — 『確実性』

第四部前半部の思考—

上述のようにウィトゲンシュタインのテキストから現実の思考運動を浮かび上がらせるために我々はスレッド（多くの場を貫通する思考主題）とシーケンス（各時点での思考の同時的場）という概念を核とする方法を提起し『確実性』テキストに適用してきた。『確実性』第四部のテキストはこうした方法を最も必要とするテキストであり、同時にその最も厳格な検証となりうるテキストでもある。それは第四部が真の意味の思考生成の場であるからである。真の思考生成の場とは、思考者が確固とした主題と問いを巡り自覚的に思索を行ないながらも、どの方向に進めば自らの問いが最も適切に表現されその答えが見出されうるかが不明な状態で思考運動が開始され継続されるような思考の場である。この意味で『確実性』第一部から第三部の大半は思考生成の場ではない。大抵の場合思考の起点において内包されている諸主題・諸契機から展開される思考の大枠が思考者によって予期されているからである。それに対し『確実性』第四部でウィトゲンシュタインは自らの問いが厳密に如何なる問いであり、それに対する答えがどのような所に見出されるのかを明確に表現できない所から思索を開始し、それを求める作業として思考を展開してゆく。こうした思索のありさまは第四部（特に前半部）に集中している多くのメタ哲学コメントが雄弁に物語っている⁹。それは第四部テキストの示すウィトゲンシュタイン独特の読解困難さにも現れている。例えば我々はこのテキストを前後半に区切ったが、この区切りの存在を認識すること自身は容易であり、4月19日を境として思考の主題に大きな変化があるのはテキストを一読すれば明白である。しかしその前後の思考が如何に関係するのかを見極めるのは極めて困難である。それらは一つの思考としてでなく、一つの生成過程として統合された時初めて理解可能となるのである。

こうした特性を持つテキストを理解するための最大のポイントは、それを巡って各々の場で思考が展開される中心の問いを明確にすることである。しかし

⁹「付論：『確実性』第四部のテキスト構造とスタイル」の「3.『確実性』第四部のテキストにおけるメタ哲学的コメントの存在と分布」を参照。

この問いは始りにおいて思考者が未だ表現し得ない問いであり、その問いの明瞭な表現自身が思考運動の目標であるような問いである。従ってそれは思考運動が成功裏に到達した地点に立つことによってのみ把握される問いである。その地点からこの問いの光に照らして全思考過程を再度反復的に通覧することによってのみ思考運動の経路と意味が明らかになるのである。

こうした観点から見る時、『確実性』第四部前半部の中心の問いは「語られることのない言語ゲームの基底知を語ることに」について」と表現することができる。『確実性』第四部前半部の全テキストはこの問いとの関係によってその意味が明らかになるのであり、第四部後半部の思考はこの問いに対する答えを介してのみ理解可能となるのである。以下パート A とパート B について順にその具体的思考運動をこの問いとの関係によって追ってゆきたい。

2.1 パートAの思考：「語られることのない言語ゲームの基底知を語ることに」について」という主題の生成と展開

『確実性』第四部の思考はそれまでの思考が内包し生成してきた重要な思考要素（具体的には α 、 β 、 δ 、三つのスレッド）すべてを受け継ぎながら、そこでは全く見られなかった新しい主題、「言語と私的存在の起源」と表現すべき新しい主題、を生成し展開してゆく。それはその到達点から振り返れば『確実性』の起点において、そして更に溯ればウィトゲンシュタインという哲学的経歴の起点において確かに内包されていた主題であるのだが、第四部の思考はそれを全く予期不可能な仕方でも生成展開する。この創造的にして大規模な思考過程においてその前半部は上述のように「語られることのない言語ゲームの基底知を語ることに」というローカルな主題を生成し展開するという意味を担っている。そうして到達した地点を足がかりとして後半部の思考は言語と私的存在の起源という第四部にとってグローバルな主題の核心へと分け入ってゆくのである。

こうした全体的配置の中で第四部パートA（シーケンス I-V, §§ 300-469）はそれまでの思考を受け継ぎながら「語られることのない言語ゲームの基底知を語ることに」という前半部の主題を浮かび上がらせるという固有の役割を担っている。すなわちパートAの思考はムーア言明の解釈（ α ）、誤りと疑いの限界（ β ）、知と確実性（ δ ）、という既存の三つの主題（スレッド）をその最も展開された形において相互に擦りあわせ、結び付けながら「語られることのない言語ゲームの基底知を語ることに」という主題を生成し、同時にこの主題によ

り限定された意味を与える幾つかの形へ展開してゆくのである。より具体的に述べるならこの思考過程は、(1) これまでの思考の引継ぎと新しい起点の設定(シーケンス I)、(2) 「言語ゲームの根底にあり語られず示される知としての非表明的確実性」と「ムーア言明の意図と妥当性」という二つの主題の擦りあわせによる新たな問いと主題の生成(シーケンス II,III)、(3) 問いと主題の更なる明確化(シーケンス IV、V)、という三つの段階を経ながら進行してゆく。以下その各段階を追いながらパート A のウィトゲンシュタインの思考を辿ってゆきたい。

<図4 第四部パート A のサブシーケンス図>

シーケンス	サブシーケンス	節番号	日付	内 容	スレッド
I 言語ゲームの基底とムーア言明の公的解釈	a	300-309	3.10	誤りと疑いの限界としてのムーア命題	β
	a'	310-317	3.10	言語ゲームの基底としてのムーア命題	β
	a''	318-321	3.12	規則と経験命題の相互転換可能性	β
	b	322-330	3.12	ムーア言明・ムーア知の公的解釈	$\alpha \beta$
II 言語ゲームの根底にある非表明的確実性とムーア言明	a	331-346	3.13	行為と探究において疑われないもの	δ
	b	347-353	3.15	ムーア言明の有意さへの疑念・批判	α
	a'	354-359	3.15	疑いと正当化に先行する動物的確実性	δ
	b'	360-368	3.15	ムーア言明のムーア命題超越性宣言としての解釈	$\alpha \beta$
	a''	369-375	3.16	言語ゲームの本質としての根底における疑いの不在	$\beta \delta$
	a'''	376-378	3.17	知識の基礎としての非情熱的承認	δ
	b''	379-388	3.17	ムーア言明の確実性言明(「私には疑う余地がない」)としての解釈	$\alpha \beta \delta$
III 言語ゲームの根底にある非	a	389-390	3.18	ムーア言明のムーア的使用批判と公的解釈	α
	b	391-394	3.18	言語ゲームの根底における疑いの不在	$\beta \delta$
	b'	395-399	3.18	語られることなく示される知としてのムーア知存在問題の肯定的解の強い試行	$\alpha \beta \delta$
	b''	400-405	3.19	言語ゲームの基礎たる確実経験命題としてのムーア命題	$\alpha \beta \delta$
	a'	406-409	3.19	ムーア言明の意味の考察	α
	c	410-411	3.20	知の体系性と言語ゲームの基礎たる想	$\beta \delta$

表明的確実性 とムーア言明				定としてのムーア知	
	a"	412-416	3.20	ムーア言明の意味と使用可能性に関する考察	α
	c'	417-422	3.21	ムーア命題の不可疑性と無根拠性	β
	a'''	423-426	3.21	ムーア言明の意図と妥当性に関する考察	α
	b'''	427-428	3.22	語られることなく示される知が知であることを示すことができるかという問い	$\alpha \delta$
	c''	429-430	3.23	確実な記憶命題の無根拠性（火星入）	β
	a''''	431-434	3.26	語られることなく示される知、とムーア言明の意図	$\alpha \delta$
IV ムーア命題の 確実性の超越 性とその言語 ゲーム根底性	a	435-437	3.27	確実性言明（「それが間違いであるはずがない」）の可謬性	$\beta \delta$
	a'	438-444	3.27	知言明（「私は・・・と知っている」）、と認知状況の描写による確実性の記述	δ
	b	445-446	3.27	認知状況描写によって記述し得ない手ムーア命題の確実性としての超越確実性	$\beta \delta$
	b'	447-450	3.28	数学的命題の確実性とムーア命題の確実性の同質性、と根底的で疑われないもの	$\beta \delta$
	c	451-454	3.28	ムーア言明の脱文脈性批判の撤回、とムーア言明の公的解釈の問題点	$\alpha \beta \delta$
	b''	455-461	3.29	言語ゲームの根底としての事物の存在と語の意味の超越確実性、と言語ゲームへの疑いの導入という問題の提起	$\beta \delta$
V ムーア命題と有 意味に語り得な い知の存在	a	462	3.30	ムーア言明の意図の解釈の問題化	α
	a'	463-469	3.31	ムーア言明の脱文脈性、と有意味に語り得ない知の存在	$\alpha \delta$
			4.3 4.4		

2.1.1 パートA第一段階：古い思考要素の受け継ぎと新しい要素「言語ゲームの基底」の萌芽の登場（シーケンス I）

『確実性』第四部の形式的起点であるシーケンス I は根本的にはこれまでの思考の要約的反復であり新しい思考運動の起点をなすものではない。その役割はせいぜいのところ新しい思考運動に受け継ぐべき主題の確認であり思考のウォーミングアップ以上のものではない。ウィトゲンシュタインの手稿に時としてみられるこうした要約的反復的なテキストが第四部の冒頭にある事は第四部の思考の重要性に対するカモフラージュとして作用しており、第四部を一層

困難なテキストにしている。このように内容的には新味の薄いシーケンスⅠであるのだが、一つだけ新しい思考要素が導入されている。しかもそれは単に新しいだけではなく第四部全体の思考にとって最も根本的な思考要素なのである。それが「言語ゲームの根底」という思考要素である。この要素を中心にしながらシーケンスⅠの思考の有り様を眺めてみよう。

図4から判るようにこれまでの思考から引き継がれシーケンスⅠで反復的に要約されている思考要素は「誤りと疑いの限界としてのムーア命題」と「ムーア言明の公的解釈」の二つである。これらの主題を簡単に説明すると次のようになる。「これは私の手である」や「地球は私が生まれる遙か以前から存在していた」といったムーア命題が記述する事実はそれに対する疑いや誤りが疑いや誤りとして意味を持たないという意味で「誤りと疑いの論理的限界」を画し、それらは我々の知識体系の根底において不動の基底として存在している。これが第一の主題の核となる思考である。他方第二の主題に言う「ムーア言明の公的解釈」とは、これらムーア命題の知識たる「ムーア知」を「記述」したムーアの言明「私は・・・と知っている」はムーアという特定の個人の認知を記述しているのでなく、我々が共有している知識体系においてムーア知は不動の固定点の役割を担っているという「論理的状況」を記述している、という思考である。

第一部から第三部までの思考と第四部の思考の最大の相違は、我々が「ムーア知」や「ムーア確実性」と呼ぶこの根底的な確実性が前者にあっては我々の思考と行動の基底という形で捉えられているのに対し、後者ではそれが言語ゲームの基礎として捉えられている点である。この事はムーア知やムーア命題の根底性を表わす表現の分布に見事に示されている。図5はムーア命題やムーア知の根底性を表わすために『確実性』で用いられている様々な表現を思考・行動・探究に関わるもの（例えば「行為と思考の基礎」）と言語ゲーム（例えば「言語ゲームの基礎」）に関わるものに分類し、それぞれの出現箇所を示したものである。

＜図5 ムーア知・ムーア命題の根底性を表わす表現の分布＞

節	思考・探究・行動に関わる表現	言語ゲーム・言語に関わる表現	部
87	仮説としても使える陳述文が探究と行動の原理としても使えないだろうか		2
105	そしてこの体系は我々の議論すべての多少とも恣意的な出発点なのではな		2

	い。それは我々が議論と呼ぶものの本質に属する。それは出発点というよりは議論に命を与える場 <u>Lebenselement</u> である。	
151	[ムーアが知っているという命題を] 確固たるものとみなすことは疑いと探究の我々の方法に属する。	2
162	私は世界像を持っている。それは真か偽か。なによりそれは私のすべての探究と主張の基底である。	2
167	それを仮説ではなく世界像と私が呼ぶのは、それがラポアジェの探究の自明の基礎であり、それとしては言い表されないからである。	2
211	今やそれは我々の物の見方と探究の形式を与えている。恐らくそれらはかつて議論された。しかし考えられないほど以前にそれは我々の思考の足場に属するようになった。	3
342	一定の命題が現実疑われていないという事は、 <u>我々の科学的探究の論理</u> に属している。	4
370		「手」という語を私が何の疑いもなく使用しているという事実は、疑いの不在が言語ゲームの本質に属することを示している。
401	論理の命題のみならず経験命題の形をしたものが思考（言語）との全作用の基礎を形成している、と私は言いたい。	論理の命題のみならず経験命題の形をしたものが思考（言語）との全作用の基礎を形成している、と私は言いたい。
411	[地球の存在に関するこの想定は] 我々の全言語ゲームの体系の基礎に属している。この想定は行為と思考の基礎を形成していると言ってもよいだろう。	[地球の存在に関するこの想定は] 我々の全言語ゲームの体系の基礎に属している。この想定は行為と思考の基礎を形成していると言ってもよいだろう。
414	ここにあるのはすべての私の行為の基礎である。	
415	「私は・・・知っている」によって人は最大の確実性を表現しようとしているのではなく、すべての問いと思考の根底に一定の命題が存在している、と表	

	現しようとしているのだ。		
446		しかし何故私はこれが自分の手であることがそれほど確実なのか。 <u>全言語ゲーム</u> はこの種の確実性に基いているのではないか。	4
455		すべての <u>言語ゲーム</u> は語と対象が再認されうることに基づいている。	4
558		この事実は我々の <u>言語ゲームの基礎</u> へと溶融されている。	4
670	我々は人間の探究の根本原理について語ることができるだろう。		4

この図の § 411 の例で「全言語ゲームの体系の基礎」が直ちに「行為と思考の基礎」と言い換えられていることから明らかなように、これら二種の表現は本質的に同じ物を表現している。「ムーア知」や「ムーア命題」がある時は「我々の思考と行為の基礎」と、別の時には「言語ゲームの基礎」と呼ばれているのである。このように両者の違いは「呼び方」の違いであるのだが、呼び方の違いは思考対象の違いを示している。この図が示しているのは「言語ゲームの基礎」という主題が第四部に至って始めてそれとして思考されるということである。

「言語ゲームの基礎」という主題が第四部において初めて登場するという主張に対しては、「言語ゲーム」という語が第三部までも使われているという事実とウィトゲンシュタインはそもそも「言語ゲームの哲学者」ではないのかという想念から疑念が提起されるかもしれない。しかしこの疑念はウィトゲンシュタインと「言語ゲーム」の関係に対する次のような重大な誤解に根差していると考えられる。『確実性』を始めとする「後期」のテキストには「言語ゲーム」という語が極めて重要なものとして繰り返し登場する。しかしこうした使用を通じてウィトゲンシュタインが何を思考し、何を目指しているのかを正しく把握するためには、この使用には二通りあり、それらの間には重要な際が存在することを認識しなければならない。一つは「言語ゲーム」が他の主題に関する思考においてある種の「説明理論」として用いられる場合であり、他はそれ自身を主題化するために「言語ゲーム」に言及される場合である。前者において言語ゲームという概念は探求されるのではなく前提される。後者においてのみ言語ゲームという概念が問題化され対象化され、その起源、根源、根拠といった事象が思考の対象となる。『確実性』第一部から第三部で「言語ゲーム」

が用いられる場合、それは他の主題を巡る思考の道具として使用され、それ自身が問題化・対象化されることはない（こうした使用の典型としては§ 255を参照されたい）。第四部に入って初めて「言語ゲーム」自身が思考の対象となるのである。

このように第四部で言語ゲームとその根源そのものが新たに主題化されるのだが、それが最初に、ごく控えめな形で、登場するのがシーケンス I サブシーケンス a' (§§ 310-317) である（図 4）。ここでは教師の教えようとするあらゆる事に疑いを挟み授業をさせようとししない生徒が登場する。幾つかの考察の後この生徒に対して、「この生徒は質問の仕方を学んでいない。彼は我々が教えようとしているゲームを学んでいない。」 (§ 315) と言われ、更に「この疑いは我々のゲームの疑いではない」 (§ 317) と言われる。この「ゲーム」への言及は表面的には上の分類の前者、すなわち説明の道具としての言語ゲーム概念の使用に相当する。つまりここでウィトゲンシュタインは言語ゲームという概念を前提とした上で、この生徒の懐疑的な行動は実は疑いの言語ゲームから逸脱しており、それゆえ疑いとして成立していないことを示すことにより、この生徒が象徴する懐疑主義を退けようとしている、と一応は理解できる。しかしサブシーケンス a' の議論の眼目は決して全面的懐疑を言語ゲーム概念を梃子にして退けることではない。ここで問題になっているのは、例えば § 255 で見られるように、「疑い」という個別の言語ゲームの成立条件ではない。そもそも言語ゲームというものが存在しうするための根本的条件、あらゆる言語ゲーム共通の成立条件が問題とされているのである。こうしたことが主題化されようとしていることはシーケンス II 以降の思考において明らかになることではあるが、ここでの議論がその萌芽的先駆であることは生徒が疑う事柄のリストのうちからも読み取れずのである。とりわけ重要なのが「事物の存在と言葉の意味」 (§ 310) に対する疑いである。有名な『哲学探究』 § 2 の言語ゲームを想起してみよう。あのゲームが成立するための根本的な条件の一つは「石板」と言われた時に助手が「石板」という言葉の意味の理解に全く疑いを抱かず、しかも眼前の石板の存在に何の疑念も抱かないことであるのは明白である。このように § 2 ゲームの根底には事物の存在と語の意味に対する疑いの不在という条件が存在している。しかもこの条件は「命令」ゲームのみならずあらゆる言語ゲームに常に適用されるなのである。ここサブシーケンス a' で生徒に事物の存在と語の意味という極めて根本的で普遍的なものを疑わせることによりウィトゲンシュタインが狙っているのはラディカルな懐疑の演出ではなく、

それを取り除くと言語ゲームというものの自身（したがって言語自身）が存在し得ないような根底的なものをネガティブな形で浮かび上がらせることなのである。それは萌芽的に先行的に試行的になされているにすぎない。こうした萌芽的思考をここで識別することによってのみ、その後の思考の展開をそれとして認識することができるのである。

2.1.2. パートA第二段階：「語られず示される知」と「ムーア言明の意図」という二主題の擦りあわせによる新しい主題と問いの絞り出し（シーケンスII,III)

第四部の本格的な思考運動はシーケンス II から始る。相互に独立しながらも無関係ではない幾つかの主題を巡る思考を同時並行的に進めながら、それらの関係に潜在的に内包される新たな主題と思考領域を切り開いてゆくというウィトゲンシュタイン独自の思考がシーケンス II 以降大規模に展開される。彼のこうした思考様式と通常の文字メディアのリニアな秩序の軋轢が生み出すテキスト読解上の困難はそれに応じて増大してゆく。例えば二つの主題を巡ってウィトゲンシュタインの思考が展開される場合、ノート上でそれらを巡る思考はほぼ交互に登場し a-b-a'-b'- といった外観を呈することになる。この結果、a と b という空間的に隣接するテキストが一見すると無関係である、という事態がもたらされる。試みられている思考が創造的で予測困難であればあるほどそれらは無関係に見えるのである。しかしながら読者がそれらを無関係とみなし、自分の理解の中で関係づけようとしないなら、二つの主題の密かな呼応を通じて生起する思考の新たな展開を追うことができず、その意味を見失うことになり、「ウィトゲンシュタインのテキストは困難」ということになるのである。相互にかけ離れた主題が未だ極めてかけ離れているその時点ですでにそれらを結合する糸を探りながらそれぞれの展開を追うこと、これがこうしたテキストを理解するための方法であり、我々がこれから試みるものである。従って無関係なものを無理矢理関係づけ下手な深読みをしているように見える事があったとしても、主題の交差と結合が現実が生起し読みの正しさが示されることを期待しながら以下の読解を読み進めたい。

こうした様式の思考が第四部ではシーケンス II から開始される。そこにおいて同時的に平行して展開される二つの主題が「言語ゲームの基底にある示されるが語られない確実性(知)」と「ムーアの言明の意味と妥当性」である。シーケンス II と III は先に述べたようにこうした思考過程の最初の段階を形

成する。この最初の段階で二つの主題は先ずそれぞれ独立に展開される。同時にそれらは少しづつ擦り合わされ、それらの接点・交点が探られる。こうした過程を経ながら新たな思考領域、新たな主題が探し求められるのである。この擦りあわせの過程で幾つかの問いが形成されてゆく。それは例えば「語られることなく示される確実性は知識なのか」といった問いであり、二つの主題を巡り可能な思考の振幅を示す問いである。シーケンス II と III の思考は基本的に相互に関連する一連の問い生成しながら二つの思考の内包する思考領域を確定する過程として進行してゆくのである。以下この過程を具体的に考察して行こう。

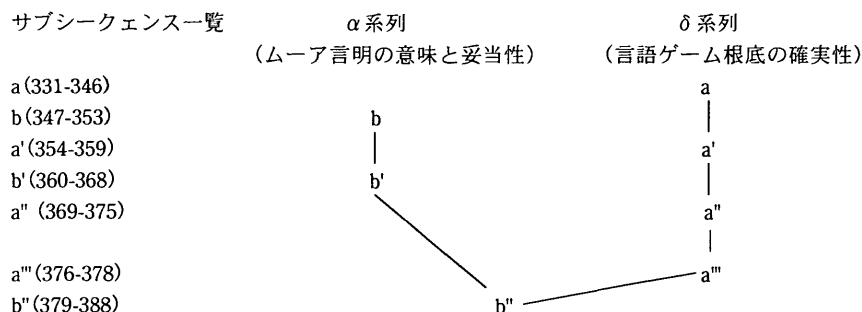
2.1.2.1 二つの主題の並行的展開と最初の接触の試み（シーケンス II）

複数の主題を平行して展開するというウィトゲンシュタインの思考様式はシーケンス II で典型的な形で遂行されている。この有り様は図4（パートAのサブシーケンス図）のシーケンス II の欄から容易に読み取ることができる。ここで念の為に再確認しておくなら、サブシーケンスとはウィトゲンシュタインの思考が現実に言語化されノート上に定着される際の文脈的統合の最小単位である。それは同一の主題を巡り継続的かつ相関的に展開される複数の小節（Bemerkung：ノート上で前後を空行で区切られた数行から十数行の長さのテキスト）の直列的連（れん）という形をしている。サブシーケンスは各小節の意味を限定する文脈の最小単位である。各小節の文の正確な意味（例えば指示代名詞が何を指すのか、といったことも含めて）はそれが属するサブシーケンスという文脈の中でのみ決定できる。シーケンスとはサブシーケンスより一つ上位の思考単位（テキスト単位）である。それは外面的には隣接する数個から十個内外のサブシーケンスの直列的連である。シーケンスは単一の主題について展開されることもあれば複数の主題について展開されることもある。我々の表記ではサブシーケンスはアルファベット小文字で表わされるので単一の主題を持つ場合シーケンスの構造は a-a'-a'の様になり、二つの主題を持つ場合シーケンスの構造は a-b-a'-b'のようになる。同一主題に関わる異なるサブシーケンス（例えば a と a'）は主題上の関係は持っているが、文脈的には不連続である。例えば同一の主題を巡る異なる事例の考察が二つのサブシーケンスで展開されたりする。他方一つのシーケンスをシーケンスとしているものはそこで展開されている思考の相、観点、視角、語り口、極性、空気といった曖昧な、しかし思考の流れに重要な区切りをもたらす無視

し得ない要素である。このことは同一の主題を巡る異なるシーケンスを比較する時より明らかとなる。多くの場合それらの中には異なる主題に関わる別のシーケンスが介在している。その間思考は「寝かされ」熟成を待っていると云ってもよいだろう。最後にスレッドについて一言。スレッドとは「主題」、「思考の要素」、「思考領域」等とも呼ぶうるものであるが、ある具体的な思考単位（例えばあるサブシーケンス）において明示的に主題として登場することもあれば、別の主題を巡る思考に非主観的に登場することもある抽象的な思考要素であり、その都度具体的に展開される思考の場に応じてさまざまな形で実現される。スレッドのこうした抽象的同一性によって時間と文脈を隔た思考（テキスト）の間にウィトゲンシュタイン独特の連続性が生ずるのであり、スレッドとは思考とテキストを結び付ける糸なのである。

以上の事を念頭に置きながら図4のシーケンス II の「スレッド」欄を見るなら α と δ の文字列から、シーケンス II が二つの主題の並行的展開の場であることが読み取れるのである。シーケンス II で考察されるのは「言語ゲームの根底における語られることのない確実性」と「ムーア言明の意味と妥当性」という二つの主題なのだがそれらがこの表で δ と α によって表わされているのである。スレッド欄の α 同士、 δ 同士を線で結ぶと図6の様にサブシーケンスの二つの系列ができ、それらは最後のサブシーケンス b" で合流する。これら二系列はシーケンス II で相互独立に平行して展開される二つの思考の流れ（思考系列）を示し、b" での合流は二つの思考系列の最初の擦りあわせを示している。以下二つの主題の展開と最初の擦りあわせの様子を見てゆこう。

<図6 二つのスレッドに対応するシーケンス II の思考系列>



第一主題：言語ゲームの基底にある語られない確実性 この主題が第三部の思考の到達点である「非表明的共同確実性」という概念を引き継ぐものであることは明らかである。第三部でこの概念は言語や言語ゲームと全く切り離された所で思考されていた。太古の人類 (§284) やリス (§287) の例が象徴するように、そこで思考されていたのは反省以前の動物的存在としての人間の行為の内に語られることなく示される確実性であった。それは「語り得ない物については沈黙しなければならない」というフレーズに象徴される『論考』的な前反省的無垢へのノスタルジーを引きずるものである。この前反省的前言語的な確実性をここで改めて「動物的確実性」と呼ぶことにしよう。『論考』的視点からすれば動物的確実性が言語から切り離されて思考されていることは、原初的なものを言語的汚染から防御する積極的・肯定的なことである。こうして守られた動物的確実性は『論考』的思考にとって最終的なものである。すべてが究極的には原初的な動物的確実性に根差し、それがただ存在するという事実が最後に残るのである。『探究』のキーワードの一つである「生活形式 *Lebensform*」という概念も明らかにこの思考感情（それを前稿で「事実の論理」と呼んだ¹⁰⁾）を受け継いでいる。

シーケンス II においてもこの主題(δ)を巡って最初に思考され表現されるのはこの動物的確実性である。サブシーケンス a (§§ 331-346) で我々の様々な行為においてその前提として疑われていないものの例が挙げられている。すなわち実験という行為において眼前の器具の存在が、計算においては紙上の数字の不変性と記憶が疑われず (§ 337)、問いという行為において相手が自分の言葉を理解するということや自分の記憶が疑われず (§ 345)、チェスにおいては盤上の駒が勝手に位置を変えないということや自分の記憶が疑われない (§ 346)。

続くサブシーケンス a' (§§ 354-359) でこれらの例を通じて示された確実性の一般的性格付けが試みられるが、そこで示されるのは次のように言語的反省のもたらす動揺から自由な安らいだ動物的確実性に他ならない。

「私は・・・知っている」はなお争っている確実性でなく安らいだ確

¹⁰⁾ 拙稿『『確実性について』におけるウイトゲンシュタインの思考(2)』、『言語文化論集』52号(2000)、p.119 参照。

実性を表わすと言えるだろう。(§357)¹¹

今私はこの確実性をそそっかしさや浅薄さとみなすのではなく、一つの生活形式とみなしたい。(この表現は極めてまずい、それは多分正しく思考されていない)(§358)

しかしこれが意味するのは、私がこの確実性を正当化や非正当化を超えて横たわっている何か、いわば動物的な何物かとみなしたいということである。(§359)

ここで注目したいのは§358である。事実の論理という原初的無垢へのノスタルジーからすれば「この確実性を性急とみなさず一つの生活形式とみなす」という思考はなんら非難されるべきものではない。そのあとに「これはただ事実として眼前に存在する。そしてすべての説明はどこかで終わる。」といったいかにも「ウィットゲンシュタイン的」なフレーズをつけて思考のコーダとして何の不思議もないものである。それに対してここでは、それが不器用に表現された思考である事、そして恐らくは誤って思考されていることが述べられている。これは第四部の思考でウィットゲンシュタインが立っている場、目指している地点が事実の論理とは全く異なっていることを示している。以前の思考では最終地点であったもの(動物的確実性)が今は出発点にすぎないのである。新しい思考は語られることのない動物的確実性とそれを語ること(すなわち言語)との内在的關係(それは以前の思考では永遠に封印されていた事柄である)へと向かうのである。

この新しい動きはサブシーケンス a' において先ず認められる。それまで「動物的確実性」として捉えられてきた原初的確実性がここで言語ゲームの基底として見直される(図5参照)。その過程で二つの重要な事が明示される。第一は確実である事柄が何かについてである。これまでそれはムーアの例に準じた自明な命題群(我々は便宜上それをムーア命題と呼んでいる)として捉えられてきた。その中には自分の手の存在に関する命題や自分は月へは行ったことがないという命題等様々なものが含まれていた。それに対して原初的確実性が言語ゲームの基底として理解されるに当たって、事物の存在と語の意味の二

¹¹ 本論で使用する訳は全て拙訳である。黒田訳(『確実性の問題』大修館)を適宜参照した。

群の事柄がその内容として焦点化されるのである。上述のようにこれら二つはシーケンス I (§ 310) で非焦点的にすでに注目されているが¹²、ここでは次のようにこれら二者の関係が対象化され、事物の存在と語の意味の知が不可分なものであることが明確に述べられる。

もし私がこれが自分の手なのかと疑おうとすれば、「手」という言葉に意味があるのかとどうして疑わずに済ませることができようか。だから私はやはりそれを知っていると思われる。(§369)¹³

原初的に確実なものが事物の存在と語の意味として捉え直されたなら、それが言語ゲーム一般の存立条件と深い係わりがあることは自ずから照らし出されるのである。第二は事物と語に関するこの原初的な確実性を言語ゲームの側から見るなら、言語ゲームというものが存在するためには言語ゲームの基底のある地点で完全な「疑いの不在 Zweifellosigkeit」というものが成立していなければならないということである。今後繰り返し登場するこの思考の最初の表現は次のようなものである。

しかしより正確には次のようになる。私が自分の文で「手」や他のあらゆる語を疑念無く使っているという事、そして疑おうとするや否や途方に暮れるだろうという事は疑いの不在が言語ゲームの本質に属すること、そして「私はどのようにして知なのか」という問いが言語ゲームを引き伸ばしたり終了させたりすることを意味している。(§370)

以上が新しい思考運動の第一主題である「言語ゲームの基底の語られない確実性」の始まりである。今後この主題は、この確実性が語られないということ、それは知なのか、等について更に深化されてゆくが、ここではひとまずそうした展開を触発する第二の主題「ムーア言明の意味と妥当性」に目を向けよう。

¹² 言語ゲームの基底としての事物の存在と語の認識については §455 も参照されたい。

¹³ 事物の存在の知と語の意味の知が不可分であることについてはこの他に §459, 506 を参照。

第二主題：ムーア言明の意味と妥当性 第二主題「ムーア言明の意味と妥当性」は第一部以来ウィトゲンシュタインの思考を底通するものであるが、これを巡って思考が展開される場合に二つの下位主題あるいは視角が存在する。第一はムーアの言明に対する批判であり、第二がムーアの言明の意図の付度である。

「ムーア言明の意味と妥当性」という思考領域に存在する思考の極性という観点からすれば前者を巡って展開される思考はムーアに対して否定的な要素を表現している。他方後者を巡って展開される思考の示す態度は誤りの中に潜む真理を取り出すために本当の意図を探るというものであり、ムーアに対する肯定的な要素を表わしている。対立はするが共在不可能ではないこれら二要素間の往復を通じて「ムーア言明の意味と妥当性」を巡る思考は深化し、先の第一主題との接点が次第に浮かび上がってゆくのである。シーケンス II にあつて否定的要素はサブシーケンス b で、肯定的要素はサブシーケンス b' で登場する。それぞれの具体的内容に目を向ける前に、第一主題と第二主題の関係について考察したい。

これら二つの主題は異なる文脈的起源を持ち、その限りで完全に断絶している。「言語ゲームの基底にある語られない確実性」という主題は『哲学探究』以来の言語ゲームとその根源を巡るウィトゲンシュタインの思考の延長線上のものであり、ムーアや彼の哲学はそこに何ら積極的に関与していない¹⁴。他方「ムーア言明の意味と妥当性」はムーアが現実になした言明を巡る考察であり、そこに言語ゲームは一切関与していない。ウィトゲンシュタインの基本的思考態度は両主題の元の文脈にできる限り密着して進む、というものである。その結果それぞれが内包するローカルな要素が可能な限り引き出されるとともに、両者は可能な限り隔離され続ける。こうした隔離が限界に達し、両者の関係が明白になった段階でそれは一挙に新たな主題として登場する。第四部では今後こうした過程が徐々に進行するのだが、両者の関係そのものはこの段階においても抽象的に捉えることによって次のように十分把握可能であり、そうすることは今後の展開に対する良い展望を与えるだろう。先ず「ムーア言明の意味と妥当性」の側から考えるなら、第一の問いは「ムーアの「知っている」の使用は正しいのか」であり、それに対する答えによって思考は分極する。もしそれが正しいなら、「これが自分の手である」ことは知識であることになる。ここ

¹⁴「言語ゲームと確実性」という主題は決して『確実性』において初めて登場するのではない。萌芽的で断片的ではあるが『哲学探究』でそれは姿を現している。cf. 『哲学探究』§212,238.

で第二主題に移行するなら、今知識とされたものこそ言語ゲームの基底にあるものであるから、言語ゲーム全体がある知識を基盤に存在していることになる。こうして二つの主題は「言語ゲームの基礎には普段語られることのない知識が存在し、ムーアはその存在を正しく表現した」という一つの思考で結ばれることになる。他方第一の問いに否定的に答えるなら二つの主題はこれとは全く異なった「言語ゲームの基礎には語るべからざる確実性が存在し、それを「知」として語ったムーアは誤りを犯した」という思考によって結ばれることになる。それは先の思考と対立する極性を持つ思考である。このように平行して展開される主題は鍵となる問いによって分極した思考によって幾通りにも結合されてゆく。やがてその中の一つに向かって思考が進行し、次に新たな問いが発せられ、新たな思考分極が生じる。第四部におけるウィトゲンシュタインの思考は基本的にこうして進行し、新たなものを生み出してゆく。この過程を鍵となる問いによる思考系の分極過程と呼ぼう。特に第四部前半部の思考では複数の鍵となる問いが次々と生み出さる。それは思考系の分極の可能性が最大限探られる発散的過程であり、困難な思考過程であるが、理解のポイントはこれらの問いを系統的に追うことである。それらの第一がムーア言明の妥当性を巡るものであり、それをムーア言明妥当性問題と呼びたい。この第一の問いを巡る肯定的・否定的両思考の様を次に眺めてみよう。

サブシーケンス b (§§ 347-353) では「あれが木だと私は知っている」というムーア言明が問題にされ、批判される。ムーアとムーア言明に対する否定的・批判的思考が提示されるのである。批判のポイントは文脈から切り離された言語のこうした使用は（本来の用途から切り離された道具のように）無意味だというものである。言語ゲーム概念に立脚したこの批判が簡単に棄却できるものでないことは明白であるが、今後の思考の展開の中でこうしたムーア批判的思考は次第に後退し、最後には消滅する。それと反比例してムーアとムーア命題に肯定的な思考が、ムーア言明の本当の意味を探る試みとして次第に強化されるが、それが最初に登場するのがサブシーケンス b' (§§ 360-368) である。ここでは「これが自分の足だと私は知っている」というムーア言明が例として用いられるが、試みられているのはこの言明を「私は如何なる経験もこれに対する反証としては受け入れない」という「宣言 Ausruf」として解釈することである (§ 360)。これはムーア言明を「これは自分の足だ」というムーア命題にある種の絶対性（経験からの超越性）を与える宣言とみなそうという試みである。こうした解釈をムーア言明の超越性宣言解釈と呼ぼう。ムーア言明の超

越性宣言解釈は今後の思考の流れの中で次第に大きな意味を持ってゆき、やがてムーア命題の超越性という独立した主題(スレッド)として確立されてゆく。そしてこの主題が実はこれまで「ムーア命題の限界性」として捕らえられてきたスレッドβの別の表現であることも次第に明らかになってくるのであるが、ここではこの解釈がウィトゲンシュタインの思考の中で持つ戦略的位置を確認するために先の批判的思考との関係を確認しておこう。ムーア言明が言語の脱文脈的使用であり無意味であるという批判の背景には、ムーアの言明は発話者の認知状態を記述する命題として意図されているという解釈が存在する。この解釈に従えば、ムーアがなそうとしたのは自分の現在の認知状態を「私は・・・知っている」という命題によって記述報告することとなる。こうした使用を肯定する者が「知っているものを知っているとして記述することの何が悪いのか」と考えるのに対し、ウィトゲンシュタインの様に批判する者は「言語の意味と存在は使用の文脈と独立に存在するものではない」と考える。ウィトゲンシュタインにとってこの言語理解は決して譲ることのできないものであるから、もしムーアの言明の中に真理の種子が宿るのなら、それを救い出す道はそれを記述的発話ではなく遂行的発話に類するものとみなすことであろう。従ってムーア言明を「私は如何なる経験もこれに対する反証としては受け入れない」という一種の決定とみなそうとする § 368 は、サブシーケンス b' の思考がムーア言明の非記述的解釈の試みである事を示しているものとして理解されねばならない。

もし誰かが、いかなる経験もそうでないという証明とはみなさない、
 と言えばそれは決断なのである。その人がこの決断に背いて行為することは可能である。(§ 368)

二つの主題の最初の擦りあわせ(サブシーケンス b') 『確実性』第四部の思考運動をその開始部において導くこれら二つの主題の擦りあわせの最初の試みがサブシーケンス b' (§§ 379-388) でなされる。今後何度か繰り返される思考接触の場の典型例として、ここで展開される思考の有り様をみてみよう。

このサブシーケンスは「私は情熱を持って「これが足だと私は知っている」と言う。しかしこれは何を意味するのか。」(§ 379) という一節から始る。一見するとこれは「これが足だと私は知っている」というムーア言明を例としたムーア言明の意味の解釈を目指した思考、すなわち上述のサブシーケンス

b'の思考の異なる例を用いた継続のように見える。しかし「情熱を持って mit Leidenschaft」という何気ない一句がこの思考をより多元的な場に位置づけているのである。この解釈の正当性を確認するためには、唐突に登場した「情熱を持って」という一句の起源を確かめる必要がある。この一句は今問題にしているテキストの直前のサブシーケンス a'" (§§376-377) で次のような形で導入されたものである。

これが（例えば）自分の足だと知っている、と私が情熱をもって主張する場合もある。（§376）

しかしこの情熱は（極めて）希なものであり、私が通常この足について語る時その痕跡すら存在しない。（§377）

ここでは「これは自分の足だ」という事実の認知に関わる二種の状態の対比が示されている。一つは自分がこの事実を認知していることを相手に明示的に示そうとする時に生起する情熱の状態であり、もう一つは我々がそうした意図を持たず通常この事実を認知している非情熱の状態である。後者がムーア知に対応し、先に検討したシーケンス II サブシーケンス a' (§§354-359) では「安らいだ確実性」（§357）とか「生活形式」（§358）とか「動物的な何か」（§359）などと呼ばれたものである。前者はこうした非表明的確実性としてのムーア知をあえて言語的に相手に表明する行為としてのムーア言明である。この両者の間には深い矛盾がある。ムーア知が享受する確実性はそれが非表明的である事、誰も敢えて言葉にしないほど自明であることに由来している。他方ムーア言明を為す者は、こうした確実性（あるいは知）の存在を相手に示したくてムーア言明を為すのだが、その行為そのものによって自らの認知状態は焦点化され情熱を帯びたものとなる。すなわちある物の存在を示そうとする行為自身によってその物の存在を破壊するのがムーア言明なのである。こうした関係をムーア知とムーア言明の根源的対立関係と呼ぼう。サブシーケンス b'冒頭の § 379 は、ここでの思考とはこの根源的対立関係を背景としながらムーア言明の意味を問う試みである事、すなわち存在しないはずの二つの主題の交点を目指した思考である事を示しているのである。もちろんこの対立がこのサブシーケンスにおいて解消・解決されるわけではないし、この思考がそれを目指しているわけでもない。しかし問われているのは単にムーア言明の解釈ではなく、極め

て複雑な思考場の特異点としてのムーア言明の解釈であり、それについてくる様々な思考経路なのである。

さて § 379 の問いに引き続き、「世界に何が生じてもうでないと私を納得させることはない」 (§380) という表現によるムーア言明の解釈が試みられる。これは § 360 で登場した「私は如何なる経験もこれに対する反証としては受け入れない」という表現と類似したものであり、同様にムーア命題の超越性宣言と呼ぶこともできよう。ただここではこの表現に対して更に次のように解釈が試みられる。

さて「世界に何が生じても・・・」はいかなる種類の文であるのか (§384)

これは予想の形をしている。しかしもちろん経験に基いた予想ではない。 (§385)

自分は・・・だと知っている、とムーアのように言う者はある事が自分に対して持っている確実性の度合いを示しているのである。そしてこの度合いには最大値があるということが重要なのである。 (§ 386)

ここで提示されているのは、ムーア言明とはムーア命題の持つ主観的確実性の度合いを提示する行為であるという解釈である。これは上で触れたサブシーケンス b' の「決定としてのムーア言明」という解釈とは微妙に食い違うものである。だからといってウィトゲンシュタインの思考の首尾不一致が問題とされるべきではない。ここで試みられているのは限定された前提から導かれる結論を確定することではなく、測りがたいほど複雑に広がった思考の場において「ムーア言明」という行為が持つ意味を様々な方向に探ることなのであり、そうした探査の諸結果から思考の場が限定し返されるという過程の一環なのである。ここで何より重要なのはこの解釈においてムーア言明がムーア命題の主観的確実性と結び付けられていることである。それによってこれまで相互に隔離されていた二つの主題の接点が初めて探られたのである。そしてこの探索は「ムーア命題とムーア言明の根源的対立関係」という封印された思考の場へと接近する試みなのであり、この時点ではそれがどの程度成功したかというよりは、それが試みられたということがより大きな意味を持つのである。

我々の以上の解釈は余りにも「創造的」だと思われるかもしれない。しかしこのサブシーケンスの末尾の § 387 と § 388 の間には次の様なメタ哲学コメントが挿入されている。

独力で思索することのできる哲学者ならば、私のノートに興味をもって読んでくれるのではないかと思う。私は稀にしか問題の核心を射当てないかもしれないが、私がいつも狙っているのが何であるのかを彼は認識することだろう。

ウィトゲンシュタインの語り口はこの「問題の核心」が極めて限定された、しかも困難な思考対象であることを示している。「ムーア命題とムーア言明の根源的対立関係」以外の主題がこの条件を満たしうるとは考えられないのである。

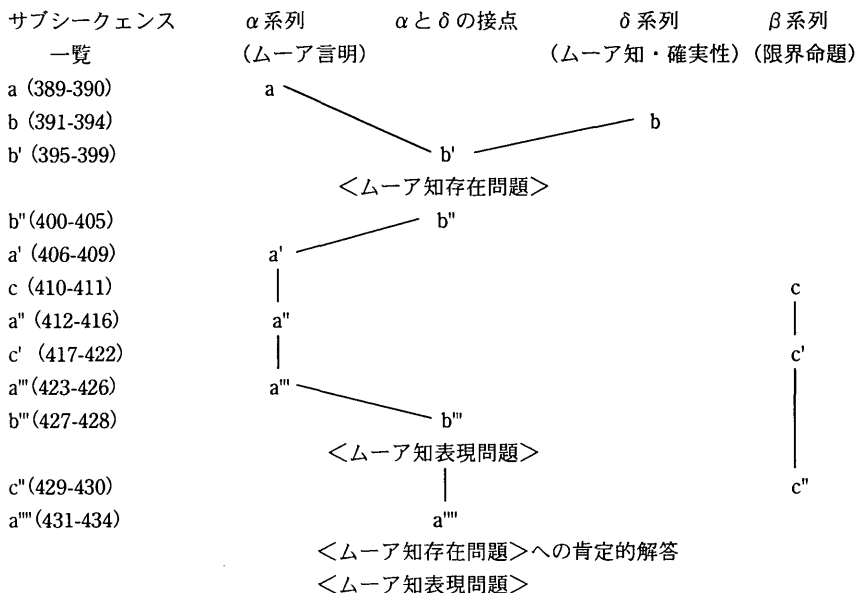
2.1.2.2 二つの主題の接触を通じた鍵となる問いの更なる生成（シーケンス III）

「ムーア言明の意味と妥当性」と「言語ゲームの基底の語られない確実性」の二つの主題を巡って思考が進められるという点においてシーケンス III はシーケンス II の基本構造を引き継ぐものであり、その継続とみなしうるものである。しかしシーケンス II で二つの主題の独立した並行的展開が主でありそれらの接触が従であったのに対し、シーケンス III ではこれが逆転する。二つの主題の接点である「ムーア知とムーア言明の関係」という問題があたかも独立した主題であるかのように、それに関する思考が一つのサブシーケンスの系列をなすのである。こうした構造を先程の様にサブシーケンス図（図4）のスレッド欄から復元すると図7のようになる。

図の左端コラムでc文字で表わされているサブシーケンス(c,c',c'')は「誤りと疑いの限界としてのムーア命題(群)」という主題(スレッドβ)を巡って思考が展開されている場である。第二部以来なじみの深いこの主題についてシーケンス III ではそれが体系をなすこと、無根拠である事、等を巡って思考が展開される。しかしこれは以前の思考の反復的要素が強いばかりでなく、シーケンス内の他の思考系列から切り離されており(このことは図においてc-c'-c'' という系列が他の系列と接点を持っていないことによって表現されている)現在進行中の思考運動全体から見れば大きな意味を持つものではない。事

実旧来のこの主題は以降次第に姿を消す。

＜図7 シークェンス III の思考系列＞



さてこの図中央の b'-b''-b'''-a''' という系列はムーア知とムーア言明の関係を巡る思考系列を表わしているが、この「主題」(より正確に言えば二つの主題の関係)は上述の様にそこから異なった極性を持つ幾つもの思考が分れる不安定な場であり、一連の核心的な問いによってその分極の様が表現され探られることになる。こうした過程でシークェンス II ではムーア言明妥当性問題という一つの問いが提示されたにすぎないが、図に示されているようにここでは新たにムーア知存在問題(ムーア命題との認知的関係は知識か)とムーア言明公私解釈問題(ムーア言明の「私」は特定の個人を指すのか我々一般を指すのか)ムーア知表現問題(ムーア知が存在するとしてその存在はどのように表現されるべきなのか)の三つが提起あるいは暗示され、その中でムーア知存在問題には相当程度肯定的な答えがサブシークェンス a''' で示される。この図で α 系列(a-a'-a''-a''')、 δ 系列(b)として示されているサブシークェンスの思考は決して反復的ではなく興味深く重要な意味を持つものではあるが、その展開は予測

可能であり図4サブシーケンス図を手がかりとして容易に追跡できるので、ここではムーア知とムーア言明の関係を巡る思考系列に考察を集中させたい。この思考系列とそこで生成される問いの系列を正しく把握することこそ進行中の複雑な思考運動を理解し、その方向を予期するための最大の鍵であるからである。

思考されたことのない知は存在するのか：サブシーケンスb'(§§395-399)

ウィトゲンシュタインにとって『確実性』は知と言語に関わる自己の思想的根底を覆す破壊的試みである。その核心は語り得ないとこれまで自らに言い聞かせてきた物が実は語りうるのだという厳然たる事実を直視することにある。これから考察しようとするサブシーケンスb'はこの核心的営みが初めて露になされる思考の場である。この営みの衝撃を十分に認識するために、ここで破壊が試みられるもの、すなわちこれまでウィトゲンシュタインの思考の中で公式に受容されてきた知と言語に関する立場を再確認しておこう。それは「言語ゲーム概念に基く知識観」と呼びうるものであり、『確実性』冒頭の次の一節に凝縮されている。

人は(ムーアのように)自分の知っていることを枚挙できるだろうか。そう簡単にはできないと私は思う。一というのももしできるというのなら「私は・・・知っている」が誤用されることになるから。そしてこの誤用を通じて奇妙にして極めて重要な心的状態が示されているように思える。(§6)

「そしてこの誤用を通じて・・・」という最後の文によってムーアとその思想に対するウィトゲンシュタインの並みならぬ関心と敬意が十分に示されているものの、ここで明確に示されている立場は「私はこれが自分の手であることを知っている」というムーア言明は「知っている」の誤用であり、「ムーア知」(これが自分の手である事に対する自分の認知的関係)は知でない、というものである。この背後には知識とは我々の言語ゲームの中で「知っている」という語の適切な使用によって画定される存在である、という知識観がある。この知識観にとって知識とはそれについて我々が「知っている」と言いうるものであり、思考されるものでなければならない。こうした観点からすれば、言語の及ばないという意味での原初的なものは知識ではない。有名な『哲学探究』§2の言

語ゲーム（言語ゲーム（2））は石材を運ぶ助手が自分の知を「私は・・・知っている」と表明する手段の存在しない言語であるから、この知識観によれば彼の言語運用を可能にしているものは知識ではないことになる。次のサブシーケンス b の思考は明らかにこうした知識観の破壊の試行であり、ムーア命題と我々の認知的関係が知であることを主張することによりムーア知存在問題に肯定的に答えようとする試みである。

言語ゲーム（2）において、これらが石材だと自分は知っているとは彼は言えるか。－「言えない。しかし彼はそうだと知っている。」（§396）

私が間違っていてムーアは正しいのではないか。私は思考と知識を混同するという初歩的な誤りを犯したのではないか。もちろん私は自分に対して「自分が生まれる以前も長い間地球は存在していた」と考えるわけではない、だからといって私はこの事を知らないことになるのか。それから様々な帰結を引き出すことにより私はそれを知っていることを示しているのではないか。（§397）

そして私はこの家に地下深く六階まで続く階段がないことを、そんなことを考えたことが無いにもかかわらず、知っているのではないか。（§398）

これが未だ試みであり言語ゲーム的知識観の最終的破壊でないことは、このあとに次のような揺り戻しが付け加えられていることに示されている。

しかし私が帰結を引き出しているというのは単に私がこの仮説を受け入れていることを示しているにすぎないのではないか。（§399）

しかし一度根底から揺さぶられた思考が元に戻ることはない。言語ゲーム概念に基づく知識観が思考の不動の基底としてあり続けることは最早無い。だからといって「知っている」という表現の使用と知識の存在は全く無関係であるという脱言語的知識観へとウィトゲンシュタインが回帰する訳ではない。言語ゲームという概念がウィトゲンシュタインの思考にもたらしたものが消滅するわけではない。彼の思考がこれから向かおうとするのは知識の存在を完全に言

語使用に従属させる知識観¹⁵でも、逆に完全に独立させる知識観でもない。それは何か第三の知識観の様なものでなければならぬだろう。それは最早知識観とは呼び得ない知と言語の関係についてのある思考でなければならぬ。そしてこうした思考が次に直面するのはムーア言明の意味という問題であるに違いない。何故なら、もし語られず思考されないムーア知が知識であるなら、それを「私は・・・知っている」と表明しようとしたムーアの行為は何故問題なのか、あるいはどのような意味で問題ではないのか、が当然問われるからである。これが続くサブシーケンス b" で問われているものなのである。

風車と戦う思考者ウィトゲンシュタインとムーア言明の公的解釈：サブシーケンス b" (§§400-405)

サブシーケンス b"はその前後をメタ哲学的コメント (§§ 400,405) で区切られているという面白い構造をしている。これらのコメントはここでウィトゲンシュタインがムーア言明の意味という問いを上記のような文脈で問おうとしているという解釈に対する一つの傍証となるものである。このサブシーケンスは次の一節で始る。

ここで私は風車と戦ってしまいがちである。それは自分が本当に言いたいことをまだ言えないからだ。(§400)

自らをドンキホーテに擬すこのコメントは問われている問いが容易でないこと、それを正しく表現するのが困難なものであることを暗示している。他方これに続くテキストでムーア言明の意味（意図）という問題が扱われていることは明白である。従って事を困難にしているのはこの問いが独立に問われているのではなく、言語ゲームの基底であるムーア知（確実性）の表現としてムーア言明がどのように理解されるべきかという形で問われているということであると考えられる。このコメントに続く以下のような思考の展開はこの解釈が妥当なことを示している。

私は次のように言いたい：論理の命題ばかりでなく経験的命題の形を

¹⁵ 因みにこの知識観はオースティンが「他者の心」で試みたものである。オースティン『哲学学論文集』大修館（坂本監訳）、pp.104-182.

した命題が思考（言語）のすべての操作の基礎を形成している。一この確認は「私は・・・知っている」という形をしていない。「私は・・・知っている」は私が知っていることを述べるのであり、それは論理的には興味のないことである。（§401）

ここには二つのことが存在し、思考はそれらの間に渡されている。第一はここで「経験命題の形をした命題」と呼ばれているムーア命題が言語ゲームの基底において担っている特別な役割あるいは位置である。それは論理の命題の役割に比されているように、確実性、固定性、論理性、絶対性、超越性、等と呼びうるものである。もう一つはムーア命題のこうした役割の言語的表現であり、そうした表現としてのムーア言明の評価である。ムーア命題の言語ゲームにおける論理的役割の表現として見た時、ムーアの言明はいかなるものか、これが問われている問いである。上の一節が下している判定は、ムーア言明の「私」が特定の個人を意味する限りそれはムーア命題の論理的役割の表現としては不適切である、というものである。明らかにその根拠はムーア命題の確実性・論理性は個々の「私」に関わるものではなく、言語共同体全体に、従って「我々」に関わるものであるということである。ムーア命題の確実性、すなわちムーア知に関するこの解釈、それが私的なものでなく公的なものであるというこの解釈をムーア知の公的解釈と呼ぶ。これはムーア言明の「私」の次のような解釈と連動している。もしムーア言明をムーア命題の論理的役割の言語的表現として妥当なものとして解釈しようとするなら、「私は・・・知っている」の「私」は特定の個人ではなく一般的「私」、すなわち「我々」を意味すると解釈せねばならない。これがムーア言明の公的解釈である。上の一節はムーア知とムーア言明の公的解釈を内包する思考を表現する。いうまでもなくこれら相互に連動した公的解釈は第一部 § 58 で示された後、これまでの思考で一貫して前提されてきたものである。それがここで改めて明示的に取り上げられ表現されているのは、今後この公的解釈が問題化され対象化されることの予示に他ならない。ここで仄めかされているのは、ムーア言明の「私」は特定の個人か我々全体かという問いであり、ムーア知とは私に関わるものなのか我々に関わるものなのか、という問いなのである。これを公私問題と呼ぼう。公私問題は今後次第にその重要度を増してゆく。

このように公私問題を萌芽的に生成した思考は更に次のように続く。

人について何かを知っているとかその人の言うことはそれゆえ無条件に真理であるとか、とムーアのような意味で言うことは誤っていると私には思われる。一その事はその人の言語ゲームの不動の基礎である限りにおいて真理なのである。(§403)

私は次のように言いたい：人間はある地点で真理を完全な確実性をもって知るというのではない。そうではない：完全な確実性とは彼らの態度の問題なのだ。(§404)

ここでは先程と違った点について（奇妙に三人称に言い直された）ムーアの言明が批判されている。その誤りとはムーア命題の確実性をその不動の真理性の現れとみなしていることである。ムーア命題は言語ゲームにおいて特別な確実性を持っている、しかしそれは真理の問題ではなく、言語ゲームに参加する人間たちの態度の問題なのである。先の公的解釈と合わせるなら、ここで提示されている思考を次の様に表現できよう。ムーア命題の特別な確実性（ムーア知）とは言語ゲームに参加する人間全体（「我々」）が特定の命題（ムーア命題）に対して疑いと誤りの可能性を排除するという特別の態度を取っているという事態に他ならない。これをムーア知の公的かつ遂行的解釈と仮に呼ぼう。もしこの思考がウィトゲンシュタインが目指したものであれば、彼の思考はここで終わることができよう。しかし現実にはこれは一つの試行であり、言いたいことはまだ言われていないのであり、試行は更に続くのである。従ってこのサブシーケンスは次のように締めくくられる。

しかし言うまでもなくここにもなお誤りがある。(§405)

こうした思考に続くのがムーア言明の意味の様々な角度からの考察であるのは極めて自然なことであり、これに続く $a'-a''-a'''$ という三つのサブシーケンスの思考はそうしたものに他ならないのである。

語られない知を語ることに ついて -サブシーケンス b''' (§§427-428), a''' (§§431-434)

ここまで辿ってきた「ムーア知とムーア言明の関係」を巡る思考系列は b'' と a''' という二つの短いサブシーケンスで終了し、それと同時にシーケン

ス III も終了する。これまでの考察からも明らかなようにシーケンス II とシーケンス III の思考、そしてより大局的に言えばパート A の思考は本質的に拡散的であり試行的である。すなわち未だその全貌が明確にならない問いを確定する作業として新たな問いが次々と生み出され、新たな思考が次々と試みられるが、何か確定的な思考が明示されるということは未だ視野に入らないのである。こうした過程の続きとして b" と a" でも新たに一つの問いが曖昧な形で生み出される。それは本来示されるのみで語られないムーア知をいかにして語ることができるのか、というこれまでも何回か仄めかされてきた問い（ムーア知表現問題）である。それは次のように示されている。

彼が「私は・・・知っている」という言葉を決して使わないとしても、彼の行動が知識を示していることを我々は示す必要がある。（§ 427）
 「私はこの部屋が二階にあること、ドアの向こうに階段へ続く短い廊下があること、等を知っている。」私がこのように言うようなケースを想像することはできる。しかしそれは極めて稀なケースであろう。しかし他方で私はこの知識を日々自分の行動と言葉を通じて示している。・・・（§ 431）

これらの小節について先ず注目しなければならないのは、行為において示され語られることの無い原初的な確実性が果たして知識なのかどうかという問い（ムーア知存在問題）がすでに肯定的に解決されたかのようにここで語られていることである。上で見たようにこの問いに対する肯定的な解が初めて示された b' (§§ 395-399) で答えは「知っていることを示しているのではないか」（§ 397）とか「知っているのではないか」（§ 398）という形をしており未だ試行的であった。それは反対の可能性を残したものであった。それに対し「私はこの知識を日々自分の行動と言葉を通じて示している。」という表現が示しているようにここでは原初的な確実性が知識である事がすでに自明のこととして前提されている。ムーア知存在問題はもはや解決済みで改めて対象化するまでもないものとして扱われているのである。これら両思考の間に通常ならば存在するはずの「やはりこの確実性は知識である」という明示的な問題の決着の場面は存在していない。ウィトゲンシュタインの思考過程でしばしば見られるこの跳躍的で高踏的なステップによって我々は解決以前の場面から解決以後の場面へと移動したのである。そしてここでの思考にとって重要なのは、こうしてムーア知存

在問題を過去化することによって初めて「ではその知識はどのようにして言葉にされるのか」という次の問い（ムーア知表現問題）が問いうるということである。ウィトゲンシュタインは常に多くの問いが相互に条件付け合っている複雑で多元的な場において思考している。それらの問いに対する彼の態度は様々であり、あるものは簡単に飛び越えあるものには異常に執着し、又ある時にそれを簡単に放棄したりもする。一見ランダムに見えるこうした問いのリズムは彼の思考が最終的に狙っている場所がどこなのか、どのようなルートからそこに辿り着こうとしているのかといった事を考慮することによってのみ理解可能となる。そうした考慮なしに個々の問題にとらわれるなら、思考の大きな流れを見失うことになる。ここで我々が目撃している飛躍もこうした問いのリズムの一例に他ならない。それが示しているのは、ウィトゲンシュタインの思考が今目指しているのは「ムーア知存在問題」が指し示す場所ではなく、「ムーア知表現問題」が示す場所だということである。

さてこうして一挙に焦点化されたムーア知表現問題が容易には解決できないこと、あるいはストレートな形で解決できないことは明らかである。というのもそのストレートな解は「語り得ないものを語る」という袋小路を抱えているからである。ムーア知を言語的に表現することはもちろん可能である。しかしその言語行為によりムーア知に特別の確実性を与えている非焦点性、非表明性は破壊される。ムーア知としてのムーア知は語り得ないのである。とすればこの解決不能の問いを目指して進んできたウィトゲンシュタインの思考が袋小路に捕らわれることなく更に前進しようとするればこの問いを何らかの形で飛び越えなければならないだろう。そしてそれがどの方向へのものであるかは予測不可能であり思考は必然的に飛躍せざるを得ない。事実ウィトゲンシュタインの思考は今後目立たない形で飛躍を実行する。それは反省問題という新たな問いを徐々に導入するという形でなされる。事後的に振り返ればこの反省問題とは「語られない知をいかにして語るべきか」という元のムーア知表現問題の転換形態として理解される。こうした転換によってのみウィトゲンシュタインの思考は更に前進し得たと言えるだろう。この転換が単なる問題の回避なのかあるいは思考の創造的飛躍なのかは、それによってウィトゲンシュタインの思考が言語と知の内在的関係という原初の問いに近づいたのか遠ざかったのかによってのみ今後判定されるべきものである。

2.1.3 パートA第三段階：問いと主題の更なる明確化と進化（シーケンスIV,V)

シーケンス II と III は拡散的思考の場であった。複雑な思考領域の全容を明らかにしようとする方向に思考の経路が試され、萌芽的・潜在的な形で多くの問いと主題が触れられた。それに対してパートAの形式的終結部であるシーケンス IV と V は相対的に集約的思考の場である。新たな思考要素が開拓されるというよりは既に触れられたものに明確な形が与えられる。そうした思考要素と問いについて以下考察しよう。それらはパートBの思考への架け橋となるのである。

（1）ムーア命題の超越的現実性 -IVa',IVb,IVb',IVb' ¹⁶-

この概念がシーケンス IV の中心主題である。それは IIb',b"で提示された「ムーア言明のムーア命題超越性宣言としての解釈」という思考の継続であり展開である。シーケンス II で問題になったのは「私は・・・知っている」というムーア言明が本当に意味している（はずの）ものであった。この問いに対して示されたのは、いかなる経験的証拠もムーア命題に対する反証とはみなさないという態度表明（超越的態度表明）がムーア言明の意味であるという解釈であった。それに対して今問題にしている一連の箇所では、こうした態度表明を通じて示されているムーア命題独特の現実性（それは「ムーア現実性」と呼ぶものなのだが）の性質が考察の焦点となる。ここで示されるのが、ムーア命題の現実性は通常の経験手続きによっては示せないという意味での超越的現実性である、という思考である。この概念を巡る一連の思考を概観しよう。

先ず IVa' (§§ 438-444)において、ある事柄の認知の現実性を相手に示すには単に「私は・・・知っている」と言うだけでは十分でなく、自分がその事を知りうる立場にある事が示されねばならない、と言われる (§§ 438-439)。そしてここで示されるべきものは単に個人的な状況ではなく、それが認知に関する一般的条件を満たしているということ でなければならないだろう (cf. §§ 440,441)。ここで問題になっているのは公的に確立された知の成立条件を示す用意があるという表明としての「私は・・・知っている」の使用である。こうした成立条件は「知っている」という表現を巡る言語ゲームの内部で規定されているものであるから、こうして確立される現実性を言語ゲーム内の現実性、あるいは経

¹⁶ 「IVb」は「シーケンス IV サブシーケンス b」を意味する。今後この表記を適宜使用する。

驗的確實性と呼ぶことができよう。第三部以前の思考にあつてこうした概念が引き合いにだされるのはムーア言明の批判のためであり、こうした言語ゲーム内的確實性の確立条件を満たしていないからムーアの言明は無意味あるいは無効であるという批判がそこで示された。しかしここで言語ゲーム内的確實性は全く違った目的のために提示されている。すなわちそれとは異なる種類の確實性の存在を示すための足場として引き合いに出されているのである。この「異なる種類の確實性の存在」は続く IVb (§§445-446) で次のように示される。

しかし私が「私には手が二本ある」と言う時、その信頼性を高めるために何を付け加えられようか。せいぜい状況は普通であると言うぐらいである。(§445)

しかし何故私はこれが自分の手であることにかくも確信を持つのか。
全言語ゲームはこうした確實性を基礎としているのではないか。

あるいは：この「確實性」が言語ゲームにおいてすでに前提されているのではないか。すなわち、事物を確実に認知しない人は言語ゲームをしていない、あるいは誤ってしているという事によって。(§446)

「この「確實性」」 (§446) と呼ばれているものは「これは自分の手である」というムーア命題の持つ確實性としてのムーア確實性である。このムーア確實性が一方で言語ゲーム内的な手続きで示し得ないものであり、他方で言語ゲーム自身の基底であること、ここで試みられているのはこの思考である。言語ゲーム内部では確立し得ないが言語ゲーム一般の存立条件であるようなこの確實性が超越的確實性である。ムーア命題の持つ独特の確實性とはこの超越確實性なのである。

続く IVb' (§§447-450) でムーア命題の確實性が数学的命題の確實性と対比され、両者の同質性が強調され、次のように言われる。

私はこう言いたい：もし算術の命題（例えば九九）が「絶対に確實」であることに驚かないのなら、どうして「これが自分の手である」という命題が同等に確實であることに驚くのか。(§448)

こうして数学的命題の確實性とムーア命題の確實性が結び付けられることに

より、双方向に通行可能な思考の回廊が出現することになる。それを通じてムーア命題を数学や論理に引き付けることもできれば、逆に数学や論理をムーア命題に引き付けることもできるのである。すなわち数学的确实性によってムーア确实性を説明することも、ムーア确实性によって数学的确实性を説明することも、共に思考の進みうる道として開けるのである。この回廊は今後次第に大きな意味を持つようになるだろう。

さてムーア命題の超越确实性を巡る以上の思考系列は、ムーア确实性の言語ゲーム根底性を狙った IVb' の次のような思考でひとまず幕を下ろすことになる。

すべての言語ゲームは語と「対象」が再認可能であるとうことに依存している。

我々はこれが椅子である事を $2 \times 2 = 4$ と同様の容赦無さをもって学ぶのである。(§455)

それゆえ、もし私がこれが自分の手である事（それが何を意味するのであれ）を疑うなら、何故それらの言葉の意味についても疑わないのか。(§456)

ならば私は、确实性は言語ゲームの本質の内に存在していると言いたいのか。(§457)

最後にここで注目すべきは、ここで問題になっているのがムーア命題一般ではなく、語の意味と事物の存在という言語ゲームの不可欠の存立条件となる二項である点である。ウィットゲンシュタインの思考は明らかに思考と行為の一般的根底ではなく、言語ゲームの根底、すなわち言語の根底に向かって進みつつあるのである。

(2) ムーア批判の後退 -IVc, Va'-

これまで追ってきたパートAのウィットゲンシュタインの思考はムーアに批判的な立場から徐々に肯定的立場へと移行して来た。この流れは第四部末に至るまで続くのだが、その過程で何回かあたかもチェックポイントの如くムーアとムーア言明に肯定的な思考が明示的に示される。IVc の § 451 はそうしたチェ

ックポイントの一つであり、そこでムーア言明の中に登場するムーア命題が脱文脈的に使用されているために意味が不定であるという批判（ムーア言明とムーア命題の脱文脈性の批判）がある意味で撤回されるのである。それは次のようになされる。

「これは樹である」という孤立した文の意味は「これ」が何であるのか不定なので定まらない、という私のムーア批判は有効ではない。というのも、例えば「あちらの樹の様にみえる物は模造の樹ではなく本物だ」と言うことによってその意味をより限定できるからである。（§ 451）

しかしこの「撤回」は決定的なものではない。ムーアの「私は・・・知っている」という発話が通常の言語使用の文脈から「逸脱」したものであることは否定できない事実であり、「知っている」のこの使用はウィトゲンシュタインにとって容易に許容できるものではないのである。とは言うもののムーアの使用を「違法」として却下する立場にウィトゲンシュタインは最早立っていない。ここで問題となるべきはムーアの使用がどのような「逸脱」なのか、それはどのような意味を持ちうるのかということなのである。ここでは詳述しないが Va' に見られるのはムーアに対する半ば批判的で半ば肯定的な立場からのムーア言明に関する思考である。ムーア言明に対するこうした曖昧な思考を繰り返しながら今後もウィトゲンシュタインはムーアに肯定的な立場へと少しづつ向かってゆくのである。

（3）語り得ない知から疑いの起源へ - §466 と §458-

これまで考察してきたようにパートAのウィトゲンシュタインの思考の核心は「行為において示され言語ゲームの基礎となる確実性についてどのように語りうるのか」という問い（ムーア知表現問題）であった。この問いを巡って様々な思考が可能であり、事実パートAで様々な思考が試みられてきた。にもかかわらずパートAの基本的色調となってきたのは「この確実性は示されるが語り得ない知である」という『論考』以来の思考であった。この沈黙の思考はパートA末尾 §466 で次のように明示的に語られる。

だから私には次のように思われる。私はずっと何かを知っているが、そのように述べることは、この真理を言い表すことは意味を持たない。
（§466）

既に述べたようにこの思考は我々を袋小路へと追い込む。何故ならこの思考に続くのはムーア言明が無意味であるという批判であり、それは安易なムーア批判から脱却しようとしている現下のウィトゲンシュタインの思考の方向に逆行するものだからである。ではムーア言明は無意味であるという批判への逆行は何故誤りなのだろうか。答えは簡単である。ムーア言明は無意味ではないからであり、ムーア知は語り得ない知ではないからである。ムーアの言明が有意味で理解可能であるがゆえにウィトゲンシュタインは『確実性』を書いたのであり、我々は今ムーア知について論じているのである。§ 466 で試みられている思考はこの単純にして明白な事実から目をそむけるものである。それはすべての神秘主義に共通の態度である。パートB以降ウィトゲンシュタインはこの神秘主義的思考から離脱する。そのことによってのみウィトゲンシュタインの思考は続行されるのである。ではどのようにして離脱は可能なのか。沈黙の思考の袋小路からどのように抜け出せるのだろうか。沈黙の思考とは言語的反省を排除しようとする思考である。しかし現実には言語的反省が存在する。それゆえ沈黙の思考は「無垢の原初的な前反省状態」という虚構の中に埋没せざるをえない。こうした袋小路を避けるとは厳然たる言語的反省の存在から出発することである。そして言語的反省の存在から出発する一つの方法がその起源を問うことである。何故なら何ものかの起源を問うとはその存在を肯定することなくしてはできないからである。次の「疑い」の起源を巡る§ 458 の問いにおいて「疑い」は言語的反省一般の象徴として登場するのであり、沈黙の思考から脱しようとする思考経路がここに萌芽的に示されるのである。

人は特定の根拠に基づいて疑う。問題は言語ゲームにいかにして疑いが導入されるかである。(§ 458)

このように言語における疑い（そして反省一般）の起源が問われる時、沈黙の思考は排除される。なぜなら問われているのは無垢の原初状態の存在ではなく起源におけるその不在だからである。ここで疑いの起源の問いとしてその一端を見せているのが反省問題であり、パートBに至ってその全貌をあらわすものである。語り得ないものをいかにして表現するかという解の無い問いを反省問題へ転換することにより、ウィトゲンシュタインの思考は神秘主義的思考から最終的に離脱してゆくのである。

(4) ムーア言明の公的解釈の問題化から公私問題へ

ウィトゲンシュタインが「私は・・・と知っている」というムーアの言明を解釈し評価するに際し三つの次元が存在する。それらは三つの思考分岐点として作用する。第一は「私は・・・」が意味を持った適切な発話かどうかという次元であり、ムーア批判やその撤回はこの次元に即した思考である。第二はこの発話の真の意味、意図は何かという次元であり、心的状態の記述だという解釈やある種の決断の表明とする解釈はこの次元に沿った思考である。第三はこの発話が何らかの意味によって適切に解釈されるとして、その時「私」は何を指していると解釈されるべきかという問題である。この問題に対して二つの可能な解が存在する。「私」はムーアという特定の個人を指すという解釈と一般的私（すなわち「我々」）を指すという解釈である。前者がムーア言明の私的解釈、後者が公的解釈である。私的解釈によればムーア知はそれぞれの個人固有の知であり、公的解釈によれば同一の言語ゲーム（体系）に参加する人々全体としての「我々」が共有する知である。従って現下の問題構成と照らし合わせるとこの第三の次元とは、言語ゲームの根底に存在するのは「我々」が共有する知なのか「私」固有の知なのかを巡る問題ということになる。

幾度か触れたように第一部で次のようにムーア言明の公的解釈が提示された。

もし「私は・・・知っている」が文法的命題と捉えられるなら、もちろん「私」は重要ではありえない。そしてその本当の意味は「この場合疑いといったものは存在しない」あるいは「この場合「私は知らない」という表現は意味をなさない」というものである。・・・ (§ 58)

この「私は・・・知っている」は論理的洞察である。ただそれによってなんらかの实在論が証明できるわけではない。(§59)

その後ムーア言明の公的解釈が明示的に反復されることはなかったが、それは一貫して前提されてきた。例えばこれはテキストにおいて「私」と「我々」が自由に交換されて来たということ（この現象の典型的として第三部 §§ 288-299 を参照）のうちにも示されている。第四部でもここまでの思考の展開にあってはムーア言明の公的解釈が必須の要素として前提されていると考えなければならない。言語ゲームの根底にある知が「我々」の共有するものである

ことは半ば自明なこととして前提され続けているのである。そればかりでなくシーケンスⅠで次のように公的解釈が極めて明示的に反復されている。

我々は・・・と知っている、と言う時意味しているのは、分別ある人ならだれでも自分たちのような立場にあればそれを知っている、それを疑うのは非常識だ、ということである。それゆえムーアが言いたかったのも単に自分は・・・だと知っているということではなく、理性ある人間なら彼の立場にあれば誰でもそれを同じように知っている、ということなのである。(§325)

ここで公的解釈が明示的に反復されるのはその再確認のためにように思われるかもしれない。しかしあることを口にして再確認するのは問題化することの第一歩であり、この場合も例外ではない。事実これ以降ムーア言明の公的解釈は徐々に問題化され始め、やがてウィトゲンシュタインの思考は公私両解釈の間を往復するようになるのである。しかしながらパートAの思考にはムーア言明の私的解釈を要請するような内在的要素は未だ存在しない。したがって公的解釈の問題化はそれ自身に関わる内部的な問題から始ることになる。これに関してパートAで二つの問題が指摘される。第一はムーア知が公的なものであるとして、何がムーア知に属するのかを誰が決めるのか、という問題である。それは自明とされていることに誰かが挑戦した時、この挑戦の是非を誰が決めるのかという問題でもあり、数列を理解しようとしないう生徒を巡る『哲学探究』の思考を明らかに受け継ぐものである。これをムーア知の主権問題と呼ぶ。ムーア知の主権問題は再確認のように見える上の一節で次のように表現されている。

しかしこの状況で何を信じるのが分別あるのかを誰が述べるのか。
(§325)

第二の問題は主権問題の派生問題とみなすことができるものである。ムーア知が公的なものであるなら、何がムーア知に属するのかを決定する公的な基準、すなわちある種の規則・法典がなければならないだろう。しかし現実にはそうした法典は存在しないのである。主権問題と同様にこの問題も『哲学探究』で提示された、言語ゲームに規則が存在すべきなのに現実には存在しない、という

問題を引き継ぐものである。これをムーア知の法典不在問題と呼ぶ。法典不在問題は IVc で次のように提示されている。

それは本物の樹ではなく・・・にすぎない、といった疑いを抱くことは非常識であろう。

これを疑い得ないと私がみなすことは重要でない。疑いが非常識であるとしても、そのことは私が考えていることから分からないからである。従ってこの疑いは非常識であると宣言する規則がなければならぬだろう。しかしそうした規則は存在しないのである。(§452)

確かに私はこう言う：「常識的な人ならここで疑ったりしないだろう。」一学識ある判事に疑いが常識的か非常識かを訊ねるのを想像できようか。(§453)

2.2 パートBの思考：言語ゲームの根源的反省性と超越性

『確実性』第四部パートBの思考はパートAの思考を直接引き継ぐものである。パートAの思考は一連の問いを次第に明確にすることによりウィトゲンシュタインの思考が直面しつつある巨大な問題の姿を捕えようとする試みであった。それらは最終的にシーケンス IV と V において上述の四つの問いとして像を結んでいった。対してパートBのウィトゲンシュタインはそれらの問いに答えることにより問題になっている事柄に本質的な表現を与え、本来的な思考領域へ乗り込もうとする。その思考領域とは「言語ゲームの根源的反省性と超越性」と表現すべきものである。根源的知を巡って始ったウィトゲンシュタインの思考は内在的必然性に導かれ言語の本質へと向かうのである。

今一度振り返るならパートAの最終段階（シーケンス IV,V）で確認された四つの問題（ムーア命題の超越的確実性、ムーア批判の漸次的後退、ムーア知表現問題、ムーア言明の公的解釈の問題化）の戦略的重要性は同じではなかった。パートAという思考段階にあってウィトゲンシュタインの思考はムーア知表現問題、すなわち示されるが語られない言語ゲーム基底的な知をどのように表現すべきか、という問いを中心として展開されていった。他の問題の意味はこの核となる問いとの関係によって思考の場に位置づけられ考察されていた。パートBの思考がパートAの直接的継続であるとはパートBの思考もこの同じ問いを核として開始されることを意味している。そういう訳でパートB

の始動部にあたるシーケンス VI ではパートAの思考を想起させるような形で「言語ゲーム習得段階における非反省的确实性を知と呼べるか」という問いを巡って思考が展開されるのである（図8参照）。しかしながらウィトゲンシュタインの思考は主題的同一性を維持しながらもこの後全く違った方向へと展開してゆくのである。このパートB固有の思考の展開はムーア命題の超越性を巡る段階、原初的言語知の反省性を巡る段階、ムーア言明の使用可能性を巡る段階、と三つの段階を経て進行してゆく。従って始動部としての第一段階を加えるとパートB全体の思考は次の様に四つの段階を経ながら進行してゆくことになる。

パートBの思考展開の四つの段階

段階	位置づけ	シーケンス	主題
第一段階	始動部	VI	原初的な非反省的确实性を知と呼べるか
第二段階	固有展開部	VII,VIII,IX	ムーア命題の超越的确实性とその表現
第三段階	固有展開部	X	原初的言語知の反省性
第四段階	固有展開部	XI	ムーア言明の使用可能性（ムーア言明権）

この中で第三段階の思考は第一段階のに直結するものであり、そこで提起された問いに「原初的言語知の反省性」という概念によって答えるものである。それらは一体のものとして考察されねばならない。それゆえ以下においてパートBの思考を（1）言語ゲームの根源的反省性（第一段階、第三段階）、（2）言語ゲーム根底の超越的确实性（第二段階）、（3）ムーア言明権（第四段階）の三つに分け、それぞれの思考の展開を具体的に考察し、最後にそうして到達された思考が共同して指し示す方向について考察したい。

＜図8 第四部パートBのサブシーケンス図＞

シーケンス	サブシーケンス	節 番 号	日 付	内 容	スレッド
VI 原初的な 非反省的 确实性を 知と呼べ るのか	a	470	4.4	自己名命題（「私の名は L.W.である」）の不可疑性の根拠について	$\beta \delta$
	b	471-477	4.5,4.6	言語ゲーム習得段階の事物存在に関する原初的な非反省的确实性について	δ

という問題	b'	478-481	4.7,4.8	この非反省的確実性を「知」と呼べるか	δ
VII ムーア命題の超越的確実性は「私は知っている」によって表現しうるかという問題	a	482-490	4.8,4.9	「私は知っている」の用法と自己名命題等の不可疑命題（ムーア命題）に関する「私は知っているのか信じているだけなのか」という問いについて	$\alpha \delta$
	b	491-497	4.10	自己名命題等の不可疑ムーア命題の確実性の超越性について	$\beta \delta$
	a'	498-501	4.11	ムーア命題の超越的確実性を「私は知っている」によって表現すること（超越的用法）への疑念	$\alpha \beta \delta$
VIII ムーア命題の超越的確実性とそのムーア言明による表明について	a	502-504	4.11	「私は知っている」の超越的用法への批判的考察（経験的用法）	$\alpha \delta$
	a'	505	4.11	知の基盤としての自然	δ
	b	506-509	4.11	記憶命題の超越性の言語ゲーム基底性について	$\beta \delta$
	c	510-511	4.11	ムーア言明がムーア命題の確実性の直接把握的表出であっても知の表明ではないこと	$\alpha \delta$
IX 言語ゲームにとってムーア命題の確実性は超越的でないのか	a	512-519	4.12	ムーア命題と語意味命題の超越性	$\beta \delta$
	b	520-521	4.13,4.14	ムーア言明は発話として使用可能（ムーア言明権）であるがそれによって知の存在を証明できない	α
	a'	522-525	4.14,4.15	言語ゲーム根底において語の意味に対する疑いは不在でなければならないのか、多少の疑いはあっても言語ゲームは成立するのか	$\beta \delta'$
X 言語ゲーム的文脈では原初的知も必然的に反	a	526-530	4.16	言語ゲーム根底における名前の知を「知っている」によって表現できるか（基本色の名を例として）	$\alpha \delta'$
	a'	531-533	4.16	基本的な色名と自分の認知的関係を「私は・・・を・・・と呼ぶのを知っている」と記述できるか	$\alpha \delta$

省知でなければならぬ	b	534-544	4.16	名前知（そして言語知全般）が反省知でなければならないこと	$\alpha \delta \delta'$
	b'	545-548	4.17	言語ゲーム習得段階の名前との認知的関係が必ずしも知とは呼べないこと	$\alpha \delta \delta'$
XI ムーア言 明が言語 ゲーム内 で使用可 能である こと	a	549	4.17	超越的ムーア言明権の存在（ムーア言明が超越的に使用されること）	$\alpha \beta$
	b	550-554	4.18	「私は知っている」の言語ゲーム内文脈依存性とムーア言明が可能な文脈が存在すること	$\alpha \delta$

* δ' : 言語ゲームと知

2.2.1 言語ゲームの根源的反省性を巡る思考（パート B 第一段階：シーケンス VI と第三段階：シーケンス X）

言語ゲームの根源的反省性を巡る思考はシーケンス VI と X において展開される。これら両シーケンスは同一主題を巡って展開されており、その意味で連続しているが、同時に VII, VIII, XI という三つのシーケンスによって隔てられており、この隔たりがもたらす熟成が思考に新たな要素と飛躍をもたらしている。ウィトゲンシュタインに典型的なこうした連続性と飛躍を通じて反省性を巡る思考が生成されてゆく様を以下において考察しよう。

2.2.1.1 シーケンス VI：これまでの主題の発展的継続、「言語ゲームの原初的段階における非表明的確実性は知と呼べるか」

容易に見て取れるようにシーケンス VI では原初的な非表明的確実性に関する思考がパート A に引き続き展開されている。ただしそれはパート A の思考の単純な継続ではない。ここで先ず目立つのは、パート A で「非表明的確実性を知と呼べるのか」という核心的な問が未だ非明示的にしか提示されていなかった（例えば §§ 427-8）のに対し、サブシーケンス b' に見られるように明示的に問われていることである（「物理的対象が存在するという知識は極めて早い段階のものと我々は言うのか、それともずっと後になってから見られると言うのか」 § 479）。加えてここでの思考は「非表明的確実性を知と呼べるか」という単一の問いを中心としてコンパクトに展開されており、常に複数の主題を巡って拡散的に展開されたパート A（その典型がシーケンス II と III である）

の思考と好対照をなしている。一言で言えばシーケンス VI の思考はパート A で未だ不明瞭であった主題が意識化された結果実現したより方向性を持った新しい思考であるということができる。それゆえ我々はシーケンス VI を新たな思考の始まりとしてここにパート A と B の区切りを入れることが可能なのである。こうしたテキスト解釈に対する一つの傍証としてパート B 冒頭部に位置する次の二つのメタ哲学的コメントを挙げることができる。

「ここにはなお私の思考にギャップが存在する。そしてそれが埋められるかどうか私には疑わしく思われる。」(§ 471 直前のブラケット内の小節)

始まりを見つけるのは困難である。こう言った方が良からう：難しいのは、始まりから始めそれ以上は戻ろうとしないことである。(§ 471)

このコメントは二つの側面から見る事ができる。一方で思考のギャップと起点に関して述べられている困難は文字通りウィトゲンシュタインがこの時点で感じている困難であり、このコメントはその忠実な告白である。他方もう少し狭いコンテクストで考えるなら、それらの困難はパート A において最も深刻に感じられていたものである。パート A の思考はどこを思考の起点とすべきかについて手がかりの得られない混乱した状態にあった。そうした状況にある者は問題の存在に言及するゆとりを持たないと言ってよいだろう。それに対して § 471 はウィトゲンシュタインがここで思考の起点を見出そうとしていることを示している。困難を感じつつも思考の新たな起点と流れが試みられようとしていることを示しているのである。この新たな思考の具体的内容を考察しよう。非表明的確実性の原初的言語ゲームという文脈での主題化-VIb- 同一主題に関するパート A の思考と比べた時、シーケンス VI の思考の内容上の大きな特徴は「示されるが語られない非表明的確実性」という問題が原初的言語ゲームというより限定された問題文脈の中に置かれているということである。ここで言う「原初的言語ゲーム」とは言語を習得する段階にある子供の言語や『哲学探究』§ 2 に見られるような人工的に限定された言語ゲームのことを指すと了解されたい。こうした問題文脈の限定はサブシーケンス b (§§ 471-477) 全体で見られるが、それは次のようなものである。

言語を学ぶ時、子供は何を調べ何を調べないかも同時に学ぶ。食器棚

が部屋にあると学ぶ時、子供は後から自分が見た時やはり食器棚があるのではなく舞台装置のようなものになっているのではないかと疑うことは学ばない。(§472)

こうして言語ゲームの根底にある原初的確実性を原初的言語ゲームという文脈で考えることの最大の意味は、こうした文脈で非表明的確実性が文字通り「語り得ない知」となることである。食器棚が部屋に存在するということを大人は通常あえて語らない。しかしそれをムーアのように「私はここに食器棚があると知っている」と語ることは可能である。それは「語らない知」であり「語り得ない知」ではない。それに対してここで例に挙げられている子供はこの事を語ることができない。それは子供がそれを疑うことも、問題化することも、語ることもまだ教えられていないからである。つまりこの「語り得なさ」とは当の言語ゲームが原初的であって参加者がそれを語る手段を持たないがゆえのものであり、神秘的なるものとは何の関係も持たないものである。従ってこの「語り得なさ」は語る手段をを持たない存在全てに当てはまるものである。この子供について事物の存在の知について問うとは、同様の知を動物について問うことに等しい。原初的言語ゲームとは言語という現象を動物的文脈において考察する概念的手段であるといってもよい。そうした意図は次のように述べられている。

私はここで人間を動物とみなしたい。本能はあっても合理的思考を持たない原始的な存在とみなしたい。原始的な状態にある生き物とみなしたい。コミュニケーションの原始的手段にとって十分であればどんな論理であれ我々は恥ずかしくする必要はないのだから。言語は合理的思考から生まれたのではないのである。(§475)

ここで示されている思考は人間を自然的な存在とみなした上で言語とその根底にある確実性を考察しようとするものであり、これまでも「動物的確実性」という言葉によって象徴されてきたものである。『確実性』第三部以来連綿と続いているこの思考を言語と言語根底知に関する自然主義的思考と呼ぶことができる。つまり原初的言語ゲームという手段によって VIIb (§§ 471-477) で示されようとしている思考とは、言語ゲーム根底知を自然主義的な観点から考察しようとする思考なのである。しかしながらウィトゲンシュタインにとってあ

る思考を示すとは必ずしもそれに対するコミットメントの表明ではない。ここでも自然主義的思考は思考の強さを試すための標的として提示されているのであり、それに対する批判的思考は続く VIb' (§§ 478-481) で直ちに示される。それは自然主義的思考から必然的に導かれる根底知に関する問いの（無意味さの）提示と、自然主義的思考に欠落している「疑い」という要素の導入という二つの形を取るが、それらについて順に考察しよう。

言語根底知に関する自然主義的観点に対する批判的思考-VIb'-(1) 今考察しているシーケンス VI へと連なる思考の核となってきたのは「言語ゲームの根底にある通常語られない確実性をムーアのように知と呼べるか」という問いである。今この問いを上述の様な自然主義的観点から捉えれば、それは動物や子供が自ら語ることなく保持している確信を知と呼べるかどうか、というものとなるであろう。VIb' で示されているのはこうした問いに他ならない。

子供はミルクが存在すると信じているのか、あるいはミルクが存在すると知っているのか。猫はネズミが存在すると知っているのか。
(§478)

物理的対象が存在するという知識は極めて早くからあるものなのか、それともずっと後になってからのものなのか。(§479)

しかしこれらの問いは解答不可能である。例えば「子供はミルクが存在すると知っている」と答える者に対しては「存在という言葉も知らないものがどうしてミルクが存在することを知れるのか」と言うことができるし、「子供はミルクが存在するということを知らない」と答える者に対しては「ミルクの存在を知らなくてどうしてミルクが飲めるのか」と言うことができる。このように、誰でも納得するような答えを出すことができない。それは問いが問おうとしていることと問いの設定が対立しているからである。問いが問おうとしているのは言語と深く結びついた原初的な知の存在であり、(「ミルクの場所の知」とは異なり)「ミルクが存在するという知」のように文という媒体によってのみその内容が特定できる知の存在である。しかしこの知を持っているかと問われている対象はそうした媒体を持たない存在、語れない存在である。如何に原初的とはいえ言語と不可分な知の存在を、言語と切り離された対象について問えば答えへの道は予め閉ざされる。問いのこうした解答不可能性は、言語ゲーム根

底の知という今問われようとしているものに対して自然主義的観点が不適切であることを示している。そしてウィトゲンシュタインがこれらの解答不可能な問いをここに置き去りにしているということは、こうした問いの問いかたへのある種の批判的行為と解釈されねばならない。

言語根底知に関する自然主義的観点に対する批判的思考-VIb-(2) こうした解釈が単なる憶測でないことはそれに続く § 480 から読み取ることができる。自然主義的な観点の問題とは問おうとしているものと問いの立てかたのミスマッチであった。問われているのは原初的にして言語と不可分な知である。しかし「原初的」であることを強調するあまり対象を言語と切り離すなら問いは解答不可能となるのであった。そして子供や動物といった対象が言語と切り離されるとは疑いの可能性と切り離されることでもある。子供が「ミルクが存在する」という知の内容を語れないのは、ミルクが存在するという事態を問題化し疑う可能性を持たないことでもある。従って自然主義的な観点の問題点は、疑いの可能性が存在しないような対象について言語と不可分な知の存在を問うことの問題点でもあるのである。次の § 480 はまさにこうした批判的思考を表現しており、それは §§ 478, 479 の問いの内に内包されていた思考の継続であり展開なのである。

子供が「木」という言葉の使い方を学んでいる。人が子供と一緒に木の前に立ち「美しい木だ」という。木の存在に関する疑いは明らかにこの言語ゲームには導入されていない。しかし「木が存在する」と知っていると子供について言えるのか。もちろん「何かを知っている」ことはそれについて考えることを含んでない。

しかし何かを知っている者は疑うことができないからではないのか。そして疑うとは考えることを意味するのである。(§ 480)

ムーア知表現問題を巡る混乱状況- § 481- 以上の様な思考とそれに対する批判的思考を経て、ムーア知表現問題を巡る思考はそれ以上進むことのできない地点へと到達したと言えるだろう。ムーア知の特別な確実性はそれが通常語られることのない反省以前の確実性であることに存していた。そうした反省以前の、非表明的な確実性現象を求めてウィトゲンシュタインの思考はより原初的なものへと進んでいった。こうした動きが自然主義的な思考である。そしてそれは言語と疑いの存在しない所へとたどりついた。そこでは全てが極めて

確実である。この確実性は疑うということがそもそも存在しないことにより確保されている確実性である。しかしこうした確実性がいかにして言語ゲームの基底となりうるのか、言語と切り離されたものがどのようにして言語を支えるのか。こうした疑問は求められている確実性が根源的に疑いや言語と不可分なものであることを示唆している。しかしそうした確実性にいたるにはこれまでの自然主義的な思考とは根本的に異なる方向へと思考が向かわなければならぬだろう。この段階ではそうした方向は未だ見えていない。上の § 480 に続くムーアに言及されている次の一節はこうした状況の表現である。

ムーアが「これが木だと私は知っている」と言うのを聞く時、人はこの問題が決して決着していないと考える人々のことを突然理解するのである。

問題は突然不明瞭でぼんやりとしてくる。あたかもムーアが問題に誤った光をあてたかのようである。・・・ (§481)

この状況が突破される方向はシーケンス X において示されるのである。

2.2.1.2 シーケンス X：原初的言語知の根源的反省性

『確実性』第四部のウィトゲンシュタインの思考をリードし続けてきたムーア知表現問題はシーケンス X において反省問題へと転換される。この転換は単に問われる問いの形に止まらず、思考のあらゆる要素に必然的に波及する大転換であり、思考系の転換として捉えられるべきものである。思考系の転換として我々は第三部で外的思考系から内的思考系への転換を体験した。それと比較するとムーア知表現問題から反省問題への問いの転換が象徴する今回の展開は遙かに大規模で根源的である。それは『哲学探究』以来（あるいは『論理哲学論考』以来）のウィトゲンシュタインの思考の根本前提の転換を迫るものである。

ムーア知表現問題から反省問題への転換 この大転換の全容を把握するためにはその起点であるムーア知表現問題から反省問題への転換を正しく理解する必要がある。これら二つの問いの間の移行が単なる問いの変化ではなく転換であるというのは移行において思考の連続性が保持されていることを意味しているが、その連続性を保証するものが共通の主題としての言語ゲーム根底の確実性という概念である。二つの問いの相違とはこの概念の捉えかたの相違であり、

この確実性の本性を探究する視角の相違である。またこの概念は本質的に言語と知の内在的関係に関わるものであるから、それは言語と知の内在的関係の捉え方の相違でもある。

ムーア知表現問題とはこの言語ゲーム根底の確実性を「語られないがゆえに確実なもの」として捉える時に生じる問いの形である。この「確実なもの」は疑われたりそれについて語られたりすることのないものであり、それゆえに確実なものである。この確実性の典型が上で考察したような語るべき手段を持たない存在における確実性としての動物的確実性であり、それは第三部末以降一貫して考察の主たる対象となってきた。子供と猫の知に関する § § 478, 479 の問いが示しているように動物的確実性が考察の対象となる時、主題化される知の内容は命題という媒体によって「…が存在する事」という風には未だ表現されていない事物の存在である（「ミルクが存在する事」ではなくミルクの存在、「ネズミが存在する事」ではなくネズミの存在）。動物的確実性を確実性の原形とみるこうした観点にあって、言語とは原初的確実性から遠ざけられるべきものであり、動物的確実性はそれについて沈黙すべきものである。すなわちこの観点は『論考』以来の神秘主義的思考を引き継いでいる。こうした観点に立つて「ムーア知をムーアの様に表現することができるか」と問うことは予め否定的答えを想定することであり、ムーアの言明を「語るべきでないことを語る行為」として批判的に見ることに他ならない。このようにムーア知表現問題という問いは、言語の根底に動物的確実性をみいだそうとする自然主義と根底的なものを語ることを禁じる神秘主義とムーア言明に対する徹底的批判という三つの要素を内包する思考系を導いているのである。

他方反省問題とは同じ言語ゲーム根底の確実性を「言語ゲームを言語ゲームたらしめるために必要な根底的知（確実性）」と捉える時に生じる問いの形である。この捉え方はあくまで言語ゲームの言語性の根源となるようなものとして原初的知（確実性）を探究しようとする観点であり、言語ゲームの根源を動物的確実性という言語外の場所に求めようとする上述の自然主義的観点とは鋭く対立するものである。こうした言語内在的観点から根底的確実性としてのムーア知が捉えられる時、取り上げられる知の内容は事物の存在から語の意味と使用へとシフトする。

振り返るならば第一部以降第三部までムーアの例を中心としながらも、漠然と自明なこと全体が「確実な命題」（我々の呼び方では「ムーア命題」）として捉えられてきたのに対し、第四部パートAでは「事物の存在と語の意味」が言

語ゲーム根底の確実性の内容として特定された (§§337, 340, 345, 346, 455)。そして上記の観点に立ったシーケンス VI では事物の存在がムーア知の主要内容として取り上げられ、より言語内在的な観点に立つシーケンス X において語の意味が焦点となるのである。ウィトゲンシュタインの思考ににおいて例は常に「単なる例」を超えた象徴的意味を持ち、思考されている主題と例の間には内在的關係が存在する。今の例の変遷は、ウィトゲンシュタインの思考の中心がそれ自身として捉えられた原初的知から次第に言語に不可欠の根底知へと移行している様を表わしている。考察の対象が語の意味の知、名前の知となることにより、動物などの非言語的存在は初めから考察の対象外となり、思考はより直接的に言語の根源へと向かうことができる。言語の本質が何であれ、名前の知を持たない存在は言語を知らない存在であるから、名前の知はこうした思考にとって適切な出発点なのである。こうした関係において特に注目すべきなのが「私の名は L.W.である」という例である。『確実性』でこの例はパート A で初めて登場する (§§ 328, 425) が、進行中の思考の展開と内在的な関係を持つのはパート B が最初である。この例（自己名命題と呼ぶ）の使用のそうした始りがパート B 冒頭の § 470 であり、孤立しているかにみえる § 470 がパート B に組み入れられているのはこのためである。自己名命題は単独で取り上げると自己知の典型例として用いられているかのようにも見える。その場合思考の標的となっているのは当然「自己」、「私」といった存在の認知上の意味ということになろう。しかしもし第四部のウィトゲンシュタインの思考がこうした方向に向かっているなら、用いられる例は自己名命題ばかりでなく、「私は人間である」、「私は英国に住んでいる」、等様々なものが考えられるはずであり、現にそれらの幾つかは第三部以前において何度か用いられてきた。ところが第四部で集中的に用いられるのは自己名命題なのである。これはここで狙われているのが単に自己ではなく、自己と言語の交点であり、その場所が知と持つ関係であることをしている。この予想は今後の思考の展開において裏付けられるだろう。

さてこうした観点から言語ゲーム根底の確実性について問うとは、語の意味の知や名前の知に代表される言語固有の知はどのようなものであるがために言語の根底となり得ているのか、という問いを発することに他ならない。それらが確実であるのはいうまでもないが、問われているのはそれがどのような確実性であるがために言語の根底となり得ているのか、ということである。これは言語の本質の問いに他ならない。こうした問いとともに浮上する答えが言語根

底知の反省性である。ここでいう反省性とはある存在の状態や行為が持つ性質であり、その存在が自己の状態や行為の現存においてそれらに言及する場合、状態や行為は反省的と呼ばれる。反省的というのは言語的存在の状態や行為が持ちうるある性質なのである。例として子供の母親への呼びかけを考えてみよう。「ママー、きてー。」と言う時、子供は母親が来るよう求めているが、自分が今そのように求めていることを言葉にして言い表していない。従ってこの呼びかけは非反省的である。他方子供が、「ママー、きてー。ママったらこんなに頼んでるのに来てくれないんだから。」という場合、子供は自分が今求めているということに言及しつつ求めている。この呼びかけは反省的である。ある者が非反省的発話しか発することができなければ、その者の言語は非反省的であり、反省的発話も発することができるならその言語は反省的である。この反省性という概念は言語に対する我々の思考に新しい次元を導入し、新しい問いと思考を誘導する。こうした新しい思考の場において、言語の根源について「言語根底知は反省的でなくてもよいのか」という問いが必然的に問われることになる。それは「非反省的であるものが言語を言語たらしめる根底であることができるのか」という問いに他ならず、「原初的な知を言葉に出してよいのか」という上記の自然主義的観点に立つ問いと全く逆の方向性を持つものである。言語の根源についてここで問われている問いが反省問題なのである。反省問題という新たな問いを軸として展開されるシーケンス X の思考をより具体的に考察しよう。

根底的言語知に関する問いと答え 言語根底知の反省性を巡るシーケンス X の思考は問いを立てる前半部（サブシーケンス a,a', §§ 526-533）と答えを提示する後半部（サブシーケンス b,b', §§ 534-548）に明確に分かれる。これらの問いと答えは直接に対応しない。問われた問いに対して答えが与えられるのではなく、それを別の問いに転換した上で答えが与えられるのである。前半部で問われる問いが旧来のムーア知表現問題であり、後半部で与えられるのはそれを反省問題に転換した上での答えなのである。これはウィットゲンシュタインに特有の飛躍を含んだ問いと答えの応答を通じた思考の生成展開過程である。

シーケンス前半部で問題にされるのは赤といった基本色の名前の知である。いささかの疑いや不確かさの介入でさえ話者の理解可能性を損なうという意味でそれは根底的な知である。もし誰かが赤い郵便箱を見て「確かにこれは赤だと思う」と言えば、色盲なのかあるいは日本語の知識が不確かなのかと考えない限りその人の言うことは理解できないのである (§ 526)。この根底的な

色名の知について、それを「私はこの色を赤と言うのを知っている」と表現できるのが前半部で問われる (§§ 527-530)。これは色名知に関するムーア知表現問題に他ならない。もしこのように表現できるのであればムーアの言明は結局妥当ということになるから、この問いはムーア言明の妥当性を巡る問いとも密接に関連している (§§531-533)。

このままの形でこの問いに答えるとは結局「ムーアの言明は妥当か」という問いに答えることである。しかしここまで明らかになってきたように、ムーアの言明が不自然でありながらも理解可能であるためこの問いは解決不能なのである。この問いに答えるためには「私は・・・知っている」の文法の考察を超えた何か独立の根拠が求められているのである。シーケンス後半部の思考は新しい区別を思考に導入することによりそれを与えようとするのであり、この区別の導入こそ思考に大きな飛躍をもたらすものなのである。それは「赤」という言葉を使えるが「この色は赤と言う」とは言えない言語状態」と「赤」という言葉を使え、しかも「この色を赤と言う」と言える言語状態」の区別である（いうまでもなく「・・・という言語状態」という表現はウィトゲンシュタインのものではなく我々のものである）。前者は言語習得段階の子供や、『哲学探究』§2の言語ゲームに見られるものでありそれらを一括して原初的言語と呼ぼう。後者は自然言語全般に見られるものであり反省的言語と呼ぼう。これら二つの言語（状態）は、語を使用する能力、と、語の使用について言及する能力、という二つの異なる能力に対応するものである。こうした区別が暗示するように、ここで遠望されようとしている問いとは、言語の本質は二つの能力のいずれに存するのか、というものである。さてシーケンス後半で新たに問われる問いを簡単に表わすためここでもう一つ表現を導入したい。それは名前知という表現である。もしある存在Xについて、「Xは・・・を・・・言うのを知っている」と有意味かつ正しく言える時、存在Xは（問題になっている事物の）名前知を持っている、と言うこととしよう。こうした表現を用いるなら、今問われているのは「名前知は反省的言語においてのみ存在するのか、それとも原初的言語においても存在するのか」という問いである。言い換えるならそれは名の使用能力単独で名前知を構成できるのか、それとのそれに加えて名の使用への言及能力も必要なのか、という問いである (§§ 534,537)。一見するとこの問いはシーケンス VI のミルクの存在に関する子供の知の問題と同じであり、どのように答えようとも単に「言い方の問題」に過ぎないようにも思われる。しかし両者の間には知の対象になっているのが事物の存在なのか

名なのかという大きな違いがある。存在と言葉の間にはなんら内在的な関係が存在しない。それゆえ事物の存在を知っていることと「事物が存在している」と言えることの間には内在的な関係が無い。従って子供が「ミルクが存在する」と知っているかどうかは「言い方」の問題にすぎない。それに対して名と言葉はある意味で同一であり、名を知ることと「・・・を・・・と言う」と言える事の間には深い関係がある。本質的に「語らない」存在である猫について（存在の知を問うことに何らかの意味があるのに対し）名の知を問うことは全く無意味なのである。それは「・・・を・・・と言う」という概念を持つ存在についてのみ「・・・を・・・と言うと知っている」と言えるということである。こうした思考が次の問いに表現されているのである。

もちろん話し始めたばかりの子供はまだ「・・・を・・・と言う」という概念を全く持っていない。（§536）

この概念を持っていない者に「彼は・・・を・・・と言うと知っている」と言うことができるのか。（§537）

それゆえ上の問いに対して、名前知は原初的言語においてははまだ存在せず、反省的言語においてのみ存在する、とという答えが与えられるのである。

私はこう言いたい。子供はしかじかの仕方では反応することを学ぶ。そしてそのように反応することによって子供は未だ何も知っていない。知る、ということはより後の段階にならなければ始らないのである。（§538）

子供はどんな形にせよ「僕はこの人の名前を知っているがあの人の名前は知らない」と言えるようになるずっと前から人の名前を使えるのである。（§543）

ここで示されているのは名前知の本源的反省性と呼ぶべき思考である。それは名を知るとは単に名を使いうるのみならず、名を使えることを自ら言葉にして表明しうることである、という思考である。そして名前を知ること無くして言語を知り得ないから、その背後には、言語を知るとは言語を使いうるだけで

はなく、言語を使いうることを自ら言葉にして表明しうることであり、という言語知の本源的反省性と呼ぶべき思考が存在する。この思考は「使用」と「言語ゲーム」を核とする『哲学探究』以来の言語に関するウィトゲンシュタインの観点を大きく揺さぶるものである。この旧来の観点は本質的に言語を語の使用能力と見る観点であり、語を介した反応能力の体系たる「言語ゲーム」として言語を考察しようとする観点である。こうした観点にあって『哲学探究』§2の言語ゲームに代表される原初的言語は立派な言語であり、むしろ原初的であるがゆえに言語の本質を良く示していると考えられる。それに対してここで登場しつつある思考は原初的言語を反省的でないがゆえに言語とみなさないことにおいて旧来の観点に対する根本的な批判を内包しているのである。§2の言語ゲームは典型的な語を介した反応能力の体系であるが、果たしてそれは言語なのだろうか、その参加者は言語を本当に「知って」いるのだろうか。「石」と言われた時に石を、「木」と言われた時に木を飼い主の所に運ぶような言葉への識別的反応を犬に獲得させることは困難ではない。これは言語ゲームなのか、飼い主と犬は言語ゲームを行なっているのか。他方もしこれが言語ゲームでないのなら、何故§2の「言語ゲーム」が言語ゲームなのだろうか、それは音声信号への識別的反応体系にすぎないのではないか。このように言語知の本源的反省性という思考は言語の本質に関して旧来の観点に対する根底的な批判を内包している。次の一節からこうした批判が読み取られなければならない。

「N」と言われた時にNの所に、「M」と言われた時にMの所に走ってゆくのを犬が覚えることは可能である。しかしだからといって犬はそれらの人が何という名なのかを知っていることになるのだろうか。
(§540)

2.2.2 ムーア命題の超越性とその表現を巡る思考（パートB第二段階：シーケンス VII,VIII,IX）

ムーア知表現問題を反省問題へと転換することを通じて根底的な言語知の根源的反省性という思考に到達することにより、ウィトゲンシュタインの思考の展開はこれまでと全く異なる様相を見せることになる。最大の変化は考察対象の変化である。ムーア知表現問題という形で問いが問われた時、考察の中心の対象は非表明的な原初的确实性であった。しかし問題が反省問題へと転換され、言語知が根源的に反省的なものとして認識されると、考察の中心は根底的な言

語知の反省性そのものへと移動する。そして言語知の反省性とは言語を知る存在が自らの言語知を表明する行為の内にのみ存在するから、最終的に考察の中心を占めるのは「私は・・・知っている」という発話となる。しかも根底的な言語知の反省性が問題になるのだから、焦点となるのはこうした発話の（語の意味や事物の存在といった）ムーア命題への適用、すなわち超越的使用（知の経験的根拠の提示可能性を伴わない使用）である。こうして思考の中心は非表明的確実性から「私は・・・知っている」の超越的使用へと移動してゆく。こうした思考の新たな展開はパートCに至って本格化するが、これから考察するパートBの第二段階（シーケンス VII,VIII,IX）においてもすでに認められる。より正確に言うなら、ムーア命題の超越性を巡るこれらのシーケンスの思考はこうした新たな展開の一環として捉えた時にのみ正しく理解できるのである。確かにこれらのシーケンスは言語知の反省性が示されるシーケンス X に時間的に先行するが、複線的並行的なウィットゲンシュタインの思考にあって新しい思考は常にその明示的登場に先立って示されるのである。

より具体的な内容に目を向けるなら、これらのシーケンスで提示されるのは（1）様々なムーア命題の超越性とそれが言語ゲームにおいて持つ意味に関する思考、（2）そうした超越性を「私は・・・知っている」によって表現することの是非を巡る思考、である。それぞれについて順に考察しよう。

ムーア命題の超越性とその言語ゲームの意味 超越性とは言語的存在が自らの発話行為を通じて命題に対して取る特別の態度である。第四部シーケンス II でウィットゲンシュタインは「これは私の足だ」という命題に対して「どんな経験もこれに対する反証とはみなさない」という発話によって超越性を示した（§ 360）。今考察しているシーケンス VII,VIII,IX では「自分の名前は L.W.である」という命題に対して「これを疑えばあらゆる判断を放棄することになる」（§ 491）や「もし自分の名が L.W.でなければ、「真」や「偽」の意味をどうして信用できようか」（§ 515）によって超越性が示されている。さらに自分の記憶に関する超越性の例として「もしここで私の記憶に間違いがあるなら、それはあらゆる所で間違っている可能性がある」（§ 506）等が挙げられている。こうして示される超越性とは何かを絶対的に確実とみなす態度、あるいは決して改訂されるべきでない基準とみなす態度、等と言い換えることもできよう。超越性に対するこうした諸表現は無際限に提示することができる。こうした様々な表現によって示されている態度が言語の成立にとって、すなわち言語ゲームの存立にとって決定的なある役割を果たしているのである。いうまでもなくこ

の「役割」の考察が今後のウィトゲンシュタインの思考の最大の焦点となるのだが、ここではそれに対する幾つかの「解」が試みられているのである。

第一はある命題に超越性を付与する行為をある種の「規則の制定」や「ゲームの定義」の如きものとみなす「解」である。それによればムーア命題を絶対的に確実なものとして言明する時、我々は言語ゲームの規則を制定しているのである。一種の規約主義と呼びうるこの解は次の様な形で示されている。

「これを疑えばあらゆる判断を放棄することになる」

しかしこれはどんな種類の命題なのか（それはフレーゲが同一律について言ったことを思い出させる）。それは確かに経験的命題ではない。それは心理学に属さない。それはむしろ規則という性格を持っている。（§494）

もし誰かが私に疑いを起こさせようとして次のように言うとする：ここで君の記憶は間違っている、あそこで君はだまされた、そこで君はまたも自分を十分に納得させなかった、等、そして私は自ら動揺を許さず自分の確信にしがみつくとする、その場合私がそうすることは間違いではありえない。たとえそれがゲームを定義するものであるという理由によってであれ。（§497）

仮にこうした思考に何らかの真理が含まれているとしても、それは真理の一端でしかない。というのも我々がある種の自分の記憶や知覚に絶対性を与える事、それを本気で疑えない事、それは規則の制定という概念によっては捕らえられない要素を持っているからである。その要素は我々が「信頼」と呼ぶものと深い関係を持っているのである。こうした思考は次のように表現されている。

私が本当に言いたいのは、言語ゲームは我々が何かを信じた時に初めて可能となる、ということである。（私は「何かを信じる」とは言っていない）（§509）

こうした思考は未だ試みであり、パートC以降で展開される思考の予告にすぎない。

ムーア命題の超越性を「私は・・・知っている」と表現することについての思

考の端緒 このように反省問題を転機としてムーア命題の超越性が思考の焦点となるにつれて、ムーアの「私は・・・知っている」という言明が言語（ゲーム）において持つ意味の考察がますます重要となってくる。というのも命題の超越性とは静止した対象や性質として存在するものではなく、言語的存在が自らの発話によって有らしめるものだから、それは必然的に「私は・・・知っている」という発話と結び付けられる。そしてムーアは「私はこれが自分の手だと知っている」という発話によって手ムーア命題に超越性を付与したのではないかと考えるのはごく自然だからである。もしムーア命題に対して「私は・・・知っている」という発話によって超越性が付与され、しかも知が「私は知っている」という発話と不可分なものであれば、ムーア命題の超越的現実性という言語ゲームの根底的な場所は知と言語のある種の相互依存によって生成されていることになろう。今後パートC以降ウィトゲンシュタインの思考は確実にこうした方向へと向かってゆくのである。ここで（パートB第二段階）はそれが試行的に開始されている。すなわち「私は・・・知っている」の超越的用法に対する疑念が示されたり（VIIa' §§ 498-501）、ムーア的な「私は・・・知っている」の用法が主観的現実性の直接表出としては妥当であっても知の表明ではないことが指摘されたりする（VIIIc §§ 510-511）のはこうした思考の一端なのである。確かにこれらは控えめな考察であり、これまで繰り返されてきたムーア言明批判と重なる部分もある。しかしそれは最早恣意的に設定された「知っている」の使用規範を盾に取ったムーア言明批判ではなく、「私は・・・知っている」という興味深い表現が言語（ゲーム）の存在の深部で果たしている役割の探究の端緒なのであり、パートC以降の思考に続くものなのである。

2.2.3 ムーア言明批判からムーア言明権へ（パートB第四段階：シーケンス XI）

今述べたようにウィトゲンシュタインの思考が言語の根源的反省性へと向かうにつれてムーア言明批判は次第に意味を失う。ムーア命題に関して「私は・・・知っている」と言うことが問題ではなくむしろ言語の本質に関わる行為とみなされるからである。かくしてパートAでなお存在していたムーア言明批判はパートBで主題として姿を消す。ムーア言明批判的思考は散発的かつ非主題的に見出されるにすぎない。それに代わってパートBで登場するのがムーア言明の使用可能性を是認する思考と「ムーア言明権」に関する思考であり、それらが展開される主な場が第四段階（シーケンス XI）である。前者はムーア

言明を有意味に使用する文脈が存在するという思考であり (§§ 553,554)、パートA末で指摘したムーア言明の脱文脈性批判の撤回を完了するものである。それについてここで改めて論じるべき新しい要素はない。他方ここで初めて登場する「ムーア言明権」を巡る思考は今後重要性を増すものであるから、その意味について考察したい。

ある存在が何らかの権利を持つとは、その存在のある行為が正しいということである。第三部に関する前稿で論じたように¹⁷、『確実性』においてウィトゲンシュタインが「権利」について語る時、これまで問題になってきたのは「信賴する」 (§202)、「みなす」 (§212)、「想定する」 (§295)といった認知行為であった。何かを事実とみなす事の正しさや何かを事実として信賴することの正しさ、すなわち認識の正しさが問題にされたのであり、そこで想定されていたのはこうした正しさに対応する権利としての認識論的権利であった。そして第三部末で提示されたのは、こうした権利が生体と環境の相互作用の中での事象の反復に根差した生態学的なものであるという思考であった。その意味で我々はこれを認識論的自然権と呼んだ¹⁸。我々がある事を想定する認識論的自然権を持つとは、そうした想定は我々にとって生態学的に正しいということに他ならない。第三部末でウィトゲンシュタインが提示した思考は、ムーア命題がこうした意味で正しく、この正しさが他のすべての認識の正しさの源泉である、というものであった。

これに対して第四部で「権利」について語られる時、問題となるのは常に「語る sagen」という行為である。そして話をパートBに限るなら、問題となるのはムーア命題について「私は・・・知っている」と語る行為なのである。すなわちここで問題になっているのは「私は自分の目の前に木があるのを知っている」と語ることの正しさ (§ 520)とその源泉であり、「私はそこに椅子があるのを知っている」と語ることの正しさ (§ 549)とその源泉なのである。これまでのムーア言明批判とは対照的にここでこれらの行為は正しい行為とされる。そしてその正しさの源泉として想定されなければならないのが、自明で疑い得ないことを敢えて明示的に自らの知として「私は・・・知っている」と言明する権利としてのムーア言明権である。今考察しているシーケンス XI でムーア

¹⁷ 拙稿『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(2)、『言語文化論集』第52号(2000), pp.117-119, 142-145.

¹⁸ ibid., p.145.

言明の正しさ/ムーア言明権を巡る思考は次の様な形で提示されている。

「私はそこに椅子があるのを知っている」と言えるのはそこに椅子がある場合だけだ、というのは誤りだろう。もちろん椅子がなければこれは真ではない、しかしたとえ間違いであっても椅子がある事を確信しているなら私にはこう言う権利があるのである。(§549)

ここでウィトゲンシュタインが的として射ようとしているのはどんな権利/正しさなのであろうか。明らかにそれは生態学的、自然的権利ではない。というのも誤った強固な確信が正の生態学的価値を持つとは考えられないし、加えて「言う」という行為は余りにも人間という種にローカルであり生態学的な一般的意味を持たないからである。それゆえ問題になっているのは自然権でない権利、非自然権なのである。しかしそれがどのような非自然権なのかここから窺うことはできない。今後ウィトゲンシュタインの思考はこの「権利」と「正しさ」の本性に向かって進んでゆくのである。

3. 言語と知と私的存在の共通の根源へ - 『確実性』第四部後半部の思考 -

『確実性』第四部の中で四月十九日のテキストは最も印象的なものである。単に一日の分量として最長であるばかりでなく、思考の流れの力強さと豊かさでそれは先行する日々のテキストから際立っている。「自分は置き忘れた物をいつも探している老婦人の様に哲学をしている」というメタコメント (§ 532) に自覚的に述べられているように、それ以前は思考が進むべき方向について常にためらいがあったのに対して、四月十九日のテキストはウィトゲンシュタインの思考が一定の方向に向かって進み始めたことを感じさせる。その方向にいかなるものが横たわっているのか未だ明瞭に表現できずとも、根源的で重要な目標に向けてあらためて歩みが始まった事を読者は感じざるを得ない。第四部後半部 (パートC、パートD) はこうして四月十九日を起点として開始されるのである。

『確実性』のテキストをリニアーに読み進む限りここに思考の変向点を認めることができても、それがいかなる変向点なのかを認識するのは困難である。それに対してここまで積み重ねてきたウィトゲンシュタインの思考運動の分析を前提すれば、それが反省問題の肯定的解決、すなわち言語ゲーム根底の知は語り得ない知ではなく自ら語られ表明されうる反省的知でなければならないと

いう思考に発するものであることは容易に推測できる。言語ゲーム根底の知が反省的知でなければならないことが認識されるなら思考の焦点は必然的に〈語られない根底的知〉から〈根底的知の原初的表明としての「私は知っている」〉へと移行するからである。こういう訳で四月十九日の思考で「私は知っている」が言語ゲームにおいて持つ固有の意味/働きの探究が開始され、そこから言語ゲームの根源と本質に向けた新たな、そして最後の思考が展開されるのである。この思考は言語哲学という営みにとって最も根本的な「言語と知と私的存在の共通の根源」という主題へと向かうのであるが、そうした思考の価値を正しく評価する上で重要な事の一つ確認しておきたい。

第四部後半部のウィトゲンシュタインの思考は「私は知っている」や「私に間違いがあるはずがない」といった認識の表明に関わる表現の意味/機能の考察を導線として進められる。ある意味でウィトゲンシュタインの思考は知識についてではなく「知っている」という表現を巡って進められるのである。こうした思考を「単なる言い方を巡るもの」として軽視することは一般に誤りとは限らないが、ここでは明らかに誤りである。もし考察の対象が言語という存在（言語ゲームと言ってもよい）と独立に存在するものならば、こうした考察は批判の対象となる。生命の探究するのに人々が何を「いのち」と呼んでいるかを研究するのは見当違いであり、些末な言語中心主義である。何故なら生命が言語と独立に存在するからである。しかし対象が言語と独立しては存在し得ないという意味で内在的に言語的な存在である場合、こうした「言い方」の考察が本質的になる。例えば「約束」という行為は内在的に言語的存在である。約束という行為が先ず存在し、それを人々が様々な名で呼び、その一つが「約束」なのではない。約束とは「約束する」という発話において生起する存在であり、約束という行為の存在と「約束する」という発話の存在は不可分なのである。それゆえ「約束」という行為の探究において「約束する」という発話の探究は単に許容されるだけでなく必要不可分なのである。それは「約束」、「命令」等の発話内行為全般に言えることである。パートBにおいてウィトゲンシュタインが言語ゲーム根底知の反省性に到達したとは、名前知に代表される言語ゲーム根底知を発語内行為と類似した内在的に言語的な存在とみなすということである。いうまでもなくすべての知が内在的言語存在なのではない。しかし言語ゲームを根底において支えている知に関する限り知っていることと「私は知っている」と言うことが不可分なのである。「私は知っている」という発話の探究はその探究にとって不可欠であり、そこから始めるのは王道であり、後半部

のウィトゲンシュタインはこの王道を進もうとしているのである。

以下この新たな思考の歩みとそれが生み出してゆくものについてパートCとパートDに分けて順に考察しよう。

3.1. パートCの思考：「私は知っている」の超越的用法（言語ゲーム根底知の原初的表明としての「私は知っている」の意味）と二種の知

パートCの思考は二つの主題が構成する二つの思考系列から成っている。ウィトゲンシュタインの思考の常として、いずれも初めは試行的・断片的・暗示的であり、後の展開においてのみその全貌と戦略的意味が明らかになるのだが、そうした事後的観点から俯瞰的に見るならそれらは＜「私は知っている」の超越的用法＞と＜二種の知＞と表現できる主題である。パートCの思考の流れを具体的考察する前に、それぞれの主題の意味と両者の関係を明らかにしたい。

3.1.1 パートCの二つの主題

〈図9 第四部パートCのサブシーケンス図〉

シーケンス	サブシーケンス	節 番 号	日 付	内 容	スレッド
XII 言語ゲームにおける「私は知っている」の二種の機能と二種の知	a	555-563	4.19	言語ゲームにおける「私は・・・知っている」の機能の考察	$\alpha \delta'$
	b	564-566	4.19	原初的言語ゲームへの「私は・・・知っている」の導入	δ'
	a'	567	4.19	二種の知識（自己名知と水の沸点の知）の区別	δ'
	a'	568-577	4.19	自己名命題の対する「私は・・・知っている」の超越的用法の考察	$\beta \delta'$
	a'''	578-579	4.19	自己名知の公的要素	$\delta \delta'$
XIII 「私は知っている」固有の機能と自己名命題の超越性	a	580-593	4.20	言語ゲームにおける「私は知っている」固有の意味の探究	δ'
	b	594-598	4.21	自己名命題の超越性	$\beta \delta'$
XIV	a	599-608	4.21,22,23	物理学命題に対する認知的関係	δ

公共知の 考察	a'	609-612	4.23	としての公的知の考察 異なる公的知体系間の関係の考 察	δ
XV ムーア命 題の超越	a	613-614	4.23	公的知の非超越性とムーア知の 超越性	$\beta \delta$
性が言語 ゲームに 対して持 つ意味	a'	615-620	4.23	ムーア知の超越性は言語ゲーム の自然的事実の規則性への依存 を意味するのか	$\beta \delta \delta'$

このサブシーケンス図に示されているように、パートCの思考はシーケンス XII の「私は知っている ich weiß」という発話の言語ゲーム上の意味/機能の考察から始る。「私は知っている」という表現自体は様々な命題に対して様々な文脈で用いられ、それに応じて言語ゲーム上様々の機能を持つ。シーケンス XII に始るウィトゲンシュタインの思考はある意味でこうした用法の分類と分析である。しかしそこで目指されているのはこの表現の用法の研究それ自体でなく、ある特定の使用法（あるいは使用例）の探究なのである。言うまでもなくこの特定の使用がムーアによる「私は知っている」の使用であり、ウィトゲンシュタイン自身による「私は知っている」の「これは私の手だ」、「私は月に行ったことがない」、「私の名は L.W.である」といった命題への適用である。これらの命題（これまでのようにそれらを一括してムーア命題¹⁹と呼ぼう）への「私は知っている」の適用はその特別の「確実性」によって他の使用と区別され、そのためこれらムーア命題は本稿 2.2.2.で述べた超越性を話者によって付与される。今問題にしているこの特別の使用を「私は知っている」の超越的用法と呼ぶ。パートCの「私は知っている」の用法と意味に関する様々な考察とムーア命題の超越性についての考察はすべて「私は知っている」のこの超越的用法の言語ゲーム上の意味を削り出すための作業なのである。こうした思

¹⁹ 我々が「ムーア命題」と表現する概念はウィトゲンシュタインにおいて明確に存在するが、どれだけ命題をそこに含めるべきかについてウィトゲンシュタインは何度も変化する。とりわけパートC、パートDにおいて「二種の知」の区別が考察の対象となるにつれてこの外延問題はより重要性を増す。ムーア命題の外延を決定することはムーア知の本質を決定することと不可分であり、今後の思考の展開の中で徐々になされてゆく。ここで挙げた例はいかなる解釈においてもムーア命題に属するものである。なお脚注 4 も参照。

考が展開されるサブシーケンスは XIIa, XIIb, XIIa', XIIa'', XIIIa, XIIIb, XVa' であり、これらがパート C の第一の思考系列を成す (図 10 参照)。

他方我々が＜二種の知＞と呼ぶ第二の主題は全く新しいものであり、これまでの思考に存在しなかった諸問題を導入するとともに第四部後半部の思考の行方に決定的な意味を持つものである。しかしその思考が散在的であることとこの主題が多面的であるため、ウィトゲンシュタインの思考の大局的な展開の中での戦略的意味を正しく把握するためにはこの主題が生起する内的必然性を確認しておくことが必要である。これまで我々は疑いを免除され言語ゲームの基底となる確実な「経験的」命題をムーア命題と呼んできた。ウィトゲンシュタイン自身はこうした特定の呼称は決して用いないが、こうした根底的命題は一群のものと捉えられ「確実な諸命題」、「確実な経験的命題」等と呼ばれながら明確な概念を形成して来た。＜二種の知＞という主題が生起する背景には具体的にどの命題がこの概念に該当するのかというムーア命題の外延問題が存在する。『確実性』第一部から第三部においてこの概念は広く捉えられていた。「ここに私の手がある」に代表される発話者個人に関わる命題のみならず「100 年前にも地球は存在していた」を始めとし様々な歴史学や化学の基本命題もそこに含まれており、その全体は「世界像」と呼びうるものであった。ムーア命題の範囲がこのように広く取られたのは、それが単純に「疑い得ない命題」や「確実な命題」として規定されたからである。しかし第四部に入ってムーア命題との認知的関係は超越性という概念を介してより限定されたものとして削り出されてきた。すなわち問題になっている命題群は「いかなる経験もそれに対する反証と私はみなさない」といった言明(超越言明)によって表わされる特別の認知的態度としての超越性によって特徴づけられるのであり、それらはこの超越的確定性のゆえに「根底的」とみなされるのである。当然ここで問題となるのは、第三部まで一括して扱われてきた命題全てに対して我々は本当にこの超越性を付与するのか、ということである。とりわけ問題になるのが「科学的命題」である。通常状況下で我々はムーアの様に「これは私の手だ」という命題に超越性を付与すると思われる。しかし如何に基本的なものといえ様々な分野の科学的命題に対しても「いかなる経験も反証とはみなさない」という態度をとるのであろうか。＜二種の知＞という主題が § 567 で次のように導入される背景にはこうした思考が存在していると考えなければならない。

さて、自分の名は L.W.だという私の知は水は摂氏 100 度で沸騰する

という知と同じ種類のものか。・・・ (§567)

しかしこのように提示される限り、問題となっているのは我々の知識の分類ということにしかならない。ところが上述の様に真の問題として狙われているのは我々が超越性を付与する一連の命題群としてのムーア命題の画界であり、そうした命題との関係としての超越性の解明なのである。こうした画界からはじき出される命題として「水は・・・」等の基本的科学命題が対照されるのであり、ムーア命題と基本的科学命題は単に同位的な異種命題として分類されているのではないのである。こうした真の意図がこの段階では未だ十分に表現されていないがために、この問題導入には次のような注釈が付けられるのである。

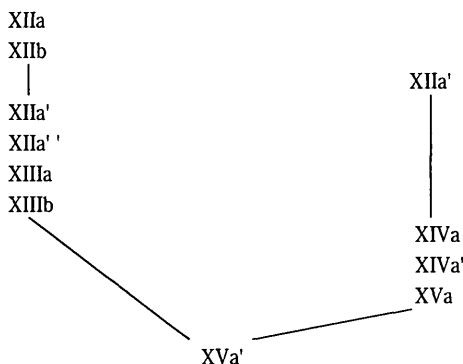
もちろんこれは誤った問いの立てかたである。 (§567)

こうして導入される＜二種の知＞という主題を巡る思考はパートCの XIIa', XIVa', XVa', で展開され、図 12 に示すように第二の思考系列を構成する。この図で XVa' は両方の思考系列に属しているが、それは二つの主題がこのサブシーケンスで完全に融合されるという意味ではなく、両主題に関連する思考がここで見られるということにすぎない。二つの主題が呼応結合して新たな思考が生み出されるのはパートDにおいて初めて見られることである。

＜図 10 パートCの二つの思考系列＞

＜「私は知っている」の超越的用法＞
に関する思考系列

＜二種の知＞に関する思考系列



3.1.2 パートCの思考の流れ

前節で見たようにパートCの思考は<「私は知っている」の超越的用法>と<二種の知>という二つの相対的に独立した主題を巡って展開される。これらの主題の内在的關係やそこに内包されているものはパートCではまだ十分には組み尽くされず、それらはいずれもパートDの思考へと継続してゆく。この意味でパートCの思考は過渡的かつ拡散的であり、思考の流れ全体の一体性よりは二つの思考系列の並列性の方が目立つのである。しかしこれらはただ同一の紙面に交互に書き記された二つの無関係な思考の流れではない。それらはパートCの思考の流れという一つの全体を構成するのである。この全体は地下を迷走するマグマの如く、最終的に向かうべき地点は判っているが、そこへ至る経路が未だ見出せないのが様々に試行する思考の流れである。こうした観点から図10を今一度見るなら、二つの思考系列は並列されているのではなく、<「私は知っている」の超越的用法>の思考系列に<二種の知>の思考系列が続くという具合に直列していることが分かるだろう。それらは内容展開上の継起関係にあるのである。さらにこの図には表現されていないが、サブシーケンス図(図9)を注意深く見るなら、<「私は知っている」の超越的用法>を巡る思考系列は緩やかに継起する二つの思考群からなっていることがわかる。それらは<言語ゲームにおける「私は知っている」の意味>を巡る思考と<「私は知っている」の超越的用法と超越言明の意味>を巡る思考、と名付けることができる。前者はXIIa,XIIb,XIIIaにおいて、後者はXIIa',XIIa'',XIIIbにおいて展開される。これら二つの思考群も内容展開上の継起関係を持っている。従ってパートC全体の思考の流れは次のような三つの思考群の継起として捉えることができる。その際最後の思考群である<二種の知>を巡る思考はこの流れの到達点という意味でパートCの結論部とみなすことができる。それは進行中の思考運動全体から見ればあくまでも暫定的・中間的な地点であるが、パートCというローカルな運動にとっては終息点であり到達点なのである。

<図11 三つの思考群からなるパートCの思考の流れ>

- (1) <言語ゲームにおける「私は知っている」の意味>を巡る思考 XIIa,XIIb,XIIIa
- (2) <「私は知っている」の超越的用法と超越言明の意味>を巡る思考 XIIa',XIIa'',XIIIb
- (3) <二種の知>を巡る思考 XIIa',XIVa,XIVa',XVa

パートCの文字どおりの末尾であるサブシーケンス XVa'がこの図から漏

れているが、それは思考の大きな流れが終息した後に付加的に展開される後収束部²⁰の一例である。以下これら三つの思考群と後収束部としてのXVa'について順にパートCの思考の流れを追ってゆきたい。

(1) <言語ゲームにおける「私は知っている」の意味>を巡る思考
-XIIa,XIIb,XIIIa-

これら三つのサブシーケンスでウィトゲンシュタインは言語ゲームという理論装置をフルに用いながら「私は知っている」という表現の意味を巡り様々な思考を展開する。既に注意したように、これらの思考の意味を理解する上で重要なのは、言語ゲーム概念のここでの使用は『哲学探究』冒頭部に典型的に見られる哲学的言説批判のための使用とは根本的に異なることを認識することである。ここで言語ゲームは単に「私は知っている」という表現の日常的意味を分析する為に用いられているのではなく、言語ゲーム（つまり言語）というものの成立に対して「私は知っている」という表現が持つ特別の機能を解明するための道具として用いられている。言語ゲームは探究の手段であると同時にその対象なのである。この点は重要なので今一度ここに至るウィトゲンシュタインの思考の大きな流れを振り返ろう。はじめは言語ゲームの根底にある原初的な確実性であった。それは事物の存在と語の意味に関する原初的な知である。ウィトゲンシュタインが第四部前半部の末に到達したのは、この知がその成立において自己言表されうる反省的知でなければならない、という思考であった。言語ゲーム根底知が反省知として自己言表される表現が「私は知っている」に他ならない。従って事態は次のようになる。言語ゲームが成立するためには（＝言語が存在するためには）事物と語に関する原初的な根底知が存在しなければならないが、この知は「私は知っている」と自己言表される場合のみ知として存在するような知であるから、言語ゲームが言語ゲームであるためには「私は知っている」という表現を内包しなければならない、しかもその表現はムーアのようにムーア命題に使用されうるものでなければならない。「私は知っている」のこの特別の使用により言語根底知は言語根底知として存立し、言語根底知の存立により言語ゲームは言語ゲームとして存在するのである。つまり言語ゲー

²⁰ 後収束部はウィトゲンシュタインの思考運動においてしばしば観察される構造的特徴である。思考の流れが内的要因により一旦終結した後に現れる、主として次の思考運動を予期する意味を持つ思考群である。後収束部の典型は第一部のシーケンスX（§ § 61-65）である。「後収束部」という概念についてより詳しくは次を参照されたい。拙稿『『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(1)』、『言語文化論集』第49号(1999)、pp. 114-118。

ム（言語）の存立の基底には、「私は知っている」という表現を仲立ちとした言語と知の相互依存関係が存在するのである。サブシーケンス XIIa の次の一節はこうした事態を示唆していると理解されねばならない。

そして知の概念は言語ゲームの概念と一体となっている。（§560）

「私は知っている」という表現が言語の存立において担っている特別な役割を表現する使用の意味、それこそがここでのウィットゲンシュタインの思考の標的なのである。それは他の表現によっては代行できない「私は知っている」固有の意味であるといってもよい。従ってここでのウィットゲンシュタインの探究の目的は「私は知っている」の様々な用法の中から固有にして言語ゲームの存立に不可欠な用法を削り出すことなのである。

こうした作業の第一歩としてサブシーケンス XIIa (§§ 555-563) では幾つかの予備的と呼ぶような考察が示されるが（上に引用した § 560 もその一つである）、とりわけ重要なのが「ともあれ我々の「知る」という概念が存在しない言語を想像するのは重要である」（§562）という方法上のコメントである。

「知る」という概念が存在しない言語とは「私は知っている」という発話の存在しない言語である。それはこうした言語もまた言語である事を示すためではない。我々が「知る」、「私は知っている」といった表現によって遂行している機能のうち、どこまでがこの言語においても存在するのかを考察することにより、他に還元できない「知る」固有の意味を削り出すためなのである。観点を変えるなら、この作業は『探究』§2 の様な原初的言語に「石材の数の報告」といった新たな発話行為を次々と加えてゆき、どの時点でそうした機能が「私は知っている」無しには表現し得なくなるのかを探る事によってもなすことができる。サブシーケンス XIIb, XIIIa ではまさしくこうした作業がなされるのである（§2 の原初的言語ゲームの拡張については §§564-566）。こうして提示される様々な考察は（興味深くはあるが）本質的に拡散的思考であり、ここで網羅的に検討することはしない。ただし思考の大きな流れという観点から注目すべき思考が一つ存在する。それは「しかし「私はこれが木だと知っている」は「これは木だ」とは何か違うことを言っているのではないか」（§585）という問いかけとそれに対する返答（§§587-588）を通じて示されている。いうまでもなくこれは還元不可能な「私は知っている」固有の意味の問いかけなのだが、ウィットゲンシュタインの答えは、「私は・・・知っている」では「人物 Person

に言及されている」 (§ 587) 点が異なっている、というものである。この解答はあまりにも当たり前でつまらなく思えるかもしれない。しかしこれまで我々が「公的解釈」と呼んできたウィトゲンシュタインの「私は知っている」解釈からすれば、これは極めて重大な変化なのである。ここで公的解釈の原点をもう一度確認しておこう。

もし「私は・・・知っている」が文法的命題と捉えられるなら、もちろん「私」は重要ではありえない。そしてその本当の意味は「この場合疑いといったものは存在しない」あるいは「この場合「私は知らない」という表現は意味をなさない」というものである。そしてもちろんここからは「私は知っている」も又意味をなさないということが導かれる。 (§ 58)

ここでは(ムーア的な使用における)「私は知っている」の「私」によっていかなる特定の人物も言及されていないという解釈が提示されている。この「私」の非人称性こそ公的解釈の核心である。他方 § 587 で示されたのは、(ムーアの使用に見られる)「私は知っている」の還元不可能な固有の使用において「私」は人称性を持つ、という思考である。これらは互いに相容れない思考であり、 §§ 585, 587, 588 のテキストはウィトゲンシュタインの思考の深部で極めてスコープの長い大きな変化が進行中であることを示している。この新しい解釈を我々はこちらではまだ「私的解釈」と呼ぶことはできない。何故なら公的なものに対する私的なものを定義する「私」という概念がここでは未だ存在しないからである。むしろウィトゲンシュタインの深部で進行しつつある思考こそ「私的なもの」の中身を与えると考えるべきなのである。そうした展開はパートDの主題となるであろう。ここで触れられた人称性とはそうした運動の起点なのである。

(2) <「私は知っている」の超越的用法と超越言明の意味>を巡る思考 -XIIa', XIIa'', XIIb-

ある概念を言語ゲームという道具を用いて提示するのは数学の構成的証明のように具体的であるが手間のかかる手続きである。そのため今考察した箇所の思考も「私は知っている」の固有の意味という目標に到達するというよりは、関連した幾つかの考察を提示するに留まっている。それに対してこれから考察

する一連のサブシーケンスでは「私は知っている」の固有の意味を、ムーア命題に対する使用を考察することによって直接的に探求する思考が展開される。この探究は単に「私は知っている」の意味のみならず、そのムーア的な使用を特徴づける一連の補足的言明のとしての（例えば「私はいかなる証拠も反証とは認めないだろう」といった）超越言明の解釈を通じてもなされる。既に述べたようにこれらの言明によって示される話者の態度が超越性なのである。こうした超越言明によって補足される「私は知っている」のムーア的な使用が超越的使用である。これから問題にしようとしている思考は「私は知っている」の超越的使用と超越言明の意味を巡る思考なのである。この思考は次のような問いかけによって始る。

自分の名前といったことについて間違はずの私を知っている様に思えないか。

これは次のような言葉に示されている：「もしそれが間違っているなら、私は 正気ではないことになる」。・・・ (§572)

問題は「それについて自分に間違いがありえないことを私は知っている」あるいは「それについて私に間違いはありえない」がどんな種類の命題か、ということである。・・・ (§574)

こうしたテキストを示されると、この問いがこれまですでに何回か登場したものであることに読者は恐らく気付かれるであろう。事実この問題は既に第一部で登場し、それ以来継続している問題である。我々は当初この問題を「ムーア言明の意味の問い」と呼んで来た。しかし第四部に入って超越性の問題が前面に登場するに伴い、より適切に「超越言明の意味の問い」と捉えられたものである。ウィトゲンシュタインによって用いられる超越言明のヴァリエーションを知るためにも、またウィトゲンシュタインの思考運動の継続性と反復性を確認するためにもこの問いのこれまでの出現を振り返ってみよう。

第一部

「ここでの間違いとは一体どんなものなのか」、これはどのような種類の命題なのか。・・・ (§51,)

第四部パートA

私は情熱を持って「私はこれが足だと知っている」と言う。しかしそれは何を意味するのか。(§379)

私は「世界中のいかなるものもそうでないと私に思わせることはできないだろう」と続けることもできる。・・・ (§380)

さて「世界中のいかなるものも・・・」はどのような種類の命題なのか。(§385)

第四部パートB

「私は自分の名が L.W.だと知っているのか、それともそう信じているだけなのか」・・・ (§491)

「この命題を疑えば私はすべての判断を放棄せざるをえなくなる」

しかしこれはどのような種類の命題なのか。・・・ (§494, 以上について下線は引用者)

『確実性』の思考を支配してきたこの問いに対して二種の答えがこれまで試行的に示されてきた。第一は超越言明が論理的命題であるというものである。明らかに「私」の非人称的（公的）解釈と呼応するこの答えは次のように提示されている。

・・・これは論理命題でなければならないだろう。しかしそれは使用されない論理である。なぜならそれが述べることは命題という形で我々に教えられないからである。(§51)

・・・それは確かに経験的命題ではない。それは心理学には属さない。それはむしろ規則という性格を持っている。(§494)

第二の答えは超越言明が決断の表明に似た何かであるという答えである。

・・・一それは宣言かもしれない、しかしそれから何が導かれるのか。

少なくとも、私は自分の信念に沿って疑いを知らない確実性をもって行動するだろうことが導かれる。(§360)

しかし知識が決定と関係していることがここで明らかになっているのではないか。(§362)

この答えは「私」の人称的解釈に対応する。このように超越言明（そして「私は知っている」の超越的用法）の意味については、「私」の非人称的（公的）解釈と人称的解釈に対応する二種の答えの流れがこれまで存在していたのである。今問題にしているパートCで様々な形で示されている思考は次の様に人称的解釈に繋がるものである。

「自分の名についての私の知識は絶対に確かである」

そうでないと示そうとするいかなる議論も私は考慮することを拒否するだろう。

そして「私は拒否するだろう」は何を意味するのか。それは意図の表現なのか。(§577)

もし誰かが私に自分の名は N.N.だと言え、彼に「それは間違いではありませんか」と訊ねるのは無意味ではない。それは言語ゲームにおいて許された問いである。そして答えは、間違はずはない、か、間違いかもしれない、である。・・・(§596)

「それは間違いではありませんか」に対する答えは、元の言明に対して確かな重みを与える。・・・(§597)

これらの思考は未だ試行的であり、これまでの思考を大きく超えるものではないが、ウィトゲンシュタインの思考がこれまでの「ムーア言明の公的解釈」という場所から離れ、「私は知っている」の「私」の人称性に深く関わるような思考へと動きつつあることを示しているのである。

(3) <二種の知>を巡る思考 -XIIa',XIVa',XIVa',XVa-

<二種の知>という主題の背景には自分の名前に関する知識と水の沸点に関

する知識の間には質的な相違があるという直感が存在している。この相違は次の様な二種の知の相違であると考えられる。第一は「これは私の手である」に代表されるムーア命題によって表現される知であり、これまで我々がムーア知と呼んできたものの本体である。第二は基本的科学命題の様に広く共有されている知であり、それを改めてここで公共知と呼びたい。3.1.1 で述べたように『確実性』第一部から第三部（とりわけ第二部と第三部）でそれらの相違はウィトゲンシュタインの視野に入っていなかった。例えば次の様に述べる時、ウィトゲンシュタインは明らかにこれらをひっくるめて根底的な知（ムーア知）とみなしていたのである。

ムーアが自分はこれこれを知っていると言う時、実は彼は我々が特別に確かめることも無く肯定するような多くの経験的命題を列挙しているのである。すなわち我々の経験命題の体系の中で特別な論理的役割を果たしている命題を列挙しているのである。（§136）

このように以前「特別な論理的役割を果たしている経験命題」として一括して捉えられていたものにこうした区別を見出すというのは、パートC以降の思考がそれ以前の思考から深度において大きく隔たっていることを示している。と同時に「もちろんこの問いの立てかたは間違っている」という§567の注釈に示されているように、二種の知の相違に関するウィトゲンシュタインの直感には「知の分類」という原形とは異なった形で展開されてゆく。「異なった形」とは言語ゲームを用いた言語ゲームの根源の探究という思考に対応するような形であり、より具体的には「私は知っている」の言語ゲーム上の特異な役割の探究に結びつくような形である。

こうした観点から見ると XIVa 以降の＜二種の知＞に関わる思考の実質的展開は、二群の命題に対する二つの認知的態度と関係の考察として最も良く理解されるだろう。二群の命題とはムーア命題と公共知の内容を担う公共知命題であり、それぞれに対する我々の関係の総体がムーア知と公共知である。

XIVa では物理学の教科書を例にして公共知命題に対する認知的関係の特徴が考察されている。この関係は「信頼する *trauen*」と表現するのが最も適切なものであるが、考察の対象となるのはこの信頼の根拠であり、その根拠がこの関係を「知」とするにふさわしいかという問題である。公共知の知としての正当性に対する一連の懐疑的思考と肯定的思考は一体となって次の様に展開さ

れる。

実験物理学の教科書を信頼するどのような根拠があるのか。

それを信頼しない根拠が私にはない。そして私はそれを信頼している。それらの本がどのように製作されるのか私は知っている。あるいは、知っていると思っている。私には何らかの証拠がある、しかしそれはたいしたものではなく散発的である。私はいろんな事を聞いたりみたり読んだりした。(§600)

「私は物理学を信じている」と言うべきか、それとも「私は物理学が正しいことを知っている」と言うべきか。(§602)

行動するに当たって私が物理学の命題に従うのは間違いなのか。そうすべきまともな根拠がないと私は言うべきなのか。これこそ「まともな根拠」と呼ばれるものではないのか。(§608)

公共知命題に対するこの曖昧な認知的関係の正当性に関する思考はここで開いたまま中断しパートDへと持ち越される。

公共知命題に対する認知的関係がこのように曖昧なのは、それが本質的に信託性とも呼ぶべき間接的関係であるからであり、これは公共知を共有する共同体に分業と専門知が存在する限り必然的に生じる事態である。従って異なった共同体が異なった公共知を持つのはある意味で必然である。続く XIVa'でウィトゲンシュタインが問題にするのはこうした他の公共知に対する認知的態度である。具体的には物理学の代りに神託を信じる人々について、彼らがそうすることは正しいのか間違っているのか、我々が彼らを「間違っている」と呼ぶことは正当なのか、が次のように問われる。

これを説得力のある根拠とみなさない人々に会ったとしよう。さてそれはどんな風に想像できようか。彼らは物理学者に訊ねず、神託にうかがいを立てる（そしてそのため我々は彼らを原始的だと考える）。彼らが神託にうかがいを立て、それに従うのは間違いなのか。-もしこれを「間違い」というなら、我々は自分たちの言語ゲームを基地として用い、彼らの言語ゲームと戦っているのではないか。(§609)

そしてそれと戦うことは正しいのか間違っているのか。もちろん我々のやり方を正当化するあらゆる種類のスローガンは存在する。

(§610)

和解し得ない二つの原理が本当に会合する場合、それぞれは相手を馬鹿だ、異端だと言う。(§611)

私は相手と「戦う」だろうと言った。しかし私は相手に理由を説明するのではないか。確かに。しかしそれはどこまで続くのか。理由の説明の果てには説得が来るのだ。(宣教師が原住民を改宗させる時に何が起きるか考えてみよ)(§612)

ここでは公共知を巡り外的思考²¹と内的思考のせめぎ合いが試みられている。その帰趨は相対主義とウィトゲンシュタインの最終的関係に大きく関わるものである。そしてこの問題がこの後『確実性』で再び登場することはない。ここからこの問題に関するウィトゲンシュタインの最終的な思考を読み取ることに対しては慎重でなければならない。確かにここでは外的思考が基調をなしているが、全体として思考は開かれたまま終わっていることに注目しなければならない。他の公共知を間違いと呼ぶことが正しいのか、という根本的な問いはここで開かれたままなのである。他の公共知に対する認知的態度は自分達の公共知に対する態度と無関係ではない。自分の共同体において物理学ではなく神託に従う人を「間違い」と呼ぶことが正しいのなら、他の共同体の同じ事を「間違い」と呼ぶのも正しいことになろう。もしそうでないのなら、それに対しては特別の理由が必要であろう。従って先のサブシーケンス XIVa で保留されていた我々の公共知としての物理学的知の認知的妥当性の問題とここでの他の公共知に対する認知的態度の問題は単一の問題の二つの側面とみなすべきなのであり、その帰趨はパートDにおけるそれらの展開を注意深く見守る事によってのみ決定できるのである。

続くサブシーケンス XVa は＜二種の知＞を巡るパートCでの思考の完結

²¹ 外的思考、内的思考、については本論「1」、および拙稿『『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考(2)』、『言語文化論集』第52号(2000)、pp107-109を参照されたい。

編と言うべきものであり、ムーア命題と公共知命題に対する異なった認知的態度が初めて次のように対照的に示される。

もし今私が「ガスに掛けたやかんの水は凍らず沸騰するのを私は知っている」と言えば、この「私は知っている」の使用は他のいずれに劣らず正しいように思われる。「もし私が何かを知っているというなら、これを知っている」—それとも私は向こうにいる人物が旧友の誰某であるのをより確かに知っているのだろうか。私が二つの目で見、鏡をのぞけばそれが見えるという命題はそれより確かだろうか。一どのように答えてよいのか私は自信がない。—しかしそれでも違いはある。もしガスに掛けた水が凍ったらもちろん私はこの上なく驚くだろうが、未知の原因を想定して問題を物理学者の判断に委ねるだろう。しかしこの人物が長年知っている N.N.であることはどうやったら私に疑えるだろうか。ここで疑いは全てをひきずり混沌へと投げ入れてしまうように思われる。(§613)

すなわち、もし私が誰とも食い違い、この人の名は私がずっとそうだと知っていたもの（ここで私は意図的に「知っていた」を使っている）とは違うと言われるなら、その場合すべての判断の基礎が私から奪われるだろう。(§614)

ここでウィトゲンシュタインは二つの認知的態度について語るのではなく、自らそうした態度を示すことによって二種の地の相違を示している。すなわち「ガスに掛けた水は凍らず沸騰する」という公共知命題については「そうでない事態が起これば（大変驚くが）問題を物理学者の判断に委ねるだろう」ということによって非超越的態度を示し、「この人物は長年の友人の N.N.である」というムーア命題については、「そうでない（と皆が言う）事態が起これば、すべての判断の基礎が私から奪われるだろう」ということによって超越的態度を示している。こうした自らの真正の事例によって、§ 567 で単にそれについて語られたにすぎない二種の知の存在を、二種の認知的態度の存在として現に示しているのである。ここに見られるように第四部後半に至って、ウィトゲンシュタインの思考は語ることに示すことがますます接近するような境地を歩みつつある。それはここで語られようとしている対象が言語ゲームという行為の場においてのみ存在するようなものだからである。それについて語ることは語ると

いう行為においてそれを示すことと切り離せなくなってゆく。こうした動きの中にウィトゲンシュタインとムーアの微妙な関係が姿を見せているのである。

（４）言語ゲームの超越性と自然：パートC後収束部の思考 -XVa'-

続くサブシーケンス XVa'は §614 の「自分の名について他人の言うことが自分と食い違うならすべての判断の基礎が私から奪われるだろう」という言明の意味を巡って展開される思考であり、形の上では XVa' の直接的な継続である。しかしそこで展開されている思考が微妙であり、しかも先行する思考との関係が複雑であるため、これまでの流れとは（無縁ではないが）独立した補足的思考として理解するのが適切である。先ずこの言明の意味の問いを考察しよう。それは次の様に問われる。

さてそれは「私がそもそも判断できるのは事物がこれこれの様に振る舞う（いわば、親切に振る舞う）おかげだ」という事を意味するのか。
（§615）

このわかりにくい問いかけの意図するものは一体何なのだろうか。そもそも §614 の「・・・私から奪われるだろう」という言明は自分の友人の名が N.N. である事の確実さの表明であり、その事に対する特別の態度の表明であった。今全く観点を変えてこの言明がある事態の記述だと考えてみよう。その場合この言明によって記述されている事態とは、もし友人の名について「私」という人間の言うことが周囲の人間の言うことと食い違うようになれば、「私」という人間は判断ができなくなるだろう、ということであろう。そしてそれは、「私」という人間が判断可能なのは、友人の名について「私」という人間の言うことが周囲の人間の言うことと食い違わないからだ、という事に等しい。この事態こそ §615 の「私がそもそも判断できるのは事物がこれこれの様に振る舞うおかげだ」の意味するものである。すなわち §615 の問いとは「・・・私から奪われるだろう」という確実性の言明がこうした事態の記述かどうかという問いかけなのである。超越性と超越言明に関してこれまで辿ってきた思考に即すならば、この問いに対する答えは明らかに否である。確実性の言明はある認知的態度の表明であり、いかなる事態の記述でもない。ではそうした問いが何故ここで改めて問われているのだろうか。それはここで記述の対象として候補に上がった事態と深く関わる事態が現に存在するからである。その事態とは言語ゲ

ームの自然的事実に対するある種の依存関係である。ウィトゲンシュタインがここで極めて回りくどいやり方で問題にしようとしているのは、言語ゲームの根底とはこうした自然的事実なのか、それとも自然的事実とは独立なものとしての超越的确实性（ムーア知）なのか、ということである。言い換えるならば言語ゲームとは自然的事実の規則性の上に成立する自然的事象なのか、それとは独立の超越的确实性の上に成立する非自然的事象なのか、が問われているのである。この問いかけに対して先ず自然主義的な思考が示される。

ある種の出来事は以前の言語ゲームを最早続けられない様な立場に私を追いやるだろう。ゲームの確かさから引き裂かれるような立場に。

事実、言語ゲームの可能性が一定の事実によって規定されているのは明らかかなように思えないか。（§617）

もしそうなら言語ゲームを支える基本的事実のリストが存在しそうだが、現実にはそうではないという反思が返される。

その場合、言語ゲームはそれを可能にする事実を「示さ」なければならぬかのように見えるだろう（しかし事実はそうではない）。

それなら事象の生起に一定の規則性があるからこそ帰納が可能になると言えるのだろうか。この「可能」はもちろん「論理的に可能」でなければならない。（§618）

さらにそれに続いて次のような思考が提示される。

私は次のように言うべきなのか：たとえ自然的事象に不規則性が突然生じても、それは私を鞍から必ず振り落とすとは限らない、と。私は以前と同じように推論をするかもしれない、ただそれを「帰納」と呼ぶかどうかは別の問題である。（§619）

ここでようやく我々は言語ゲームの根底と自然的事実の関係が問題になっていることをはっきりと認識できるのである。自然がいかに暴れようとも「私」がそれに乗り続ける「鞍」こそここでウィトゲンシュタインの考える言語ゲーム像に他ならない。こうした像を通じて示されようとしているのが「非自然的

存在としての言語ゲーム」という思考なのである。この思考の中心に位置するのが超越言明（および「私は知っている」の超越的使用）である。パートCの最後に示されるのはこうした超越言明が用いられる言語ゲームの存在である。それはパートDにおいて超越的ムーア言明権という思考へと受け継がれてゆく。

特定の状況で「大丈夫だ」と言われる。この保証は日常の言語で正当な場合もあれば不当な場合もある。言われた事が起こらなかったとしても正当とみなされる場合もある。こうした保証がなされるある言語ゲームが存在する。（§620）

3.2. ウィトゲンシュタインの思考の最終局面：パートDの思考

ようやく我々は『確実性』の思考の最終局面であるパートDに到達した。同時にそれはウィトゲンシュタインの哲学定的生の最終局面である。それは印刷されたテキストにしてたかだか 10 ページ足らず、日数にすればわずか三日間の思考にすぎないが、『確実性』という思考運動がこれまで生み出してきたあらゆる思考要素を最も高い濃度と精度において凝縮・昇華させたものであり、ウィトゲンシュタインの哲学的生の最終にして最高の到達点と呼ぶにふさわしいものである。『確実性』という思考の流れはここに至って川幅、深さ、共に最大となるのである。

パートDの思考を通じてウィトゲンシュタインが示そうとしているものは、公的確実性と私的確実性の区別、言語ゲーム根底の正しさ、という二つの大きな主題の下に統合できる。第一の主題は根底的な確実性を巡るこれまでの思考の中で幾度か非主観的に触れられてきた区別を対象化し明確化し、それによって区別される「公的」、「私的」二つの確実性のそれぞれの本性を探究しようとする試みである。この主題の展開の中で、公的確実性が論理を論理たらしめているもの（論理の論理性）であり、私的確実性が私的存在としての「私」の存立に深く関わるものであることが示される。この思考はパートCまでの思考の継続として超越言明の言語ゲーム上の意味の考察を媒体として進められる。従って第一の主題を巡る思考とは論理の論理性と私的存在の根源を超越言明の探究を通じて解明しようとする試みであるということが出来る。もし論理と私的存在が言語（言語ゲーム）と独立に存在しうる何かであれば、こうした試みは些末な言語分析であり、言語ゲームという道具の濫用である。しかしそれらが

内在的に言語的存在であれば、それは論理と私的存在の本質の探究とみなされなければならない。こうした考察の進め方自体ウィトゲンシュタインの最後の思考が論理と私的存在の言語的起源を前提としていることを示している。

第二の主題は一つの新しい正しさを私的存在との関係において示そうとする試みである。「新しい」とはこれまでの考察の中で対象化され得なかったという意味であり、最終局面における思考の深化によって初めて形を与えられたという意味である。既に述べたようにこれまでのウィトゲンシュタインの思考の中には二つの正しさが想定され、折りに触れ非主題的に語られてきた。第一は「ムーアの「私は知っている」の使用は誤りである」というムーア批判において前提されていた「正しさ」であり、簡単に言えばそれは言語ゲームの「規則」に従う事としての正しさであり、「論理」に従う事としての正しさである。これが公的正しさである。第二は生態学的正しさである。生態学的正しさとは固有の環境の中で存続する存在としての種の一員たる個体が種と自己の存続の為に行為することの正しさであり、そうした行為と一体となっている限りでの認識の正しさである。『確実性』最終局面で新たに取り出される正しさはこのいずれとも異なる。それは私的存在が言語的存在（言語ゲーム参加者）として存在するために必要な正しさであり、私的存在が本質的に言語的な存在であるとすれば、それは私的存在が私的存在として在るために必要な正しさである。これを言語ゲーム根底的正しさと呼ぼう。これは言語的かつ私的な存在としての人間の存在条件である。

これらの主題が展開されるパートDはこれまでとは異なった構造を持っている。これらの主題が『確実性』の思考全体を前提としたグローバルなものであるため、それらは交互に展開されるのではなく、混じり合いながら同時に展開される。それは図 12 のサブシーケンス図に示されている。この図でこれまでの α 、 β 、 δ 、 δ' という四つスレッド（主題）の代わりに A,B,C,D で示した別の四つの主題が用いられているのは、パートDの思考がこれまでの全思考要素を全く異なる次元で統合しようとしているため、これまでの思考を導いてきた主題がほとんど意味を持たないためである。唯一「超越言明の意味」という主題がパートCの思考とのローカルな連続性を示しているのみである。このような訳であるから、この最終局面の理解に当たってはローカルなテキストの関係と流れを追うより、主要な主題について展開される思考を、これまでの思考要素を参照しながら広く深く取り出すことがより重要となる。以下パートDの大きな二つの主題に関するウィトゲンシュタインの思考について考察してゆき

たい。

＜図 12 第四部パートDのサブシーケンス図＞

シーケ ンス	サブシー ケンス	節 番 号	日 付	内 容	登場する 主題
XVI 超越性と 超越言明 に関する 考察	a	621-623	4.24	「私は知っている」の公共的用法と超越的用法	B C
	b	624-637	4.24	超越言明の言語ゲーム根底性と私性	A D
	b'	638-652	4.25	二種の誤りの区別と誤りの可能性の排除としての超越言明	A B C
XVII 超越言明 の言語ゲ ーム根底 性と私的 存在の起 源	a	653-658	4.25,26	公的確実性と私的確実性	B C
	b	659-663	4.26	超越言明の言語ゲーム根底性	A D
	b'	664-669	4.26	超越言明における私的確実性の生成	A B D
XVIII 超越命題 としての ムーア命 題	a	670-676	4.27	超越言明されるべき命題としてのムーア命題	D

* 四つの主題

A : 超越言明の意味

B : 私的確実性

C : 公的確実性

D : 言語ゲーム根底の正しさ

3.2.1 公的確実性と私的確実性の区別

『確実性』の思考は一貫して「私はこれが自分の手だと知っている」という言明によってムーアが表現しようとした特別の確実性（ムーア確実性）とその言語ゲーム上の意味を問題にしてきた。当初「私は・・・と知っている」の「私」は特定の個人を指さないものとしてと非人称的に理解された。それに応じて「私は・・・と知っている」という言明は特定の個人の知識を述べているのではな

く、問題になっている命題が言語ゲームにおいて疑いから免除されているという「論理的」事実を述べているのだ、と理解された。これがムーア言明の公的解釈である (§58)。このように解釈される限りにおいてムーア確実性とは論理の持つ確実性であり、我々がここで公的確実性と呼ぶものもおおよそそれに対応することになる。ただその段階では未だ私的確実性との対立分化を経験していない未分化な確実性概念である。『確実性』第二部、第三部の思考はこの未分化な「論理の持つ確実性としての公的確実性」という概念を対象に展開されたのである。そこで具体的に示されたのは「共同体において固定された信念体系としての世界像」と呼びうるものの認知的諸特徴であった。

しかしながら第四部に入り「私は知っている」という表現や「それについて私に間違いはありえない」等の超越言明の言語ゲーム上の意味の考察が重ねられるに連れて、パートCの考察で述べたようにそれらの「私」が非人称的ではありえないことが次第に自覚されてきた。他方論理とは特定の個人に係わるものではないから、その結果として「論理の持つ確実性としての公的確実性」はムーア言明やムーア確実性から切り離されることになる。公的確実性はそれらに関する考察とは独立に解明されなければならないのである。同時にムーアが「私はこれが自分の手だと知っている」によって表現しようとした確実性が論理の持つ確実性とは独立に解明されるべきものとして新たに登場するのである。それが私的確実性と我々の呼ぶものにほかならない。こうして第四部に入りウィトゲンシュタインの思考の深部には二つの確実性を分離し、それぞれ互いに独立のものとして探求しようとする圧力が次第に蓄積されてきたのである。＜二種の知＞を巡るパートCの思考もこうした圧力の現れである。ただ＜二種の知＞という問題設定は今問われている課題に十分適合するものではない。＜二種の知＞という主題がある個人（具体的にはウィトゲンシュタイン自身）が二種の命題群に対して持つ認知的関係の対照的探究であった事を想起しよう。私的確実性に対するアプローチとしてこれは適切であり、その中で抽出された超越性という関係こそ私的確実性の鍵となるべきものである。しかし論理と公的確実性は上で述べたように非人称的なものであるから、必要とされるのはある個人との具体的認知関係の考察ではなく、むしろ第二部、第三部で見られたような信念体系や知識体系を対象とした考察なのである。こうした理由により＜二種の知＞という主題はパートDにおいて二つの確実性の区別という主題に溶解し合流するのである。

従ってパートDにおいてウィトゲンシュタインの思考が引き受けるべき条件

とは次のようなものである。私的確実性と公的確実性を分離し、それぞれ独立したものとして本性を探求し解明すること。その際ムーア言明やムーア命題に関する考察は前者にのみ関わり、論理や言語ゲームの記述や概念的定義に関する考察は後者にのみ関わること。更にこうした探究において私的存在と公的存在を相互に独立なものとしてその生成を探求し解明すること。というのもこれまでの考察の中では公と私が分離されていないため「私的」なものの内容を提示する際の起点となるべき「私」という表現にすら「公的解釈」や「私的解釈」が存在し、結果として何が「公的」で何が「私的」かについては未だほとんど何の規定も存在しないという状況だからである。

以上は同時にパートDの思考を内在的に理解しようとする我々が引き受けるべき条件である。以下できる限りこの条件に従いつつそれぞれの確実性とその相関者について考察してゆこう。

3.2.1.1 論理と公的確実性

公的確実性とは論理の持つ確実性である。論理的事実は「・・・でなければならぬ」という特別の強制力を持つものとして現れる。この強制力の本性と源泉は長年にわたりウィトゲンシュタインの関心の対象であった。『確実性』の思考で論理の確実性の本性が直接主題的に問われることはないが、ムーア命題の確実性の源泉を説明する説明項として論理の確実性が用いられるため、「私は知っている」というムーアの言明は論理的洞察を表現している、という思考に代表されるようにムーア命題の確実性と論理の確実性は強く関係付けられて来たのである。その結果ムーア命題の持つ諸性質が論理の本性の理解にフィードバックされ、新しい論理概念がウィトゲンシュタインの思考にもたらされた。ある意味で『確実性』第二部、第三部の思考とはこの新しい論理概念の探究なのである。しかしながらこの新しい論理概念の基礎となったムーア確実性と論理の確実性の相関関係は「私は・・・知っている」というムーアの言明が非人称的に解釈される限りで成立するものである。従って第四部後半部で「私は・・・知っている」が人称的に解釈されるに至り、この新しい論理概念は突然その存立基盤を失うのである。いわば私的確実性という新しい思考対象が登場した結果、苦勞して積み上げられた公的確実性の新しい説明が崩壊してしまうのである。こうした状況下で公的確実性の源泉を探究するというのがパートDの思考が置かれている状況なのである。従って論理の確実性の源泉に関するウィトゲンシュタインの最終的思考を検討するためには、論理像を巡るそれ以前の

彼の思考の変遷を確認しておく必要がある。

ムーア命題の確実性と連携した新しい論理概念が登場する以前の思考において、論理とは事物の概念的定義として考えられていた。こうした概念的定義が言語と思考の根底に存在し、それに反する思考や言語は無意味となり、そのことによって自己の思考と言語を有意義にしようとする存在者に強制力を持つ。これが論理的確実性の源泉である。『確実性』では第一部、第二部でこの旧来の論理概念がなお散見される。例えば次の表現において前提され、用いられている論理概念はこの「概念的定義としての論理」である。

何を言明の十分なテストとみなすかは論理に属する事柄である。それは言語ゲームの記述に属する。(§82)

ここで述べられているようにウィトゲンシュタインの思考において「概念的定義」とは「言語ゲームの記述」に他ならず、「言語ゲームの記述」とはいつ誰がどんな言語ゲームをしたかという事実の記述ではなく言語ゲームの規範の記述、すなわち「規則」である。従ってこの旧来の論理概念において論理の内容を示す論理命題とは概念的定義であり、言語ゲームの規則なのである。それは我々が通常と「論理」と呼ぶものにほぼ対応するから、それを狭義の論理命題と呼びたい。狭義の論理命題は定義や規則であるから非時間的な非経験的命題である。

これに対して新しく導入されるのが、狭義の論理命題のみならず一部の経験命題も論理命題としての地位と確実性を持つ、という拡張された論理概念である。いうまでもなくこの「論理命題としての地位と確実性を持つ経験命題」の代表例がムーア命題である。旧来の論理概念の拡張としてこの新しい論理概念が導入される背景には、概念は一般的な定義と規則のみによっては確定されず、概念の具体的な適用例（判断例）が必要である、という思考が存在している。それは次のように表現される。

一つの実践を確立するためには規則ばかりでなく例も必要である。我々の規則には抜け穴があるから、実践は自分で自分を支えなければならないのである。(§139)

我々は規則によって経験的判断という実践を学ぶのではない。我々は様々な判断例とそれら相互の関係を教わる。我々は様々な判断の総体

をもっともだとみなすのである。(§140)

この新しい拡張された論理概念は第二部初頭で試行的に次のように提示されている。

仮説として機能し得た言明文を探究と行動の基礎としても用いることはできないか。・・(§87)

ある種の経験命題が「探究と行動の基礎」として用いられるとは、それらが確實とみなされ、狭義の論理命題と同様に疑いから免れている事を意味する。こうした新しい拡張された論理概念はより確定的に次の様に表現されることになる。以下の引用で「論理」という表現が二度登場するが、§342の「論理」は拡張された論理全体を、§401の「論理」は狭義の論理を意味している。

すなわち一定の事柄が現に疑われていないということが我々の科学的探究の論理に属している。(§342)

私は次のように言いたい：論理の命題ばかりでなく経験的命題の形をした命題が思考（言語）のすべての操作の基礎を形成している。・・(§401)

さてこうして導入される「論理命題の地位を得た経験命題群」の諸性質を巡って（主として）第二部、第三部では様々な考察が展開されるが、中でも現在の我々の考察にとって大きな意味を持つのがこれらの経験命題が論理命題化される過程に関する説明である。それは、はじめ論争的であった経験命題が歴史の中で徐々に固定化され、やがて論理命題と呼ぶべき確実性を獲得するに至る、という説明であり、硬化理論と呼ぶべきものである。硬化理論は次のように表現される²²。

次のように想像できるだろう。経験的命題の形をしたある命題群が硬化し、硬化せず流動的な経験的命題のための水路として機能する、そ

²² cf. § § 210-211.

して流動的な命題が硬化し、固くなった命題が流動化することによりこの関係は時とともに変化する、と。(§96)

神話は再び流動的になるかもしれない、思考の河床は移動するかもしれない。しかし私は河床の上の水の動きと河床自身の動きを区別する。もっともそれらの間には明瞭な区別がないのだが。(§97)

しかしもし誰かが「だから論理もまた経験的科学なのだ」と言うのであれば、それは誤りである。しかし次の事は正しい。同じ命題がある時には経験によってテストされるべきものとして扱われうるし、別の時にはテストの規則として扱われうる。(§98)

このように記述される硬化した経験命題は論理というより神話やイデオロギーといったものに近いようにも見える。そうした側面を表現するのが「世界像」という言葉である。世界像としての固定化された経験命題は教育を通じて我々に刷り込まれる。

我々の経験的命題が全て同じ地位を持っていないことは明らかである。というのもこうした命題を定めそれを経験命題から記述の規範へと転化できるからである。

化学の研究について考えてみよう。ラボアジェが実験室で物質を用いて実験し、燃焼に際してこれこれが起こると結論づける。彼は、次の時は別の結果になるかもしれない、とは言わない。彼は確かな世界像を持っている。もちろんそれを自分で作り出したのではなく、子供の時に学んだのだ。私は世界像と言い、仮説とは言わない。それが彼の研究の自明の基礎であり、その限りで触れられることがないからである。(§167)

さてこうして組み立てられた「論理命題化した経験命題」に関するウィトゲンシュタインの思考は、ムーア言明の公的解釈が放棄されることによりその基礎を失うことになる。もちろんその全てが崩壊するわけではない。しかしそれらの命題が「論理的」と呼びうる確実性を持つと想定されたのは、「これは私の手だ」といったムーア命題の持つ特別な確実性をもつと想定されたからであ

る。もしこの経験命題群からムーア命題が取り除かれたなら、後に残るのは基礎的な物理学、解剖学、歴史学、・・・の総体としての公共知ということになる。それは外的な視点から見れば「神話」、「イデオロギー」とも呼びうるものである。それらの確実性は論理の確実性とは呼び得ないであろう。つまり上述の硬化理論は公的確実性の源泉の説明としては興味深いものではなくなるのである。それにつれて新たに導入された拡張された論理概念の地位も極めて曖昧となる。論理が拡張されたのは一部の経験命題が論理命題並みの確実性を得たからであった。ところがそれらが実は神話や世界観程度の確実性しかもたないなら、それらを論理に組み入れる理由はなくなる。論理を拡張しなくとも論理と世界観があればよいことになる。ムーア命題を取り除いた後の「世界像命題群」が果たして論理的確実性を持つのかどうか、これがムーア言明の公的解釈の放棄によりパートDの思考が引き受けることになった大きな問題であるが、後に見るように放置されたまま終わることになる。

この混沌とした思考状況の中でウィトゲンシュタインは論理の確実性の源泉の問題を再度取り上げる。パートDのサブシーケンス図(図 12)に示されているように公的確実性(論理的確実性)に関する思考は XVIIa (§§ 653-658)で私的確実性と対照して展開されるが、それは先行する XVIIb' (§§ 638-652)後半の思考(特に §651)と微妙な関係で結ばれている。この XVIIb' では「私に間違いはありえない」という超越言明を「誤りの排除」 (§ 640)として理解しようとする思考が展開されるが、その中でムーア命題の様な経験命題と同様に計算からも誤りが排除されることが述べられた (§ 650)後に次の様な考察が示される。

12x12 が 144 であることについて私に間違いはありえない。そして数学的確実性と経験命題の相対的非確実性を対比することはできない。
なぜなら数学的命題は一連の行動によって得られたのであり、それらは我々の生活の他の行動となんら変わるものではないものであり、同じように物忘れ、見逃し、錯覚を蒙るものだからである。(§651)

ここで目指されているのは経験的命題と論理命題の確実性を連続的に捉えようとする「拡張された論理概念」という思考である。しかしそれは探究の対象としてでなく、逆の思考を導くための契機としてのみ登場する。そうした展開

は続く XVIIa ではっきりと姿を現す。

先ず § 653 でこの拡張された論理概念という思考が明示的に反復され、それに続き「しかしこれに対しては多くの反論がある」 (§ 653) という形で反対吟味が始まる。曖昧で省略的ではあるが § 653 の思考を通じて登場するのが、「 12×12 という計算は、計算の仕方を知っている人が計算すれば大多数の場合 144 という結果になる」という経験命題である。これは「数学命題が一連の行動から得られる」と言われたその過程に対応する命題、いわば数学的命題を背後から支える経験命題である。「拡張された論理概念」とはこうした命題を仲立ちとして経験命題と論理命題を連続するものと見なす思考である。ところが § 654 末でこの思考に対して次のような疑問が提示されるのである。

・・・誰もこの命題に異を唱えないだろう。そしてもちろんこれは数学的命題ではない。しかしそれは数学的命題の確実性を得ているのか。
(§ 654)

ここでウィットゲンシュタインの思考は飛躍する。この問いに答え（もちろん否定的な）を与える暇もなく数学命題の確実性（論理的確実性としての公的確実性）そのものへと思考は向かうのである。そしてそれは私的確実性との対照において思考される。そうした思考は次の様に表現される。

数学的命題は、いわば公的に、反駁不可能性の刻印をおされている。すなわち、「他のことについて議論せよ。これは不動である。これはお前たちの議論がその周りを回る蝶番である」、と。(§ 655)

そしてこのことは私の名は L.W. であるという命題について言えない。それはこれこれの人がこれこれの計算問題を正しく計算した、という命題についてもまた言えない。(§ 656)

数学的命題は化石であると言えるだろう。－「私の名は・・・」という命題はそうではない。・・・ (§ 657)

ここには次のような極めて興味深い思考が示されている。第一は自分の名に関する命題の確実性と数学的命題の確実性が対比されている点である。両者の

相違は強度の相違ではありえないから、それは質的な相違である。すなわち二つの質的に異なる確実性がここに初めて対象化されているのである。それが数学的命題の持つ確実性としての論理的確実性(公的確実性)と自己名命題をはじめとするムーア命題の持つ確実性としての私的確実性である。第二は「化石 Petrefakt」という比喩が示そうとしている数学命題の起源に関する思考である。数学命題が化石であるとは、もともとそれは柔らかい体を持つ生き物だったが、長い年月を通じて硬く石となった事を示唆している。「柔らかい体を持つ生き物」に対応するのは明らかに計算結果に関する上述の経験的命題である。はじめは計算結果に関する経験的命題であった数学命題はいつしか経験性という命を失い、その代わりに永続性と強固さを得て数学的命題になったのである、これが化石の比喩の示そうとする思考であろう。この「化石理論」は第二部で提示された「硬化理論」と極めて似ている。しかし両者の間にはかすかだが重大な相違が存在し、それは「河床」と「化石」という比喩そのもののの中に示されている。前者に従えば経験命題と論理命題の関係は砂と河床の関係であり、一方が固まり他方となるし、固まったものが侵食され再び流動的となる。従って両者の移行関係は可逆的であり、その違いは硬さの量的な相違である。それゆえ先に引用した § 98 で「では論理は経験科学なのだ」という当然の「誤解」に対して牽制がなされたのである。ところが後者の比喩に従えば経験命題と論理命題の関係は生きた生き物とその化石の関係であり、両者の移行関係は非可逆的である。両者の相違は硬さの量的相違ではなく、生き物と鉱物の質的相違である。経験命題が論理命題に転化する場合、単に確実度が増大するだけでなく変性して別のものになるのであり、その時に獲得される性質こそ化石の化石性たる論理の論理性なのである。「数学的命題は、いわば公的に、反論不可能性の印をおされている」という § 655 の言葉は非可逆的に獲得されたこの「論理の論理性」について述べていると理解しなければならない。しかし「公的に反論不可能性の印をおされる」ことによって獲得される「論理の論理性」とはどんな性質なのだろうか。それは自分の名の確実性とどう違うのだろうか。「公的」とはどのようなことなのだろうか。

これらの問いについて有効に考えるためには、「・・・は論理命題である」あるいは「・・・は論理に属する」というウィトゲンシュタインによってしばしば用いられる表現の意味について考える必要がある。例えば次の二つの表現を比べてみよう。

- (1) 自分の痛みを他人が感じることはできない
- (2) 「自分の痛みを他人が感じることはできない」は論理命題である

これらはどのように異なるのだろうか。(2)は(1)の述べないどのような事を述べているのだろうか。(1)は相当数の人によって確実と感じられる事柄であろう。しかし個々の人がその確実性の源泉を何と感じるかはまちまちであろう。痛みを苦しむある人が他人の無理解と薄情を嘆いて(1)と言うなら、その人にとって(1)の根拠は現在の自分の体験であろう。もしその人が(2)のような事を聞いたことがなく、自分自身もそのように考えたり言ったりすることがなければ、その人にとって(1)は確実な経験命題にとどまるだろう。もしそれに対して別の人が(2)と言うなら、この人は(1)に対して別の、しかも誰にでもいつでも当てはまるような根拠を与えているのである。あることについて「論理命題である」(あるいは「文法命題である」と言うことはそのようなことである。ではこの人によって述べられた「(1)は論理命題である」というのは元々存在していて、ただ先の人が見過ごした事実なのだろうか。後の人は(2)によってその事実を記述したにすぎないのだろうか。それともこの人は(2)と言うことによって(そしてそれが受け入れられる事によって)(1)を論理命題としたのであり、(2)はある種の遂行的発話行為なのだろうか。ここで論理観は二つに分岐する。もし(2)が事実の記述であれば、論理性とは人があることを「論理である」と言うことと独立に成立する現象であり、論理とは言語(言語ゲーム)から独立した存在である。他方(2)が遂行的行為であれば、論理性とは一定の条件の下で「・・・は論理である」という発話が正当に遂行され受容される限りにおいて成立する現象であり、内在的に言語的な存在となる。すなわち言語知と同様、論理も根源的に反省的な存在となるのである。前者を記述的論理観、後者を遂行的論理観と呼ぼう。両者の是非について独立した問題としてここで論じることはできないが、『確実性』第四部後半部でウィトゲンシュタインが展開してきた思考、すなわち言語(言語ゲーム)と言語知の根源的反省性に立脚する思考にとって記述的論理観は受け入れられないものであり、遂行的論理観は思考の根本的生理に即したものである²³。

²³ これは記述的論理観が言語ゲームを超えた無限な存在として論理を想定するからである。すなわち、もし(2)が事実の記述であるなら、それが経験的事実か、論理的事実が、それ以外の種類

遂行的論理観においてある命題に論理性を与える遂行的行為は次のような特徴を持っている。「約束」などの通常の遂行的発話行為は「私は約束する」という表現を通じて特定の個人（場合によっては個人の集団）によって遂行される。ところが「論理である」とは「いつでも誰にでも適用できる根拠を持つ」ということであるから、ある命題に論理性を付与するという行為はいかなる特定の個人によっても成功裏に遂行し得ないのである。(2)のような論理性付与行為とは特定の行為者がそもそも存在しないような行為²⁴なのである。こうした発話行為を公的発話行為²⁵と呼ぼう。§ 655 の「・・・に公的に反論不可能性の刻印をおす」とは公的発話行為としてある命題に論理性を付与する行為を示していると考えられる。すなわちそれは「・・・は論理命題である」と言うことの別の表現なのである。そしてそれに続く「他のことについて議論せよ。これは不動である。これはお前たちの議論がその周りを回る蝶番である」という台詞は、こうした論理性付与行為の意味をより演劇的な発話行為として表現しようとする試みであると考えられる。こうした § 655 の諸表現は、ウィトゲンシュタインがここにおいて遂行的論理観に立ち、論理の根源的な反省性を思考していることを示している。この思考に基けば、論理が論理であるのは、単にそれが確実に現に万人によって受け入れられているためだけではなく、それが論理であることが公的な発話行為によって「これは論理である」と明示的に述べられ受容されているからに他ならない。

公的確實性に関する以上の思考が適用されるのは数学命題の様に経験命題という形を失い、完全に「石化」した命題に対してのみである。それらは狭義の

の事実か、と問うことができる。仮に(2)がX的事実であるとしよう。すると今度は、(2)がX的事実である、とはどのような事実か、という問いが立てられ、問いの系列は無限に続く。こうした事実の無限系列は論理を言語ゲーム外的な存在とする。

²⁴ もちろん行為遂行の契機となる表現は特定の個人によって発せられる。しかし論理性付与という行為そのものとその契機となる言明は異なる。例えばウィトゲンシュタインという個人が「私の痛みを他人が知ることができない」は論理命題である」と言うことと「私は「私の痛みを他人が知ることができない」に論理性を付与する」と言うことは別のことである。もし「論理性付与」が個人によって遂行される発話内の行為であれば、後者を発することによりウィトゲンシュタインは「私り痛みを・・・」という命題に論理性を付与することができるはずである。しかしそれは現実にはできない。ある命題に論理性を付与するためには、いかなる個人も「私」であることをやめ「公」を前面に押し出す必要がある。これが公的発話行為の特徴である。

²⁵ 例えば人権宣言の発布などは別の公的発話行為と呼べるかもしれない。一国の憲法の発布は国民という特定の集団によって遂行されるので文字どおりの公的発話行為ではないが、個々の国民の遂行する発話行為に比べると相対的に公的な発話行為と言うことができるだろう。

論理命題である。では拡張された論理概念によって新たに論理の中に組み入れられた基礎的科学命題のような一般的経験命題はどうなるのだろうか。それらはこの意味ではまだ「化石」でない。しかしそれらが教科書に載り、学校で事実として教えられているということは、それらが公的に「真理」として認知されていることを意味している。それらの確実性はどのようなものなのだろうか。それは論理的確実性とは区別されるものなのだろうか。パートDの思考状況においてそれらの地位は明らかに中間的であり曖昧である。それゆえそれは新たな思考が開かれる契機となりうるものである。しかしながらこの段階でウィトゲンシュタインにこの契機を新たに展開する時間は既になく、次のような問いかけで思考の糸は中断しているのである。

しかし例えば解剖学（あるいはその大部分）はどうなるのか。それが述べていることも又あらゆる疑いから免れているのではないか。

（§665）

3.2.1.2 私的存在と私的確実性

ウィトゲンシュタインによって当初論理的確実性と重ね合わされていたムーア確実性はパートCにおいて「それについて私に間違いはありえない」といった超越言明によって表明される確実性として探求され、パートDに至って論理的確実性と区別される別種の確実性として思考される。この確実性は「私」という表現の本来的な使用と不可分である。「私」の本来の使用とは、それぞれの人の固有名や「現在の話者」といった他の表現によって置換不可能な機能を持つ「私」の用法であり、「私は約束します」といった発話行為の遂行における「私」の使用の祖形とも言うべきものである。「私」のこの本来の使用によって出現する存在を私的存在と呼ぶ。今問題にしている確実性はこの私的存在によって付与される確実性であり、私的確実性と呼ぶにふさわしいものである。以下において先ず私的確実性、私的存在、超越言明、の関係がウィトゲンシュタインの短いが圧縮されたテキストにおいてどのように示されているかを見た後、それらの本性について考察を進めたい。

公的確実性と私的確実性の区別が明示的に示される²⁶のは先にその冒頭部を

²⁶ これまでと同様ウィトゲンシュタイン自身は「私的存在」、「私的確実性」という表現を用いない。しかし彼の思考について語るためにはそれを名指す必要があり、彼の思考においてある区別

引用した §657 においてである。

数学の命題は化石であると言えるだろう。—「私の名は・・・」という命題はそうではない。しかしそれも私の様に圧倒的な証拠を持つ者には反駁不可能とみなされる。そしてこれは浅い考えによるのではない。なぜなら証拠が圧倒的であるとは、いかなる反証に出会っても譲歩する必要がないということに他ならないのだから。それゆえここには数学の命題を反駁不可能にしているのと似た支えがあるのである。
(§657)

ここで数学命題と「私の名は・・・」という命題の確実性の類似と相違が示されている。それらは共に「論駁不可能」である点で等しい。いわば確実性の度合いに関しては差がないのである。他方数学の命題が誰に対しても等しく確実であるのにし、「私の名は・・・」は「私の様に圧倒的証拠を持つ者」に対してのみ確実なのである。この「・・・に対して」という限定によって「私の名は・・・」の確実性は公的確実性と区別される。しかしこの限定は、例えば、L.ウィトゲンシュタインという特定の個人に対してのみ存在するという限定でも、(何らかの共通性を持つ) 特定の個人の集団に対してのみ存在するという限定でもない。ある意味でそれは誰に対しても存在する確実性なのである。ただ数学命題の場合のように同一の命題があらゆる人にとって確実なのでなく、それぞれの人にとってそれぞれ異なった命題が同じような仕方では確実なのである。そしてこの「同じような仕方」は「私」という言葉を用いなければ表現できないものである。それは「私の名は L.W.である」という命題が L.ウィトゲンシュタインに対して持った確実性であり、「これは自分の手である」という命題が G.E.ムーアに対して持った確実性であり、「私は・・・と知っている」や「これについて私に間違いはありえない」という言明によって表明される確実性である。これが私的確実性である。次に挙げるテキストでウィトゲンシュタインは自らが「私」として公的確実性との対比において私的確実性を示そうとしている。

数学で何が正しく何が間違っているのかを学校で習うのと、私が自分でそれについて自分に間違いはありえないと言うのは違う。(§ 664)

後者の場合私は一般的に確立されたことに特別な何かを付け加えているのだ。(§665)

この例から明らかなように公的确实性と私的确实性の違いは确实とされる命題の内容の相違でなく、ある命題に対して人がとる態度の相違である。私的确实性とは人が自ら「私」と名乗り「それについて私に間違いはありえない」と言明する時取る態度の相関者であり、その「私」が命題に付け加える「特別な何か」なのである。超越言明において「私」と名乗り、私的确实性を付与するこの存在が私的存在である。次の一節ではウィトゲンシュタイン自身によって私的存在が強調されている。

「それについて私に間違いはありえない」はゲームにおける私の言明の位置を示している。しかしそれは本質的に私に関わりゲーム一般に関わらない。

もし私が間違っているとしてもそれによって言語ゲームが役に立たなくなるわけではないのである。(§637)

私的存在は「私に間違いはありえない」という超越言明によりある命題に私的确实性を付与する。ここで述べられているようにそれによって私的存在はその命題と言語ゲームの関係を示すのであるが、それはゲーム一般に関わる論理的関係ではなく、私的存在にのみ関わる関係なのである。すなわち私的存在は私的确实性の付与において/よって、自己と言語ゲームの間にある個別の関係を打ち立てるのである。この関係は次節で考察することになる「言語ゲーム根底の正しさ」と深く関わるものであるが、それについて考えるためにも私的存在と私的确实性についてもう少し詳しくする必要がある。

私的确实性に関するウィトゲンシュタインのテキストは上に引用したものでほぼ尽くされている。従ってその本性についてはこれまでに展開された思考と適合する限りにおいて我々自身で考察するしかないが、その前に私的存在の反省性を今一度確認しておきたい。私的存在とは「私は知っている」や「私に間違いはありえない」という言明において私的确实性を付与する存在であるから、それは自分を「私」と名乗り得る存在である。「私」という表現（その本来的使用）と独立に私的存在が在り、それが自分の事を「私」と呼ぶのではない。自分を「私」と呼び、「私は知っている」や「私に間違いはありえない」とい

う言明をなしうる限りにおいて何かが私的に在るのだ。私とは自己を本来的な意味で「私」と呼びうる存在なのであり、本質的に言語的存在なのである。

さて私的确实性とは超越言明において私的存在が或る命題に付与するものであり、私的存在とは超越言明において私的确实性を付与する存在であるから、我々が解明すべきは超越言明の意味そのものである。ムーア命題に対して「私は知っている」や「私に間違いはありえない」と言明することによって「私」は一体何をなしているのか、それが明らかになれば「私」がどのような存在で、私的确实性がどのようなものなのかがわかるのである。そしてこれこそパートCの思考を通じてウィトゲンシュタインが追求してきた問いでもある。しかし示された答えは断片的で試行的であった。すなわち、「決定」 (§362), 「表出」 (§510), 「保証」 (§§561,563), 「意図の表明」 (§577), 等である。確かに「私は知っている」や「私に間違いはありえない」にはこうした要素が含まれていられると思われる。しかし決定、保証、意図表明、はいずれも言語的規約により確立された発語内行為であり、「私は知っている」や「私に間違いはありえない」を通じてなされる行為をそれらで説明すると、後者が内包するより根本的なものが失われる。それらは言語規約によって確立された発語内行為ではない。同様に「知っている」や「間違いはありえない」を「痛い」に類する表出と取ることは、たとえそれらにそうした要素があるとしても、言語ゲームのなかでそれらが果たす複雑にして固有の役割を見失う。問題なのはそれら固有の意味・役割、しかも言語ゲームと「私」を結び付けるような意味・役割なのである。

この捕えがたい対象を思考するに当たって、それらの否定形について考えることが一つの導線になると思われる。「私が間違っているかもしれない」、我々はこの表現を責任回避のために用いる。無論それは無償でなされる責任回避ではない。自らの判断や行為の誤りの可能性を認めるという代償を払った上で、進行中の事態や現象の本性や行く末に関して判断責任を回避しようとする言明であり、「今までのことは謝る、でもこれから先の事は良く分からないから俺に聞かないでくれ」といったメッセージを暗に含んでいる。同様に「私は知らない」あるいは「私は知らなかった」は無知の告白という代償を払った上で知る者に必然的に伴う責任を回避しようとする発話である。このように知や确实性の表明と責任の間には微妙ではあるが内在的な関係が存在する。ここで「私は・・・と知っている」に目を移すなら、この発話は「私」にある種の責任の引き受けを迫るものである。「どうしてそうとわかるのか」という質問はその責任を果たせという要求に他ならない。そして通常「私」は、「・・・がそう

言っていた」、「これを見ろ」、「それは論理的事実だ」、等と言う事によりその責任を果たす。より正確には責任を他人や公的権威に回すことにより自己の責任を終わらせるのである。知を巡る言語ゲームは「私」をこうした責任の流通の中に置く。それはある事の真理性の源泉を保証する責任であり、認知責任と呼ぶべきものである。通常の言語使用で「私」が責任を他に回すとは、「私」の認知責任が有限であるということである。「根拠がある」とはこうした事態であり、「根拠が無い」とはこうした有限責任を果たすのに失敗したということである。ここでムーア命題、ムーア知に戻ろう。ウィトゲンシュタインによって繰り返し述べられたように、その特徴の一つは無根拠であるということである。ムーアが「ここに自分の手がある」の真理性に対しどのような理由・根拠を持ち出そうとも、それは元の「ここに自分の手がある」より確実ではありえない。この意味でそれは根拠を持たない。ムーア命題とは他を支えても自分を支えるもののない命題なのである。従ってムーア命題について「私は知っている」や「私に間違いはありえない」と言う事は、通常のやり方では果たしきれない認知責任を負うことになる。「どうしてそうとわかるのか」という要求に対して「私」は答えられないのである。これが当初ウィトゲンシュタインがムーア命題に対して「私は知っている」と言うことを批判した理由であった。しかし通常の仕方でも果たし得ない責任を負うことは必ずしも非難されるべきことではない。通常の仕方でも果たし得ない責任とは、他人の認知的権威や公的権威に回し得ない責任であり、有限の時のうちに終了しない責任である。それは最終的に自分が負い続けなければならない無限定な最終認知責任である。無根拠な、しかし確実なムーア命題に対して「私は知っている」あるいは「私に間違いはありえない」と言うことにより「私」は無限定な最終認知責任を引き受けるのである。

私的確実性とは「私」によるこの無限定な最終認知責任引き受け行為そのものである。私的確実性とはこの行為に先立って非表明的に存在し、「私」によって見出され、「私は・・・と知っている」という発話によって表現される認知状態ではない。なぜなら今問題にしている「私は・・・と知っている」や「私に間違いはありえない」という行為は決して「私」によって自発的になされる行為ではないからである。自分の認知と行為理由に対する挑戦、批判、否定に遭遇して「私」は初めて何事かに対する最終認知責任を引き受けようとするのであり、そこにおいて出現する認知的実践的態度が私的確実性なのである。例えばムーアは観念論という挑戦を受けて「私はこれが自分の手だと知っている」

と言明したが、その挑戦がなければこうした言明は夢にも考えつかなかったであろう。このように私的確実性は外的に触発され生じ、その起源においてすでに反省的である。同時にそれは観念論や懐疑論といった特別の挑戦が存在する場合にのみ生じる存在する例外的存在でもない。個々の「私」にとってそれは外的であるが、言語そのものにそれは内在し遍く存在するのである。なぜなら非反省的な「確実性」が「単に自明として前提され、決して問題にされず、言葉にされることすらない」 (§ 87) という状態に無際限に在り続けるのはただ言葉を持たない存在においてのみだからである。言語はその起源において反省的であり、否定と疑いと挑戦の中で生まれた。それゆえに言語の根底にはそれ以外の存在にはみられない固有の知としての反省知が存在するのである。「知の概念と言語ゲームの概念は一体となっている」 (§ 560) のである。

こうした無限定な認知責任を引き受けることにより私的存在は言語ゲームの中に入ってゆく。そこに一つの正しさが存在するのである。本論の最後にこの正しさについて考察しよう。

3.2.2 私的存在と言語ゲーム根底の正しさ

既に述べたように第三部までウィトゲンシュタインは二種の正しさを思考していた。生態学的正しさと公的正しさである。生態学的正しさとは生物一般に適用される地球環境において意味を持つ概念である。それは各生物個体の自己の種という環境内存在への適合であり、我々人間に動物存在を与える正しさである。ウィトゲンシュタインが第三部で太古の人間やリスについて語った後「同じ事が繰り返し起こったというのはそのことの証明ではない、しかしそうだと想定する権利を与えると我々は言う」 (§ 295、下線引用者) と述べる時、彼が思考していた「正しさ」とはこうした生態学的なものである。他方公的正しさとは上で考察した公的確実性としての「論理」への適合であり、公的確実性が確立される場である言語ゲームの内部においてのみ意味を持つ正しさである。この「論理」には狭義の論理と同様の普遍的な確実性を持つ全ての命題（例えば狭義の文法命題のように）が含まれる。ウィトゲンシュタインが「ムーアによる「私は・・・と知っている」という命題の誤った使用」 (§ 178) といった表現を用いる時、彼が想定しているのはこの公的正しさである。

第四部後半に入り私的確実性を公的確実性と区別して思考するにつれ、ウィトゲンシュタインは明らかにこれら二種の正しさとは異なる第三の正しさについて思考し始める。私的確実性と私的存在と深く結びついたこの第三の正しさ

について考察するのが我々の最後の課題である。

それは次のような思考によって触れられている正しさである。

しかし他方私自身について「自分の名前について私に誤りはありません」と言うのは正しく、「多分私は間違っている」というのは誤りである。しかしだからといって私が確かだと言ったことを他人が疑うのが無意味なわけではない。(§629、下線引用者)

もし私が「私は月に行ったことはない—しかしひょっとしたらそれは間違いかもしれない」と言うなら、馬鹿げている。

というのも、未知の手段によって眠っている間に月まで運ばれたかもしれないという考えでさえ、私がここで間違いの可能性について語る権利を与えないからである。そのように語るなら私は誤ってゲームをすることになる。(§662、下線引用者)

たとえ間違っているとしても「これについて私に間違いはありません」という権利が私にはある。(§663、下線引用者)

ここでは自分の名とか月に行ったことがないという私的確定性を持つ事柄に関して自分の誤りの可能性に言及することの誤りが述べられている。ここで想定されている正しさとはこれらの事柄について「私は・・・と知っている」あるいは「私に間違いはありません」と言う事の正しさであり、私的確定性を持つ事柄に対して最終認知責任を引き受ける事の正しさであり、それを通じて私的存在となることの正しさである。こうした事はなぜ正しいのだろうか、それはどのような正しさなのか、これが我々の問いである。

まずこれが何らかの形で公的な正しさと考えられないか考察したい。もしこれが「論理」に訴える公的正確さなら、それは「私」の使用法、すなわち「私」の文法に由来する正しさでなければならないだろう。もしそうだとすれば最終認知責任を引き受けることや私的存在になることは、「私」の文法に則って「私」を正しく使用した結果として成立する事態ということになる。すなわち私的存在とは公的規範の一項目としての「私」の使用法への適合が生み出す存在ということになり、公的なものと区別される存在ではないことになる。私的存在とは「私」の文法というマニュアルによって製造されることになる。しかしこう

した逆説的な事態は起こり得ない。何故なら「私」の文法を特定するためには最終認知責任引き受け対象としてムーア命題を特定しなければならないが、「私」やその同義語を使わずに「ムーア命題」を特定することができないため、仮に「私」の文法が存在するとしても、それは「私」を使わなくては書けないからである。それは既に「私」を使いうる者のみが理解しうる文法なのである。そればかりではない。仮に「自分自身の名前」、「自分自身の身体が存在」といった表現を用いたとしても一個の「私」の「ムーア命題」を一般的に特定できるかどうかは極めて疑わしい。結局それは「私」にとって私的現実性を持つ事柄としてしか特定できないからである。次の一節が表現しているのはこうした思考である。

しかし、私に間違いはありえないと言うのが正しいような一定のタイプの場合が存在する。ムーアはそうした例をいくつか挙げたのだ。

私は様々な典型的場合を列举できるが共通の特徴を挙げることはできない。・・・ (§674)

このように私的存在である事の正しさがいかなる論理や規則からも由来しないとすれば、それはどのような正しさなのだろうか。上で引用した § 637 に述べられているようにそれは「私」の「言語ゲームにおける位置」に関ると考えられるが、「私」と言語ゲームはどのように関わり、そこにどのような正しさが存在するのだろうか。この問題に対する糸口として、言語が本源的に反省的であると考え以前にウィトゲンシュタインが言語ゲームの本質としての現実性について示した思考が役立つ。そうした思考の不十分さを辿ることにより、我々は「私」が必然的に介在せざるをえない言語ゲームの真の根底について考察することができるのである。例えばそれは前にも紹介した次のような思考である。

しかしより正確には次のようになる。私が自分の文で「手」や他のあらゆる語を疑念無く使っているという事、そして疑おうとするや否や途方に暮れるだろうという事は疑いの不在が言語ゲームの本質に属すること、そして「私はどのようにして知るのか」という問いが言語ゲームを引き伸ばしたり終了させたりすることを意味している。

(§370)

この節から少し離れて示される子供に関する次の思考は、問題になっている語の意味や事物の存在の確実性が自らそうと語られることのない非反省的なものである事を示している。

我々は子供に「それはお前の手だ」と教えるのであり「それは多分（あるいは恐らく）お前の手だ」とは教えない。子供はこのようにして自分の手に関する数え切れない言語ゲームを習得する。そして「これは本当に手だろうか」という探究や質問を思い付くことは決してない。他方子供はこれが手だと自分は知っているのだと習うこともない。
(§374)

疑われることも、問いただされることも、自ら表明されることもないこうした非反省的確実性はまさに『哲学探究』§2の建築家と弟子の言語ゲームを原初的言語ゲームたらしめている確実性である。しかしこの原初的言語ゲームはまさにその非反省性ゆえに言語ゲームたりえないのである。このことは、例えば、建築家が石板が無いのに弟子に「石板」と命令する場面を想定すれば明らかになる。建築家がこのように言うのが不注意のためか悪意のためかは今問題ではない。§2の設定に従う限り弟子はどうしてよいかわからず「途方に暮れる」しかない。それはボールを取ってくるように訓練された犬がボールの無い場面で「ボール」と言われ対応できないのと全く同じである。これは弟子や犬の知識が不足しているためではない。そこに成立しているのが言語ゲームではなく音声信号に対する反応の体系だからである。§2の設定をより複雑にしても、例えば対象が存在しない場合には首を振るといったふうにしてもそれは言語とまらない。弟子が首を振っても建築家が「石板」と命令し続けたり、あるいは無言で立ち去ってしまうなら、弟子はやはり対応できないのである。予め設定された場面に対する対応の体系はいかに複雑となっても反応の体系であり、設定外の出来事には対応できない。と言ってもここで問題になっているのは新たな事態に対する一般的な対応能力ではない。例えばボールを取ってくるよう訓練された猫がボールの無い場面で繰り返し「ボール」と言う飼い主に愛想をつかして立ち去るなら、猫は見事な対応力を持っていることになる。しかしこの猫は言語ゲームをしているわけではない。問題になっているのは言語として適切な対応なのである。それがいかなるものかは、我々の言語において上記の事態が生じた場合どうなるを考えればよい。石板がないのに親方が「石板」と言

えば弟子は「あの一、石板ありませんけど」と言う。親方が「そうか」といえばこのやり取りは終了するし、「そんなはずはない、昨日仕入れたばかりじゃないか」と言えば弟子は「だって、ありません」とか言うだろう。そして親方が「本当に無いのか、間違いじゃないのか」と確かめれば、弟子は「間違いなくありません」と言う。ここに示されているが言語固有のやりとりである。それは§2の建築家と弟子の間にも飼い主とペットの間にも見られないものである。こうしたやり取りを可能にしているもの、すなわちここに言語を在らしめているものは石材が無いという自分の事実認識を言明しうる弟子の反省的「能力」である。この点をより明らかにするため母親と子供が石材ゲームとするとした場合を考えよう。母親の命令に従うばかりで自らが命令することを知らなかった子供が突然「石材」と言う。母親は「あら「石材」だって、あなたそれどういう意味が分かってるの」と問いただす。子供が「分かんない」とか「ママがそういった」等と言えば母親は子供がまだ命令という行為をなしえないことを知り、このやり取りはここで終わる。他方子供が「分かっているよ、今度は僕がママに命令するんだ」などと言えば母親はその能力が子供に芽生えたことを知り、やり取りは続行される。この場合言語的やり取りを可能にしているのは言葉について自分が知っていることを自ら表明できる子供の反省的「能力」である。

これら二つの例で弟子や子供に見られ、元の§2の「言語ゲーム」の弟子に見られないのは、周りの事物の存在と言葉の意味を知っており、しかも自分がそれを知っていることを知っていることである。「自分がそれを知っていることを知っている」とは内省によって自分の認知状態を認識することではない。外的な批判、質疑、等に対して必要に応じ「私は・・・と知っている」と相手に確言できることである。それは事物の存在と言葉の意味に関する根源的な反省知であり、言語ゲームの根底を成すのは非反省的な確実性ではなくこの反省的確実性なのである。言語ゲームは多くの場合反応の体系と外的に区別がつかない。しかしそうした状態は決して無際限に継続しない。様々な契機により、批判、質疑、否定、とそれらに対する応答という反省的自己言及的やり取り（その形態的特徴は「・・・と言った」、「・・・と思う」といった回帰的構文が使用されることである）に言語ゲームは突入する。問題が解消されたならゲームは再び常態へと戻る。言語ゲームの進行にこうして割って入ってくる反省的プロセスは言語ゲームの例外ではなくその本質なのである。それは言語の存在の始りよりあるのであり、言語を言語たらしめ反応の体系と区別するものである。

こうして我々は再度言語の本源的反省性に辿り着いたのであるが、ウィットゲンシュタインの言う「正しさ」と「誤り」はこの本源的反省性に深く関わるものである。

ウィットゲンシュタインのいう誤りとは、ある種の反省的プロセスにおいて相手の質疑に対して「私は間違っているかもしれない」と対応する事の誤りである。それは上の例で出てきたどの対応とも異質な対応である。『哲学探究』§2の言語ゲームで石板が無いのに「石板」と命令された弟子の、どうしていいかわからない、という対応は現在何が進行しているのか弟子が知らない事を示している。この時弟子は使用されている言語に対して言語外的存在なのである。言葉を知らない異国において我々はこうした状況に立たされる。言語外的存在であることは我々を窮地に追い込むが、それは我々の誤りなのではない。他方母親に対する子供の不案内な対応は子供が言語を習得中であることを示している。習得中であることもまた誤りではない。他方「私は間違っているかもしれない」という対応は場合によって誠実さや慎重さを示しうる対応であり、これもそれ自身が誤りなのではない。問題なのは「ムーア命題」の表現する特定の事態、すなわち自分の使っている言葉の意味や身の回りの事物の存在に関する基本的事態についてこうした対応をすることなのである。上の親方と弟子の例に戻ってこうした対応が何を意味するのか考えてみよう。「石板はありません」という弟子に親方が「間違いじゃないのか」と言う時、弟子が「石板はありません、でも私は間違っているかもしれません」と言うでしょう。このように言われた時親方は「間違いかもしれないのなら何故始めに「石板がない」というのか」と言うだろう。そうした批判に対して弟子はいかなる事についても常に最終的に「私は間違っているかもしれない」と言うとする。こうしたやり取りを更に具体的に想像することは極めて困難であるが、この弟子のような人がいて、しかもこうした対応を親方に取り入れるためにでなく、真剣に、誰に対してもすること、それをウィットゲンシュタインは「誤り」と呼ぶのである。それは何故誤りなのだろうか。

現実にはこうした人間が存在しうるとは考えられない。しかしこれに類する在り方を通常我々は「あの人には自分がない」と呼ぶ。この表現が示すように、こうした存在は私的存在でないという意味で「私」を全く持たない存在である。我々は自分の言葉や身の回りに関する最小限の事柄について誰に尋ねるまでもなく確実と感じ、それに対して無限定な最終認知責任を一人で引き受けることにより私的存在と成り、私的存在として在る。こうした事柄を私的根底領域と

呼ぶことができよう。我々是一群の事柄に対して最終認知責任を引き受け、それを私的根底領域とすることにより私的存在として在るのだ。私的根底領域はいかなる意味でもプライベート（私秘的）な領域ではない。それは他者の目から遮られていないし、そこから他者が排除されてもいない。同一の事実は何人もの私的存在の根底領域に同時に属しうる。その根源において私的存在とプライバシーは無縁なのである（なぜ私的に在ることによってプライバシーがかくも本質的と考えられるのか）。一群の事実が私的根底領域となるのは、ある存在がその真理性に対する責任を他人や公的規範に頼ることなく全く無根拠なものとして自分一人で引き受けるからであり、引き受けることによってのみ自分が存在しうると感じるからである。こうして私的根底領域を一人で引き受けることにより、私的存在はそれに関して他の一切の認知的權威に依存することなく判断を下せるようになる。これが私的存在の根源的自由である。私的根底領域²⁷は私的存在の自由の源泉なのである。言語ゲームとは私的根底領域を持つ自由な私的存在が互いに語り合う事により作られる世界である。そこにおいて私的根底領域は互いに他に対する潜在的抵抗となり（弟子は時に親方に反抗する）様々な契機により批判、質疑、否定、応答、支援、といった反省的な言語過程が生起する。この過程が語り合うことの本質であり、言語を言語とするものである。それゆえ本質的に言語は私的で自由な存在によってのみ担われる存在である。それは本源的に私的な源泉を持つ。他方私的な存在は「私」という語を介して言語という場においてのみ存在する（「私」と言える者だけが私的に存在する）。それは本源的に言語的存在である。ウィトゲンシュタインの言う誤りとはこの本源的に言語的な私的存在が自らの根底領域を溶解させ私的存在として存在することを止めることの誤りであり、自らの自由を放棄することの誤りである。それは言語的存在にとって、存在に背くこととしての誤りなのである。

²⁷『確実性』においてウィトゲンシュタイン自身は全く触れることがないが（何故だろう）、いわゆる「倫理的」事実もこの私的根底領域に属する。より正しくは、倫理はある存在の私的根底領域に属する限りにおいてのみ倫理として意味を持つ。私的領域から倫理的命題を抽出し一般化する営みとしての「倫理学」は倫理の化石である。

付論：『確実性』第四部のテキスト構造とスタイル

1. 『確実性』第四部のテキストの特徴と構造

本論で述べたように『確実性』第四部は第一部から第三部に比べよりリアルタイムな思考生成の場という性質を持っている。その結果として第四部の思考の動きはこれまでより遥かに動的で大きなものであり、サイクリックにシーケンスを重ねてゆくという通常の運動構造に加え、前半・後半という大構造とA-B-C-Dという中構造を持っている。こうした特性と構造の存在と意味は第四部の解説が完了した時に完全に明らかとなるものであるが、同時に第四部のテキストに様々な外的・形式的・可視的な痕跡を残しており、それらを辿ることにより内容分析と独立に把握可能なものでもある。付論ではこうした可視的痕跡を通じて第四部の特性と内部構造を示したい。

第四部のテキストは第三部までのテキストにない二つの可視的特徴により区別される。すなわち（１）日付の存在、（２）メタ哲学的コメントの存在、である。以下それぞれについてその具体的現れとその意味について論じたい。

2. 『確実性』第四部テキストにおける日付の存在

『確実性』第一部から第三部のテキストに日付は、第三部末尾に一箇所存在するだけである。それに対し第四部のテキストは始まりから終わりまで日付が付されている。両者の対比は決定的である。これは何を意味するのだろうか。確実に言えるのはこの相違が散発的・偶発的なものではなく、ウィットゲンシュタインの根本的な態度の相違を反映した系統的なものであるということである。手稿ノートを前にして思索し、その結果を書き付けてゆくという営みを何日にも亘って行なう際、この書き連ねという行為に日付というパンクチュエーションを与える思索モードと与えない思索モードが存在し、第一部から第三部のウィットゲンシュタインは「日付与えないモード」にあり第四部のウィットゲンシュタインは「日付与えるモード」にあったのだとすることができるだろう。ではこれら二つのモードとは何であり、それらの相違は何なのか。これについては仮説的想定以上のことはできないが、一般的に次のように考えることができるだろう。作家がものを書く場合、書かれるべきものがすでに頭の中に存在していれば、それをノート上（あるいはパソコン上）に書き付けるのに何日もかかったとしても、その区切りは日付ではなく章や項目により行なうのが自然であろう。他方書かれるものが未だ見えず、書き付けが創作ノートと試作の混合の様なものであれば、ある日にどれだけの事が考えられ試されたかを記録する目

印としての日付というものは有用であろう。例えば数日前に試したが結局放棄したアイデアを更に展開するやり方を突然思い付いたとすれば、日付を頼りにその試みの記録を探することができるだろう。あることを何日か前に試したということは記憶していても、ノートのどこに記録したかを記憶していないことは大いにありそうだからである。ウィトゲンシュタインの場合もテキストの日付とはリアルタイムの思考創出・試行の記録に与えた検索用のタグであると考えられる事ができる。これが単なる思い付きではなく、ウィトゲンシュタインのテキスト生産様式に関する一つの仮説となりうることは『論理哲学論考』にまつわる三つのテキストの関係を考えれば明らかだろう。その三つのテキストとはA「1914-16 のノート」(MSS101-103)、B「原論考」(MS104)、C『『論考』出版の際のタイプ原稿』(TS203)である。これらは『論考』という書物をウィトゲンシュタインが生み出した過程の記録であり、その営みの異なる三つの段階を表わしていると考えられる。それらの関係を考えることはウィトゲンシュタインによるテキスト生産の様式の一つのパターンを仮説的に想定することに他ならないが、三者を比較する時次の様な三段階が存在すると想定することができよう。テキストAは明らかにその生産時にウィトゲンシュタインの思索がリアルタイムな創造段階にあることを示している。他方テキストBはそうして創出され、試行されたものからエッセンスを一挙に紙上に定着した結果だと考えることができる。ただその内容は主題別に系統的に展開されているのではなく、複数の主題を同時に展開させながら定着させるというウィトゲンシュタイン特有の様式を留めている。それに対してCは細部の相違はあるものの、Bの主題別の並べ替えであり、独特のナンバリングはこうした並べ替えの道具であるとされる。今これらの三段階を、A段階、B段階、C段階、と名付け、それぞれの段階で生産されるテキストの形式と性質をまとめると次のようになる。これを「ウィトゲンシュタインによるテキスト生産の三段階説」と呼ぶことができよう²⁸。

²⁸ 同様の仮説はすでにフォンライトによって提起されている。しかし彼の説は日付を持つテキストを持たないテキストより「仕上げられた」とみなす点において我々のものと異なっている。フォンライト「ウィトゲンシュタインの遺稿」、飯田隆編『ウィトゲンシュタイン読本』、pp.338-339を参照。

<図 13 ウィトゲンシュタインによるテキスト生産の三段階説>

テキスト生産段階 （『論考』での例）	テキストの形式	テキストの性質	テキスト生産行為 の性質
A段階 （MS101-103）	日付入り手稿	試行的、反復的、日記的	創造的、試行的
B段階（MS104）	日付なし手稿	集約的、非主題的順序	通覧的、導出的
C段階（TS203）	タイプ原稿	Bの並べ替え、主題的順序	提示的、編集的

この仮説はウィトゲンシュタインによるあるテキストの生産過程が常にA段階-B段階-C段階という三つの段階を経て行われる事を主張するのではなく、ウィトゲンシュタインのあらゆるテキストはA、B、Cのいずれかの段階に属し、それに応じた成り立ちと性質をもつことを主張するものである。現実のウィトゲンシュタインのテキスト生産はこの三段階の様々なバリエーションとして実現されていると考えられる。例えば同一の手稿ソースから異なったタイプ原稿が何通りも作られるというのは頻繁に行われたことであるが、それは同一のB段階から複数のC段階が枝分かれすることを示している。あるいは一つのタイプ原稿が何度か作り直されるとか、一挙に定着できると思われたB段階原稿が途中で放棄され、後で何度か繰り返されるということが十分に想定できるし、現実にはその例と解釈できるものが遺稿中には存在している²⁹。ウィトゲンシュタインの遺稿はこうした様々なプロセスの破片で満ちており、たまたま彼の著作として死後出版された「著作集」も異なる段階のテキストの寄せ集めであるように思われる。しかし現実には生み出されたものが如何に不完全で、反復的で、断片的であったとしても、それらを試みた時ウィトゲンシュタインがこれら三つ思考モードのいずれかににあったのだとすれば、この三段階はウィトゲンシュタインのテキストを理解する際の重要な指針となるだろう。今『確実性』のテキストにこの三段階を当てはめるなら、第一部、第二部、第三部はB段階に属し、第四部はA段階に属していると言える。第四部に対応したB段階テキストが存在しないのは当然であるが、第一部-第三部に対応したA段階テキストの存在は一つの興味深い問題である。ここで定着された思考が初めて

²⁹ 同一のタイプ原稿の作り直しの例としては戦前版『哲学探究』後半部（TS221）とフォン・ライトラによって編集された『数学の基礎』パートI（TS222）の関係がそれに当たる。何度もB段階が試みられた例としてはMS115に残されている『茶色本』の改訂の試みがそのように解釈できる。

生み出された場はどこなのだろうか、そうした過程を記録しているテキストは存在するのだろうか、あるいはかつて存在していたのだろうか、それともそれはウィトゲンシュタインの頭の中でのみ生じた出来事なのだろうか。これらの問いに対する答えは見つかるかもしれないし見つからないかもしれない。しかしその結果によらずこうした問いかけをすることはウィトゲンシュタインのテキストを理解するさいの重要な手がかりとなるのであり、それが三段階説の最大の効用である。

3. 『確実性』第四部テキストにおけるメタ哲学的コメントの存在と分布

メタ哲学的コメントとはウィトゲンシュタインが現在の思考の対象についてではなく、その対象について自らが行なっている思考行為について為すコメントであり、典型的には次のようなものである。

私のノートを読むことは哲学者にとって、自分で考えることのできる哲学者にとって興味あるだろうと信じる。なぜなら的には極たまにしか当たらないが、私がどんな目標に向かって絶え間なく撃ち続けてきたのかを読んだ人は認識するだろうから。(『確実性』 §387³⁰)

こうしたメタ哲学的コメントの存在と分布は上述の三段階説と無関係ではない。もしウィトゲンシュタインの思索とテキスト生産にA、B、C、の三段階が存在するなら、メタ哲学的コメントはA段階のテキストに多く見出されるはずであろう。逆にメタ哲学的コメントがあらゆる種類のテキストに偏りなく分布しているなら三段階の存在は疑われるべきであろう。次に示すように『確実性』に関する限りメタ哲学的コメントの分布は三段階説を支持している。図 14 に示すように『確実性』に登場するメタ哲学的コメントは 15 を数える（それらすべてが完全に理解可能なわけではない）。そのうち 12 が第四部に登場するという事実は第三部までがB段階テキストであるのに対し第四部はA段階テキストであるという我々の想定と良く符合する。

³⁰ 『確実性』の原テキストではメタ哲学的コメントの多くは前後を一重縦線で挟まれ、付加的コメントであることが示されている。アンスコムら『確実性』編集者は多くの場合これらをブラケットで囲み、小節数を与えていない。本稿では参照の便のため次のように記号を用いた。もし §387 の次に前後を空行で仕切られていながら節番号が与えられていない小節が存在すればそれを「§387'」として表わす。

＜図 14 『確実性』に登場するメタ哲学的コメントとその分布＞

部	節 番 号	コメントの内容
第一部	31	魅入られたように人が繰り返して立ち戻る命題を私は哲学的言語から除去したいのである。
	33	こうして我々は少しも我々を前進させない命題を除去するのである。
第二部	76	もちろん私の目的はここで言いたくなるが、しかし有意味には言えない言明を示すことである。
第四部 (前半)	305	ここで今一度相対性理論でなされたような一歩が必要である。
	387'	私のノートを読むことは自分で考えることのできる哲学者にとって興味ある事だろう なぜなら的にはたまにしか当たらないが、私がどんな目標に向かって絶え間なく撃ち続けてきたのかを読んだ人は認識するだろうから。
	400	ここで私は自分が本当に言いたいことが未だ言えないために風車と戦おうとしてしまう。
	405	しかしここにはなお誤りがある。
	418	私の理解とは自分の理解の無さに対する盲目に過ぎないのではないか。 しばしばそのように思える。
	422	こうして私はプラグマティズムのように聞こえることを言おうとしているのだ。 ここで私は一種の世界観に邪魔されている。
	435	人はしばしば一つの言葉に惑わされる。 例えば「知る」という言葉に。
	470'	ここで私の思考にはなおギャップが存在する。 そしてそれが埋められるかどうか疑わしい。
	471	始りを見出すのは困難である。 始りから始めること、そしてそれ以上戻ろうとしないことは困難である、と言った方が良いかもしれない。
	532'	私は今いつも眼鏡や鍵といった物を置き忘れては探している老婆の如く哲学をしている。
	549'	自負は哲学者の思考力にのしかかる抵当である
	601	ある表現の意味を、常に実践について考える代わりに表現自身や表現を使う時の気持ちについて考えることにより見出そうとする危険が常に存在する。 このため我々は表現をかくも頻繁に自分に繰り返すのである。

さらにこの表は第四部に登場する 12 のメタ哲学的コメントのうち 11 が前半部に登場することを示している。もしメタ哲学的コメントの存在がA段階テキストの持つ創造性、試行性の外的指標であるとすれば、これは我々が見出した前半部と後半部という構造がウィトゲンシュタインの思考のモードの変化に対応したものであることを示していると考えられるだろう。すなわちこの表に見られるメタ哲学コメントの分布は『確実性』の中では第四部が、そして第四部の中では特に前半部がより創造性、試行性の強いテキストであることを示唆しているが、これは本論で示した思考運動の具体的分析とも一致するのである。

The Final Thinking of Wittgenstein—an analysis of the last part of *On Certainty*—

Abstract: This work tries to elucidate the final thoughts that Wittgenstein had reached at the last stage of his philosophical life, which, therefore, can be named his "conclusions". It is done by tracing his thought movement in the last part of *On Certainty*(§§300-676). This part is further divided into two halves(the first half: §§300-554; the second half: §§555-676). Wittgenstein's thought shows a dramatic development from the first half to the second in terms of the key concept: the reflexivity of linguistic knowledge. Through this development, his view of language changes from a naturalistic one, which is akin to the one observed in *Philosophical Investigations*, to a non-naturalistic one. As a conclusion, we argue that he had reached a view that language games can be performed only by independent self beings, which are the beings that are able to name themselves as "I".